

324

357

5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



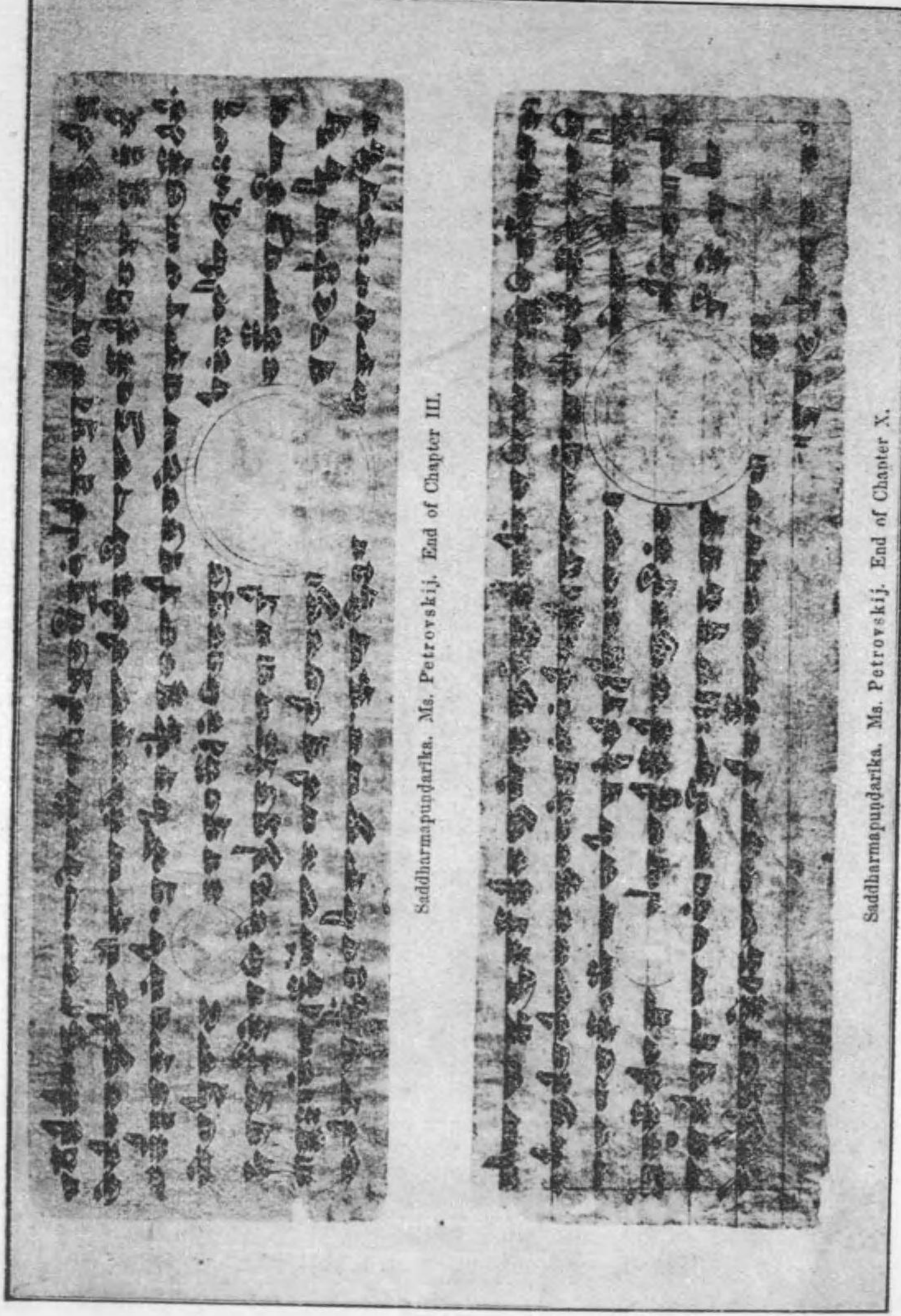
324-357

嶺南雜記



大正
2. 9. 29
內交

この梵夾は露國ストロヴスキ氏の所蔵であつて、カ
シヤガル地方から發掘した法華經の斷片である。惜しい
哉全經の五分の二種しが無いが、然し「序の二」にも述
べてある如く、尼波羅の梵夾よりも數百年前のものであ
り、書體も極めて古雅である。梵本出版に當つて非常に
裨益するところがあつたのである。ここに掲げた
内で上方の分は譬喻品の終りの方で、本書では二五頁
の一四七偈の第二句から始まつて信解品の初の方へ亙つ
て居る部分に相當する。下方の分は法華品の終りであつ
て、本書の二六五頁三偈の後半から始まつて、見寶塔
品の初め「其の時世尊の」さいふ迄で終つて居る。然し
大分交面が違つて居る。上方の分の終りから二行目には
譬喻品の終つた次に「譬述者何來」(Deyā-dharmo
’vāpi dīṣṭiṃ……)と印度人の名前が出て居るのが
面白い。本書の表紙の文字はこの書體を用ひたので「妙
法蓮華」といふ意味である。



Saddharmapundarika, Ms. Petrovskij, End of Chapter III.

Saddharmapundarika, Ms. Petrovskij, End of Chapter X.

「菩薩摩訶薩」を以て證したる。

面白。本書の表紙の文字は、この書體に用いたが「佛
 (Siddharmapundarika)」と明題の字面を附したるの
 體裁品の終へて「菩薩摩訶薩」(Siddharmapundarika)
 大分支那に傳へたる。上式の字の終りまで二行目に
 品の終り「其の題意の」を以て證したる。然し
 了、本書の二六五頁三三三の終りまで、其の
 了る體裁に相當する。下式の字の終りまで、
 の一四三頁の二二二まで、其の體裁品の終りまで、
 内の上式の字の終りまで、本書の二一五頁
 終りまで、其の體裁に相當する。こゝに證した
 り、書體も終り古體である。其の書體に當つて非常
 へたるは、其の體裁に當つて、其の體裁のよのよ
 其の體裁の正位に二行目を附し、然し「其の二」を以
 ンヤリ、其の體裁に當つて、其の體裁のよのよ
 の體裁に當つて、其の體裁のよのよ

この寫眞は明治四十一年から去年までかゝつて露部に於て出版し今や全部完成した法華經梵文の刊本の壹葉である。これは妙音菩薩の一節であつて。本書では四七六頁の三行目「かの眞珠の璽路を」より以下四七七頁二行目の「諸根を放縱ならざらしめよかし」に至る間に相當する。中程から以下番號を付して書いてあるのは校訂の脚註である。これだけの校合を経て漸く本文が讀み得べきものとなるのであるから。梵本校訂の努力の如何に多大なるかも想像するに難くないであらう。

ते मुक्ताकारं भगवतः पूजाकर्मणि निर्यातयामास निर्यात्य च भगवत्तपतद्वोचत् । कपल-
दलविमलतत्रराजसकुमुदिताभिज्ञो भगवांस्तथागतो ऽर्कसम्यक्संबुद्धो भगवतः परि-
पृच्छत्यल्पावाधतां धत्पातङ्कतां लघूत्थानतां यात्रां बलं मुखसंस्पर्शविकारतां । एवं
च स भगवानवोचत् । कश्चित् भगवन्तमपायीं कश्चियपनोयं कश्चिद्वातवः प्रतिकुर्वीत
कश्चित् सत्ताः स्वाकाराः सुवेनेयाः मुचिकित्साः कश्चिद्दुर्विकाया मातीव रामचरिता 5
मातीव द्वेषचरिता मातीव मोक्षचरिता मातीव भगवन्तत्रो ईर्ष्यालुका मा मत्सरिणो
मामातृणां गार्पितृणां माध्याभयया माभ्राह्मण्यया मा मिथ्यादृष्टयो मादास्तचित्तां मामुत्प्रेन्द्र-

- 1) निर्यातयित्वा A. W.; O. here again beginning with पिप्सा.
- 2) धत्पातङ्कताय धत्पातङ्कताय लघूत्थानताय परिपृच्छति O. त्यत्पातङ्क-
तां A. ति स्म । धत्पातङ्कतां Cb. त्यत्पातङ्कतायत्यत्पातङ्कतां W.
- 3) यात्रां बलं A. यात्रां च बलं च B. यात्रां च बलां च Cb. बलं च W.
MSS. add च after each substantive यात्रार बलं W.
- 4) मुखसं left out in B. से left out in Cb. मुखाय स्पर्शविकारताय O.
- 5) कश्चि A. B. कश्चित्नेन Cb. कश्चि W.
- 6) तप Cb.
- 7) कश्चि B. Cb. W. कश्चि A.
- 8) कश्चिद्वातवः A. Cb. कश्चिद्वा धातव B. कश्चिद्वातवः W.
- 9) कश्चि A. B. केचि Cb. कश्चि W.
- 10) वेनेयाः O. विनेयाः the rest. Cp. Pāli *veneyya*.
- 11) कश्चि मुचि A. कश्चि मुचि B. कश्चि मुचि W.
- 12) ईर्ष्यालुका A. Cb. ईर्ष्यावक्रला B. इर्ष्यालुका J. ईर्ष्यालुका O.
- 13) रिक्ता A. W. रिषा B. Cb. Here begins K. l. 108.
- 14) सा A. B. W. साः K. सताः Cb.
- 15) एया B. एयता Cb. एयाः K. The whole word left out in A. W.
- 16) एया A. B. W. एयता Cb. एयाः K.
- 17) यः Cb. रिष्टका O.
- 18) सा A. B. W. सता Cb. साः K.

此の
我本対信の漢代の成問の意大なるを以て懸念するに類するは
對合の點の漸く本文の點を對するものも多かるるに於て
番譯の終りて書つてあるの對信の編纂である。この對信の
編纂の終りて「の」の字を問の附當する。中譯の思
「の」の字の懸念の懸念の「の」の字を問の附當する。中譯の思
以て懸念の懸念の「の」の字を問の附當する。中譯の思
出題の今や全篇の終りて書つてあるの對信の編纂である。この對信の
この編纂の終りて「の」の字を問の附當する。中譯の思

これは南條先生の手寫の梵文であつて、普門品の初
の方の壹葉である。本書では四八八頁二行目の「壞せむ」
といふ所から九行目の「かくの如きの力あり」までに相
當する梵文である。「序の二」にもある如く六部の寫本
二部の刊本とを以て縦横に校合した苦心の跡を見る
べき稿本である。併せて「序の二」を参照せんことを希望
する。(泉芳瑠)

序の一

今此和譯の原書は、北印度尼波羅國より傳來の妙法蓮華經の梵本なり。又此和譯を始めて雜誌無盡燈の附録させしは、明治三十六年にして、十年を経て今茲に其完成を見るに到れり。初め雜誌の每號に僅かに二頁乃至六頁を出だせしも、其業甚だ遅緩にして、人をして果して其完成を見得べきやを疑はしめたり、是れ固より余の布教の爲めに四方に奔走して、席暖かなるに違まあらざりしに由るに雖も、自ら省りみて常に慊焉たりき。是に於て泉芳璟君余に代りて専ら其任に當り、余をして後顧の憂なく、連年北海道樺太より朝鮮支那にも到ることを得せしめたり。故に共譯と云ふに雖も、泉君の譯は十之七八に及べり、而し

て余は唯其原本を供給せしに止まりしなり。

二

明治三十七八年の交友人文學博士高楠順次郎君英京より書をオランダの梵學の大家「ケールン」博士に寄せ、余の校訂せし法華經梵本の刊行を謀られしに、博士は己に二十餘年前に此經全部の英譯を作りし時の梵文の校訂本もあり、且つ「カシユガル」地方より發見せし上古の寫本の斷片をも參考して、之を世に公けにせんことを露國の首府に在る帝國大學の委員に照會し、余と協同の事業とすべきことを承諾せられたり、この報を得たり。因りて直ちに全經を清書して其材料に供せしに、西曆一千九百八年即ち明治四十一年に其第一冊の刊本を見ることを得たり、翌年には第二第三の二冊、又其翌年には第四冊、而して去年一千

九百十二年即ち大正元年には第五冊の刊本を發行して、佛滅後三千年の今日、始めて法華經全部の梵文の刊本を見るに到れり、是れ亦「ケールン」高楠兩博士と露國の帝國大學委員との厚誼の結果なり。

三

前項に謂ふが如き始末を以て發行せられし刊本なれば、或は今此和譯と一致せざる所なきを保せず、如何となれば、和譯の原書は六部の寫本と信解普門二品の梵文の刊本とを參考せしこと雖も、寫本は均しく尼波羅國傳來のものにして、大異同なきも、カシユガル「發見の斷片は尼波羅の寫本よりも數百年前の寫本ならんことあれば、ケールン」博士の取捨する所或は同一の結果に出でざることあるを免かるべからざればなり。

四

余の謄寫し校合せし寫本六部とは、第一は英國倫敦の亞細亞學會、第二は同府のブリテイッシュ博物館、第三第四は同國劍橋大學、第五は英人「ワツタルス」氏、第六は河口慧海氏所藏の尼波羅傳來の梵本なり、又二品の刊本とは、佛人「フォー」氏の校訂出版せし信解品と、英人「ワイリ」氏の北京に於て得し木版の梵經帖中の普門品となり、此帖中には金剛經と般若心經の廣本等もあり。右の外に佛國巴里の圖書館に二部と印度カルカッタの亞細亞學會と維廉堡學校にも各一部ありと聞けども、余は未だ之を見ざるなり。

五

法華經の支那譯は全分のもの六部と一部分のもの二部あり

しに、其中の四部は唐の開元以前に已に闕本となりしとなり、即ち開元釋教錄第十一卷に現存の四部を列ね、第十四卷に闕本の四部を列ぬ、左の如し。

第一譯(闕) 佛以三車喚經一卷 應是譬喻品

吳月支優婆塞文謙譯(西曆二百二十三年至二百五十三年間)

第二譯(闕) 法華三昧經六卷 一本加正字

吳外國三藏支彊良接譯(西曆二百五十五年或二百五十六年)

第三譯(闕) 薩芸芬陀利經六卷

西晋三藏竺法護太始年譯(西曆二百六十六年至二百七十四年間)

第四譯(存) 正法華經十卷 或云方等正法華

西晋月支國三藏竺法護(太康七年)譯(西曆二百八十六年)

此經は縮刷藏經盈二の一紙右より五十七紙左迄なり

第五譯(存) 薩曇分陀利經一卷 寶塔提婆二品中少分

失譯人名今附西晉錄(西曆二百六十五年
至三百十六年間)

此經は盈二の百六紙左より百七紙左迄なり

第六譯(闕) 方等法華經五卷

東晉沙門支道根譯(西曆三百三十五年)

第七譯(存) 妙法蓮華經八卷 二十八品 或七卷

姚秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什奉詔譯(西曆四百年)

此經は盈一の八紙右より五十三紙左迄なり

第八譯(存) 添品妙法蓮華經七卷 二十七品 或八卷

隋天竺三藏闍那崛多共笈多譯(西曆六百一年)

此經は盈二の五十九紙右より百六紙左迄なり

右の外に明藏には妙法蓮華經觀世音菩薩普門品經一卷あり、

姚秦三藏法師鳩摩羅什譯長行、隋北天竺沙門闍那崛多譯重頌、
卷初にあり、然れども第七譯の普門品と全く同文なり。又開元
釋教錄には、第七譯の細註に、此妙法蓮華經第五卷初提婆達多品、
蕭齊武帝時外國三藏達摩菩提、共楊都僧正沙門法獻、於瓦官寺譯、
其經梵本是法獻於闍闍將來。其第八卷初普門品中重誦偈、周武
帝時北天竺三藏闍那崛多於益州龍淵寺譯、秦本並闕、後編續入、又
第八卷中藥王菩薩等咒六首、大唐三藏玄奘重譯、在音義中、此不別
出にあり。又第八譯の細註に添品序の抄略あり、此は寧ろ序の
全文を見ることを讀者に慫慂せんと欲するなり。

六

前項の支那譯の外に、佛人ユージエン、ビユルヌフ氏の佛蘭西
語の譯あり、西曆一千八百五十二年即ち嘉永五年巴里府の刊本

あり。此譯者は一千八百一年に生れて一千八百五十二年に死せし有名なる東洋學者なり。又ケールン氏の英譯は一千八百八十四年即ち明治十七年英國牛津の刊本あり。此は余の恩師馬博士の東方聖書の第二十一冊なり。此英佛二譯は尼波羅傳來の梵本を譯出せしものにして、今此和譯と其原書を同くせしこと知るべし。元來尼波羅傳來の梵本は、法華經に限らず、無量壽經の如きも、五存の支那譯と一致せざるなり、故に今も羅什の譯文を龍頭に加へて、其異同を知らしむるなり。

七

以上六項の外、尙ほ言ふべきことあるが如しと雖も、已に明治三十五年の佛領東京の講案を譯せし代用序文にも云々せしことあり、因りて冗長と重複を恐れ、此を以て梵漢對照新譯法華

經の由序とし、併せて泉君と眞宗大谷大學尋源會出版部員諸君との勤勞を謝することゝす。
大正二年三月二十三日東京皇城の西、麴街善國寺溪の爪雪處、爲法不爲身の扁額下に識す。

碩果生 南條文雄

晋宋齊梁唐代間。高僧求法離長安。
去人成百歸無十。後者安知前者難。
路遠碧天唯冷結。沙河遮日力疲彈。
後賢如未暗此旨。往々將經容易看。

義淨三藏

序の二

○ 「鎮護國家の經典」として、奈良朝から平安朝へかけて日本國民の文學思想の上に、多大の影響を及ぼした法華經、殊に鎌倉時代に降つて、日蓮宗の興起と共に、こりわけ天下を風靡した「妙法蓮華經」、まことに何人も異議の無い「大乘の經王」たるこの經典が直接に梵語原文から邦語に翻譯せられたのは、これが兎もかく最初の試みである。

○ 抑もこの翻譯が始めて無盡燈の誌上に附録として掲載せられたのは明治三十六年の二月であつて、今や十年の昔となつた。私は明治四十年の十月に、東京集鳴の學堂で、南條先生から「こ

の翻譯も課程の一つにしたら宜からう』といふやうなことで、先生の手寫の梵文法華經を渡された。私は其の以前から先生の懇篤な教を受けてゐたのだが、殊に其の頃からは月見覺了先生の慇懃で、専ら梵語に關する研究を南條先生の指導の下にやることになつたのであつた。

○
先生の手寫の梵文は、卷頭に其の一部を寫眞版にして出して置いたが、洋罫紙に書いたもので、厚さ一寸五分程の書物三冊になつて居る。何分澤山の梵夾と接合して訂正がしてあるので、或は朱書、或は紫書、塗抹縦横の有様は、如何に苦心が籠つてゐるかをよく表明して居る。實にこれ先生の努力の結晶である。さるからに不完全な尼波羅寫本の謎のやうな部分も意義透徹

して全篇みな可讀イテラシクになつてゐる。この先生の努力の御蔭で私は易々と翻譯の筆を取ることが出来たのである。

○
次にも一つこの翻譯が出来たに就て、忘れることの出来ない助力は子安善義氏の「諸譯互證」である。氏は南條先生の下で久しく梵語を研究し、造詣亦深きこと、已に人も知つてゐることであるが、氏は法華經の三譯即ち晋秦の二譯と英譯とを對照して、「法華經諸譯互證」と題し、洋罫紙に書いた一寸程の厚さの書物八冊に纏めて南條先生の許に残して置かれた。實にこれ亦氏の刻苦勉勵の所産である。私はこの恩師と、先輩の苦心經營によつて出来上つた材料を使つて容易にこの困難な事業を成し遂げる事が出来たのであるから、これは偏へに恩師と

先輩の賜に外ならぬのである。

然し私が正しく筆を取つたのは本書の二四八頁の六行目からである。それまでは南條先生が多忙の中から翻譯して二三枚づゝ毎月の雑誌に掲載せられたのである。前に云つた通り明治四十年の十月から引繼いで翻譯を始めた。然し毎月の掲載量に限りがあるのゝ、自分の他の研究も種々あつたので、進歩は依然遅々たるものであつた。先生にこのことを云ふと、先生は笑ひながら「法華經は八年間かゝつて御説きになつた御經だから八年位はかゝるだらう」と云はれたこともあつた。然し其の八年が十年になつたのである。

始めのうちは翻譯の草稿を一度先生に校閲して頂いて活版の方へ回した。然しそのうちに活版の方が急がせるのゝ、先生が不在勝になられるので、いつとなく校閲を経ないやうになつてしまつた。それで若しも翻譯に誤りがあつたり、其他間違ひがあるゝすれば二四八頁六行からは全部自分の責任である。これがため先生に累を及ぼすことのないやう、此に、特に責任を明かにして置きたい。

今、出来上つた部分を繕いて見るに、今更のやうに前後の一致しないところが眼につく。せめて譯語だけでも一定にしたいとは思ふが、それも到底事情が許さなかつた。又假名遣ひや、送り假名、用語などの首尾一貫して居ないことは顧みて忸怩の情に

堪へないのである。

○
實を云へば、自分としては、全篇を悉く口語體に翻譯したいのであつた。然しこの翻譯の始められた頃は、まだ世間が經典の口語譯を可能なものと思へなかつたかもしれぬ。何分俄かに文體を變へることも出来ないで、なるべく先生の翻譯して置かれた跡を逐ふことに勉めた。而して一方には梵語經典に特有の幾回もなく續く繰り返しか、滔々江河の漲るやうな莊重な調子を保存することにも勉めた。

○
何しろ、この翻譯の價值は、從來の漢譯に關せず、直接に梵語から邦語に譯したといふ一點に存することを承知して貰ひ

したい。だから本書は從來の法華經と比較して研究するところに興味がある。現行の法華經を鼈頭に對照したのはこの理由なのである。即ち從來の法華經に無い部分が増加して居ることもある。又從來の法華經の意義と異つてゐる部分、否全く反對のところすら少くない。又從來のものも極めてよく吻合して一層その意義を確實に發揮するといふ點も多い。兎に角幾多の研究問題が比較するといふことの上に湧いて來る。而して本書は問題を問題のまゝに残して置く。この解決に至つては印度梵夾の本文に就いて直接に研究せねばならぬこととなる。其場合に當つて、比較的字を逐ふて忠實にやつてあるこの翻譯が、梵語原文を読む學者に必ずや多少の貢獻をすることと信ずる。だから直譯に失して讀み苦しいといふ點は、この貢

獻さ差引にして恕して貰はねばならぬ。

○ この翻譯を全く脱稿したのは昨年の八月であつた。これより先き東京巢鴨の眞宗大學は西に移された。思ひ出多き自分の搖籃、瞑目すれば温厚なる先輩の慈容は髣髴として前に在すの感がある。自分はこの厚き薰陶を受けた母校を記念するため、せめてこの翻譯を完成したいものであると思つて、眞夏の盛りを玉の汗を拭ひつゝ、勉強して脱稿したのであつた。藥王品の半分(四五三頁あたり)位までは無盡燈にも掲載したが、それから尋源會の出版部で一冊に纏めるといふことになつて、遂に今日本書の體裁をなすに至つたのである。尤も本年の五月中には全く出來上る筈になつてゐたのであつたが、活版所の方が案外手

間取つて、次第に遅れた。

○ 本書の刊行に就いて前來述べ來つた他に、諸方面の方々から種々の御厚意を蒙つた中にも殊に臺下から御親毫を賜はつたことは此上なき光榮である。又尋源會委員可西大秀、岡崎祐浣の兩氏が校正の勞に當られたことも併せて厚く謝意を表して置く。

大正二年九月十日京都の僑居にて

泉

芳

環

Avipranāśāya Buddha-dharmāṇām anantardhānāya
parākramiṣyatha mā Tathāgatājñām kṣobhayiṣyatha.

—Sukhāvativyūha.

佛の教法の不滅不消失のために
勇進せよ。ゆめ／＼如來の命を破
ることなかれ。

(梵文無量壽經)

緒論

(明治三十五年十二月八日佛館東京の首府河内第一回萬國東洋研究會に於て朗讀せる講案にして原英文なり)

第一項 法華經梵本

千八百八十四年我明治十七年、マックスミュラー博士は東方聖書第二十一冊としてケールン博士の法華經の英譯を出版せられたり。馬博士は其一本を余に與へ、英譯の序引二十四頁に於て博學なる譯者の期望するが如くに、此經の支那譯の長行の一部分の直譯を伴ふことを勧められたり。然れども其英譯出版の後、數日を経ずして余は母の病氣の爲めに日本へ呼び戻されたり。尤も此時は馬博士と現今牛津大學の梵語教授たるマクドナルド氏の懇切なる教導の下に五年間余は牛津に留まりて梵語を研究せし後なりき。而して牛津留學中には余は至要なる經典の梵本を謄寫することを得たり。即ち法華經、楞伽經、金光明經等なり。其梵本は皆悉く寫本にして倫敦の官立亞細亞學會ブリテイッシュ博物館、印度事務省、牛津と劍橋との大學の圖書館所

藏のものなり。此等の寫本は皆尼波羅國に於て發見せられしものと傳ふるが故に、單に同一の原本の複寫のみにして、獨立の原本とては更に無きなり。余は今日までも現存の多數の支那譯の原本を支那朝鮮日本に於て搜索すと雖も、全く其効を奏することを得ざるなり。余の寫し得たる法華經の梵本は第一に、倫敦の亞細亞學會の寫本より全分を寫し、四部の寫本を以て之を校合せしなり。其中の二部は劍橋大學圖書館の藏本にしてケールン博士の英譯の原本となりたるものとす。其他の二部はブリテイッシュ博物館と當時臺灣駐劄の英國領事たりしワッタメス氏との藏本を借り出だせしなり。

第二項 支那三譯

爾來余は尼波羅傳來の梵本并に其英譯と支那譯とを比較することに注意せり。此經の支那譯は三部あり、左の如し。

第一、正法華經。十卷、二十七品或は二十八品。西曆二百六十五年より三百十六年までの間に於て西晉の竺法護の譯せしものなり。此

は明藏目錄千六百六十二部中の第三百三十八號にして、縮刷藏經盈二の一紙右より五十七紙左までなり。

第二、妙法蓮華經。七卷或は八卷、二十八品。西曆四百六年、姚秦の鳩摩羅什の譯なり。明藏の第三十四號にして、縮刷藏經盈一の一紙左より五十三紙左までなり。

第三、添品妙法蓮華經。八卷、二十七品。西曆六百一年、隋の闍那崛多チニヤクツツと達磨笈多ダモクツタとの譯なり。明藏の第百卅九號にして、縮刷藏經盈二の五十九紙右より百六紙左まであり。此譯は多分はさて此經の梵本の題號は、三譯に於て右の如くに譯出せり。即ち薩土サツツを正又は妙と譯し、達磨ダモを法と譯し、芬陀利迦フンダリカを華又は蓮華と譯し、修多羅シュトラを經と譯するなり。第三譯の題號には添品の二字を加へてあり、其説明は其翻譯に關係せし人の序文に明かなり、請ふ其序の拔萃を加ふることを許せ。其序に曰く

「昔し燉煌の沙門竺法護、晋武の世に於て、正法華を譯す、後秦の姚興

更に羅什に請ひ、妙法蓮華を譯せしむ、二譯を考驗するに定めて一本に非ず、護(の譯は多羅葉の梵本に似たり、什(の譯は龜茲羅什の生國の文字を以て梵本を寫せしもの歟)に似たり、余序文の作者、未だ其名を詳かにせず、經藏を檢して備さに二本を見る、多羅は則ち正法華と符會し、龜茲は則ち妙法蓮華と允に同じ、護の(多羅葉すら尙遺す所あり、什の文寧んぞ其漏なからんや、而して護の闕く所の者は普門品の偈なり、什の闕く所の者は、藥草喻品の半と、富樓那及び法師等の二品の初めと提婆達多品と普門品との偈なり、什は又囑累(品)を移して藥王(品)の前に在らしむ、護と什との(二本に陀羅尼(品)を並に普門(品)の後に置けり、其間の異同は言て極むること能はず、竊に見るに提婆達多(品)及び普門(品)の偈は先賢續出し補闕流行せり(闍那幅多北周の時に之を譯出せしことは明藏第三十七號別行普門品經に明記せり)余遺風を景仰し、成範を憲章す、大隋の仁壽元年辛酉の歲、普曜寺の沙門上行の請ふ所に因りて、遂に三藏幅多笈

多の二法師と共に、大興善寺に於て重ねて天竺の多羅葉の本を勘するに、富樓那及び法師等の二品の初めは、本を勘するに猶闕けたり、藥草喻品は更に其半を益し、提婆達多(品)をば通じて(見寶塔品)に入れ、陀羅尼(品)を神力(品)の後に次ぎ、囑累(品)は還りて其終を結ぶ、字句の差殊も頗る亦改正せり、僞披尋するもの有らば幸に疑惑すること勿れ」

原稿には漢文の拔萃を出だし、之を英文に抄譯す、今は便宜の爲めに其漢文を延書にす。次の第三項の表にも原稿には第一に梵語の品名を出だせども、其名義は第三譯の品名と略一致し、品の次第も第三譯と同一なるが故に、今此譯文には單に支那三譯の品名のみを擧げて梵名を省略す。

第三項 品名比較

梵本 第一 譯

第二 譯

第三 譯

第一 光瑞品第一

序品第一

序品第一

第二 善權品第二

方便品第二

方便品第二

- | | | | |
|-----|------------|-----------|-----------|
| 第三 | 應時品第三 | 譬喻品第三 | 譬喻品第三 |
| 第四 | 信樂品第四 | 信解品第四 | 信解品第四 |
| 第五 | 藥草品第五 | 藥草喻品第五 | 藥草喻品第五 |
| 第六 | 授聲聞決品第六 | 授記品第六 | 授記品第六 |
| 第七 | 往古品第七 | 化城喻品第七 | 化城喻品第七 |
| 第八 | 授五百弟子決品第八 | 五百弟子授記品第八 | 五百弟子授記品第八 |
| 第九 | 授阿難羅云決品第九 | 授學無學人記品第九 | 授學無學人記品第九 |
| 第十 | 藥王如來品第十 | 法師品第十 | 法師品第十 |
| 第十一 | 七寶塔品第十一 | 見寶塔品第十一 | 見寶塔品第十一 |
| 第十二 | 梵志品第十二 | 提婆達多品第十二 | 提婆達多品第十二 |
| 第十三 | 勸說品第十三 | 勸持品第十三 | 勸持品第十三 |
| 第十四 | 安樂行品第十四 | 安樂行品第十四 | 安樂行品第十四 |
| 第十五 | 菩薩從地踊出品第十五 | 從地踊出品第十五 | 從地踊出品第十五 |
| | 如來現壽品第十六 | 如來壽量品第十六 | 如來壽量品第十五 |

- | | | | |
|------|----------------------------|--------------|--------------|
| 第十六 | 御 <small>或作</small> 福事品第十七 | 分別功德品第十七 | 分別功德品第十六 |
| 第十七 | 勸助品第十八 | 隨喜功德品第十八 | 隨喜功德品第十七 |
| 第十八 | 歎法師品第十九 | 法師功德品第十九 | 法師功德品第十八 |
| 第十九 | 常被輕慢品第二十 | 常不輕菩薩品第二十 | 常不輕菩薩品第十九 |
| 第二十 | 如來神足品第二十一 | 如來神力品第二十一 | 神力品第二十 |
| 第二十一 | 總持品第二十五 | 陀羅尼品第二十六 | 陀羅尼品第二十一 |
| 第二十二 | 藥王菩薩品第二十二 | 藥王菩薩本事品第二十三 | 藥王菩薩本事品第二十二 |
| 第二十三 | 妙吼菩薩品第二十三 | 妙音菩薩品第二十四 | 妙音菩薩品第二十三 |
| 第二十四 | 光世音普門品第二十四 | 觀世音菩薩普門品第二十五 | 觀世音菩薩普門品第二十四 |
| 第二十五 | 淨復淨王品第二十六 | 妙莊嚴王本事品第二十七 | 妙莊嚴王本事品第二十五 |
| 第二十六 | 樂普賢品第二十七 | 普賢菩薩勸發品第二十八 | 普賢菩薩勸發品第二十六 |
| 第二十七 | 囑累品第二十八 | 囑累品第二十九 | 囑累品第二十七 |

縮刷藏經盈二の三十四紙右には正法華經の梵志品第十二を分たず、勸說品を第十二とし、以下順次に其數の一を減するが故に二十八品に非ずして二十七品なり、此は高麗藏に依れるなり。

茲に余の記憶する一事あり、即ち前項に鈔出せし珍らしき序文の現存せることを馬格斯摩勒博士の知られし時大に之を喜び、直ちに之をケールン博士に寄送せられしに、ケールン博士は其英譯の序引の中に之を引用せられたり。今上に引く所の序文の拔萃と品名比較表に依る時は、已に上にも附記せしが如く、第三譯の二十七品の次第は梵本と一致すと雖も、第一第二の二譯は、嘗に第十一品を分て二品とするのみならず、終りの七品の次第をも變更せり。故にケールン博士は敏捷なる注意を興へて曰く、羅什第二譯は二十一品と囑累品との比較的上古の梵本を用ひしものにして、梵本の第二十一品より第二十六品までの六品は或は後世之を増加せしものならん、然れども現今に於て此れより以上の結論は到底作し能はざるなりと云へり。

第四項 序品の比較

梵本と三部の支那譯との比較は固より煩雜なる事業なるが故に、今は唯其要を撮するのみ。一に此經の會座に集まりし比丘の數は第一

譯は梵本と同く千二百人なり、然るに第二第三の二譯には萬二千人と記せり。第二に聲聞の嘆德は三譯皆梵本よりは短かし。第三に梵本には二十七人の大聲聞の名を列記すれども三譯皆二十一人のみを擧ぐ、即ち最初の五比丘の中第一の憍陳如のみを擧げて餘の四名を省き、第十七の頗羅墮と第二十二の優婆難陀とを略するなり。第四に第一譯には二人の比丘尼を省けり、即ち摩訶波闍波提(大愛道)と羅睺羅母耶輸陀羅となり。第五に第一譯の菩薩の嘆德は梵本並に他の二譯よりも長し。第六に菩薩の數は梵本には二十三名を列記すれども、第一譯には二十四名、他の二譯には十八名なり。第七に梵本には菩薩の次に有德者十六名を擧ぐれども三譯皆之を省けり、唯第二第三の二譯には賢護と寶藏との二名を菩薩十八名の第十五と第十七として彌勒の前に列せり。第八に諸神の中に於て日と現光との二名は第二第三の二譯に省かれ、普香は第一譯に略されてあり。第九に梵本には四天王の名を列記すれども三譯之を擧げず。第十二梵娑婆主を第一譯には

梵忍跡と譯出せり、此は主の梵語パティを譯者の用ひし梵本には、バダ(足又は跡)と書き誤まりてありしものなるを明かなり。第十一に八大龍王は第一譯には省かれてあり。第十二に第一譯緊那羅王の名樹も支那譯の梵本には法となりてありしものゝ如し。第十三に第一譯の梵本には乾闥婆(尋香神)も香音とありしが如し、而して其次に四名の天子を列記し、其總稱を淨身四天子と云ふものは淨居天を指すが如し、但し其名は梵本並に他の二譯の四乾闥婆王の名と同一の意義を有す。第十四に第一譯には摩竭國王阿闍世とあり、他の二譯には韋提希子阿闍世王とあり、梵本には兩様の説明を並記す。第十五に普佛國土六種震動の有様は梵本には詳細に説明すれども三譯皆單に六種震動と記するのみ。此等は後世梵本に増加せし一證とも云ふことを得べき歟、例せば阿彌陀經の梵本並に羅什の譯(西曆四百年頃)には極樂の七寶池に八功德の水充滿すとのみ説きたるも、玄奘の譯稱讚淨土經(西曆六百五十年頃)には八功德を列記せるが如し。第十六に英譯七頁十三行と二十

頁三十四行には佛の眉間の白毫相の光は東方十八萬佛土を照すとあれども、支那譯は三部ともに萬八千とす、加之余の寫せし梵本には三度共に萬八千なることは五種の寫本一致せり、且つ英譯も九頁十五行には十八萬に非ずして萬八千なれば、前後の十八萬は誤りなること知るべし。第十七に梵本には雨大法雨、吹大法螺、擊大法鼓の三句の外に、建大法幢、燒大法炬、擊大法片鼓の三句あれども、支那譯には三部共に無し。第十八に羅什第二譯は其同譯なる阿彌陀經と同じく一個の長き合成語を一切世間難信之法と譯出す、竺法護第一譯は單に無極典と譯し、英譯には反對と云ふ意義の語を以て翻譯してあり。第十九に羅什は其(第二譯)に於て、日月燈明佛の聲聞と菩薩との爲めの說法の中間に爲求辟支佛者說應十二因緣法の一段あり、此は梵本と第一譯とは無き所なり。第二十に梵本の「パレーナ、バラタラム」の二語を英譯十八頁二十三行には「久しき前」と譯し、支那の三譯は皆「久しき後」の意義に譯出す。即ち第一譯に云く、其日月燈明如來滅度之後、次復有佛、亦號日月燈明、滅

度[○]之[○]後[○]。次復有佛[○]。亦號日月燈明[○]。滅度之後[○]。次復有佛[○]。亦號日月燈明[○]。云へり。此の如く三度まで滅度之後の句あり、他の二譯には二度次復有佛の句あり。此にも類似の例あり、即ち大無量壽經の現存五譯の中、過去佛の名を擧ぐるに、漢吳魏の三譯には復次有佛名曰某とか、次復有佛名某とか、次有如來名曰某、又は次名某とあれども、唐宋の二譯には全く反對にして、於彼[○]然燈佛前[○]。極過數量有苦行佛出興于世[○]。苦行佛前[○]。復有如來號爲某等[○]とか、彼然燈佛前[○]。復有世尊出現世間名某[○]。又彼佛前[○]。有佛出世名某と譯して、三部の舊譯にては最古の佛たる然燈佛即ち錠光如來は二部の新譯にては最新の佛となれり。今法華經にては支那譯と英譯とにて前後の差ありと知るべし。以上梵本と支那譯とを比較せし結果の一斑なり。

第五項 普門品の比較

梵本の第二十四品にして羅什譯[○]第二譯[○]の第二十五品たる觀世音菩薩普門品が、支那日本朝鮮安南等の諸國に於て最も流布せることは、觀

音經とか普門品經、又は普門經の題號を以て別行せられたるを以ても知るべきなり。竺法護譯第一譯は偈頌なきのみならず、長行も亦羅什譯に比すれば甚だ短かし。然れども甚だ奇とすべきは此短き第一譯が却て尼波羅國將來の梵本と一致すること是なり。例せば菩薩が衆生の爲めに法を班宣したまふ時、現する所の形像身體を擧ぐるに、十六種の名を列記すること、梵本と第一譯と殆んど同一なること下の如し。第一佛、第二菩薩、梵本の一部に之を缺くが故に英譯に之を省く、第三緣覺、第四聲聞、第五梵天、第六天帝、第七健杏和、第八鬼神、第九豪尊、第十大神、妙天、第十一轉輪聖王、第十二殊特、第十三反足羅刹、梵本には毗沙門とあり、第十四將軍、第十五沙門梵志、梵本には單に婆羅門とせり、第十六金剛神、隱士、獨處仙人、僮儒、梵本には單に金剛手、即ち執金剛神のみを擧ぐ、是を十六種とす。然るに第一第二の二譯には左の三十二種身を列記す。第一佛、第二辟支佛、即ち緣覺、第三聲聞、第四梵王、即ち梵天、第五帝釋、即ち天帝、第六自在天、即ち豪尊、第七大自在天、即ち大神、妙天、第八天大將軍、即

ち將軍、第九毗沙門、第十小王、第十一長者、第十二居士、第十三宰官、第十四婆羅門、第十五比丘、第十六比丘尼、第十七優婆塞、第十八優婆夷、第十九長者居士宰官婆羅門婦女身、第廿童男、第廿一童女、第廿二天、第廿三龍、第廿四夜叉、第廿五乾闥婆、即ち捷杳和、第廿六阿修羅、第廿七迦樓羅、第廿八緊那羅、第廿九摩睺羅伽、第三十人、第三十一非人、第三十二執金剛神。右の三十二身に菩薩身の一を加えて、觀音三十三身と云ふことは確定せらるゝなり。

次に普門品の偈頌の前に於て高麗藏の第三譯には六十二字の一段あり。此一段は麗宋元明四本の第二譯にも宋元明三本の第三譯にもなし、即ち縮刷大藏經盈一の五十紙右十九行と、盈二の百三紙左十二行十三行とを比較すれば明了なり、若し麗藏の第三譯に従ふ時は普門品の偈頌は全分無盡菩薩の説く所にして、第一譯の如き世尊より無盡意菩薩に對して説く所に非ざるなり、即ち添品妙法蓮華經の麗藏の偈頌の前に左の一段あること其次の句の終りの四字に注意すべし。

爾時莊嚴幢菩薩問無盡意菩薩言、佛子、以何因緣名觀世音、無盡意菩薩即便遍觀觀世音菩薩過去願海、告莊嚴幢菩薩言、佛子、諦聽、觀世音菩薩所行之行。

爾時無盡意菩薩即說偈言。

右の中、初めの爾時より所行之行までの一段六十二字は唯麗藏の第三譯にのみ存する所の文字なること前に述ぶるが如し。其次の一句の終りの四字なる即說偈言は、四本の第二譯並に宋元明三本の第三譯には以偈問曰とあり。此は無論偈頌の第一行四句を以て無盡意の間とすることにして、第二行以下は具足妙相尊即ち世尊が偈を以て無盡意に答へたまふ所とするなり。然るに即說偈言なる麗本に従ふ時は、長行に於て無盡意が佛より聞きし所を偈頌を以て莊嚴幢に告げしが如し。尤も英譯者ケールン博士も注意するが如く、梵本の偈頌と其偈前の長行とは全く一致せずと雖も、尙偈頌を以て無盡意の所説とすることは梵本に合するが如し。其故は梵本にては長行は

試に下の梵文の支那譯を作らば、「善男子、觀自在菩薩摩訶薩有如是自在神力、遊於娑婆世界、爾時世尊即說偈言、」にして偈頌は「莊嚴幢問、無盡意、曰、佛子、何因、名觀自在、無盡意、觀如是、願海、皆莊嚴、幢、諦聽、彼行、」と云ふが如き意義なり。尤も第四句は明かに觀自在の名を

擧げてあれども、今は四字一句に試譯せし爲めに彼の一字を用ゐたるなり。

Idīśyā kulaputra vikurvayāvalokiteśvaro boḥisattvo mahāsattvo 'syān sahyān lokadhātāv anuvicarati.
Atha khulu bhagavānś tasyān velāyām imā gāthā abhāsata.
ごありて、偈頌の第一第二の二行は左の如し

Citradhvaṅja Akṣayomati etam arthaṃ pariprecha kārṇāt;
Kena jinaputra hetunā ucyate hi Avalokiteśvaraḥ. (本文四九四頁參照)

梵本の此二行は全く麗本の第三譯の六十二字の一段と一致し、却て第二第三の二譯の偈頌の第一第二の二行とは一致せざるなり、兎も角も梵本の偈前の語に従ふ時は、世尊が偈を説て莊嚴幢と無盡意との二菩薩の問答を披露したまひたることゝなるなり。又第二第三の二譯の偈頌の妙相具又は具足妙相尊も、或は莊嚴幢の異譯なるが如し。固より偈頌即ち伽陀の梵本は、長行の梵本と文法上にも綴字上にも同一ならざる所あるが故に、未だ孰れが是なるを知らず。

又第二第三の支那譯には偈頌は二十六行なり、然るに梵本には三十三行あり。即ち第二十七行以下の七行は或は彼世に増加せしものならん歟、此七行は曾て絶東にては知られざる所なり。此七行の中には阿彌陀引婆(無量光)の佛名を擧ぐるのみならず、其淨土蘇法引摩提引(樂有、又は極樂)をも蘇法引迦羅樂因として説明せり。

第六項 支那譯の註解

之を要するに法華經の支那譯三部の第二なる羅什譯は支那日本に於て甚だ尊重せらるゝなり。此は兩國に現存する天台宗の根本經典なるのみならず、日本佛教徒中一の活潑なる宗派に於ても之を本經とすればなり。其宗派は西暦千二百八十二年入寂せし宗祖日蓮の名を以て呼ぶ所の日蓮宗是なり。天台の宗祖智顛は西暦五百九十七年入寂せり、其著述に三大部あり、左の如し。

- 第一、妙法蓮華經玄義、明藏第千五百卅四號。
- 第二、妙法蓮華經文句、同 第千五百三十六號。

第三、摩訶止觀、同 第一千五百三十八號。
右の三部に各緊要なる註解あり、西曆七百八十二年入寂せし天台列祖の一たる湛然の著述なり、左の如し。

第一、法華玄義釋籤、明藏第一千五百卅五號。

第二、法華文句記、同 第一千五百三十七號。

第三、止觀輔行傳弘訣、同 第一千五百三十九號。

右の外に普門品のみに關する智顛の著二部あり、左の如し。

第一、觀音玄義、明藏第一千五百五十五號。

第二、觀音義疏、同 第一千五百五十七號。

右の二部に各左の如き註解あり、西曆千二百八十八年入寂せし天台宗僧知禮の著なり。

第一、觀音玄義記、明藏第一千五百五十六號。

第二、觀音義疏記、同 第一千五百五十八號。

此の如くにして天台の宗義は主として此等の書中に説明せらるゝ也。

西曆六百六年、日本帝國の皇太子厩戸(聖德太子)は、其叔母にして當時の君主たりし推古天皇の御前に於て、勝鬘師子吼一乘大方便廣經(明藏第五十九號)と、妙法蓮華經(明藏第三百三十四號)とを講じたまへり。其後此二部と、維摩詰所說經(明藏第四百四十六號)との三經の義疏を漢文を以て著はしたまへり。其解釋は一般に簡約なりと雖も、其注意は頗る敏捷にして且つ明了なり。その法華義疏は羅什譯の註解なりと雖も、全く天台と關係なし、即ち専ら光宅寺法雲の疏を根據としたまひしなり。雲は梁の武帝に尊重せられて西曆五百二十九年に入寂せり。皇太子は嘗に日本佛教の興隆者たりしのみならず、亦日本憲法の創立者たりしなり。即ち佛教に於ける篤信と萬機に對する天才とを以て、國家大小の事務を處理すべき方法を人民に教へたまへり。皇太子は西曆六百二十一年に四十九歳にして薨じたまへり。

予は支那譯の經典を讀めば、それだけ翻譯者の誠實なりしに感服する者なり、唯此誠實に依て、此の如き大業を成就せしこと、知らるゝな

り、此れ他なし、明教大師契嵩言へることあり、爲法不爲身と、信なる哉。

明治三十六年一月十五日

南條文雄識

目次

一 序品	一頁
二 方便品	三九
三 譬喩品	七四
四 信解品	一一七
五 樂草喩品	一四〇
六 授記品	一六六
七 化城喩品	一七八
八 五百弟子授記品	二二六
九 授學無學人記品	二四二
一〇 法師品	二五一
一一 見寶塔品	二六七

二二 持品……………二九九

二三 安樂行品……………三〇八

二四 從地涌出品……………三三〇

二五 如來壽量品……………三五二

二六 分別功德品……………三六七

二七 隨喜功德品……………三八六

二八 法師功德品……………三九六

一九 常不輕菩薩品……………四一八

二〇 如來神力品……………四二九

二一 陀羅尼品……………四三八

二二 藥王菩薩本事品……………四四八

二三 訥音菩薩品……………四六九

二四 普門品……………四八六

二五 淨莊嚴王本事品……………五〇一

二六 普賢菩薩勸發品……………五一六

二七 囑累品……………五二八

卷頭

御法主台下御親毫題字
 カシユガル地方より發見せられし梵夾法華經
 刊本の梵文法華經
 南條手寫の梵文法華經

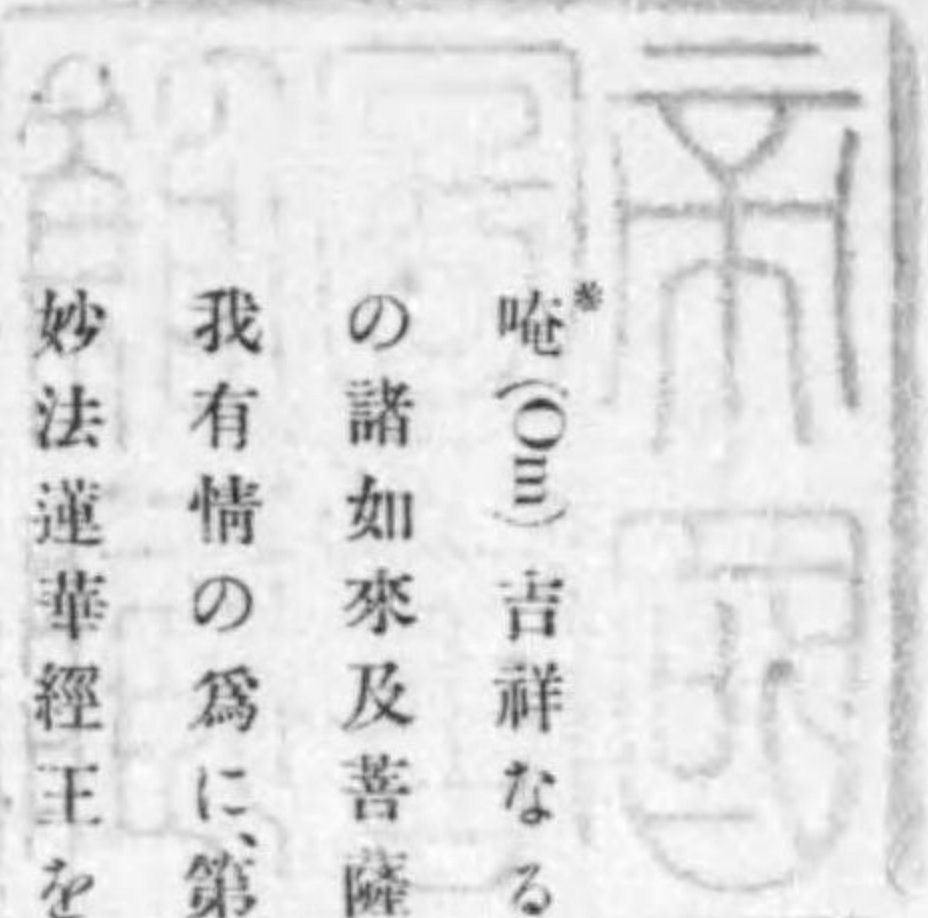
妙法蓮華經

姚秦三藏法師鳩摩羅什奉詔譯

序品第一
如是我聞。一時佛住王舍城。耆闍崛山中。與大比丘衆。萬二千人俱。皆是阿羅漢。諸漏已盡。無復煩惱。

梵漢對照 新譯法華經

文學博士 南條文雄 共譯
泉芳璟



唵(Om)吉祥なる諸佛菩薩に歸命す。唵、過去未來現在の諸如來及菩薩獨覺聲聞の諸聖衆に歸命す。
我有情の爲に、第一義諦に通入すべき大道教たる、方廣妙法蓮華經王を宣説すべし。

序品第一

我是くの如く聞けり。一時世尊比丘(Bhikkhu)の大衆ごもに、王舍(Rājagṛha)城の鷲峰(Gṛdhrakūṭa)山に住し給へり。其比丘は千二百人ありき、皆諸漏已に盡き、復た煩惱なき阿羅漢(Arahant)なりき。自制力ありて、思想及知識は自在を得、

序品第一

支那三譯皆此歸敬文及偈文なし
秦隋二譯萬二千人

逮得己利。盡諸有結。心得自在。其名曰。

阿若憍陳如。摩訶迦葉。優樓頻伽迦葉。伽耶迦葉。那提迦葉。舍利弗。大目犍連。摩訶迦旃延。阿菟樓駄。劫賓那。憍梵波提。離婆多。畢陵伽婆蹉。薄拘羅。摩訶拘絺羅。難陀。孫陀羅難陀。富樓那。彌多羅尼子。須菩提。阿難。羅睺羅。如是衆所知識。大阿羅漢等。復有學無學二千

人。摩訶波闍波提比丘尼。與眷屬六千人。俱。羅睺羅母。耶輸陀羅比丘尼。亦與眷屬俱。

序品第一

善生なること大象の如く、課業及義務は己に辨じ、重擔は己に卸され己の利を逮得し、有結は己に索き、正智を以て思想の自在を得、諸意思を降伏して最上の成滿を得神通己に達したる聲聞なりき。其名を

- (一) 尊者了本際 Ajāta-Kaundhinya
- (二) 尊者馬勝 Asvajit
- (三) 尊者婆濕波 Vāspa
- (四) 尊者大號 Mahāmānava
- (五) 尊者仁賢 Bhadrīka
- (六) 尊者摩訶迦葉波 Mahā-Kāśyapa
- (七) 尊者優樓頻螺迦葉波 Uruvilva-Kāśyapa
- (八) 尊者那提迦葉波 Nadi-Kāśyapa
- (九) 尊者伽耶迦葉波 Gayā-Kāśyapa
- (一〇) 尊者舍利子 Śāriputra

- (二) 尊者摩訶目乾連那 Maha-Maudgalyāyana
- (三) 尊者摩訶迦旃延那 Mahā-Kātyāyana
- (三) 尊者阿泥樓駄 Aniruddha
- (四) 尊者離婆多 Revata
- (五) 尊者劫賓攔 Kāphila
- (六) 尊者憍梵波提 Gavāmpati
- (七) 尊者畢陵陀跋蹉 Pīlindavatsa
- (八) 尊者薄拘攔 Vakkula
- (九) 尊者摩訶拘絺羅 Mahā-Kaśhila
- (一〇) 尊者頗羅墮跋闍 Bhavadvāja
- (三) 尊者摩訶難陀 Mahā-Nanda
- (三) 尊者優波難陀 Upananda
- (三) 尊者孫陀羅難陀 Sundara-Nanda
- (四) 尊者富樓那彌多羅尼子 Pūrva Maitrīyañi-putra

序品第一

(二五) 尊者須菩提 *Subhūti*
 (二六) 尊者羅睺羅 *Rāhula*
 と云ひき。此等及其他の諸大聲聞、又有學の尊者阿難陀 (*Ananda*) 及其他の有學 (*Saikā*) 無學 (*Asaikā*) の比丘二千人と共なりき。又摩訶波闍波提 (*Mahāprajāpati*) を始めとせる比丘尼 (*Bhikkhūni*) 六千人及眷屬と俱なる羅睺羅の母耶輸陀羅比丘尼 (*Yasodhara B.*) と共なりき。

又八萬の菩薩と共なりき、皆無上正等覺より退轉せず、十生所繫にして、總持及大辯才を得、不退轉法輪を轉じ、百千の諸佛を供養し、百千の諸佛の所に於て善根を植ゑ、百千の諸佛に歌歎せられ、身心常に慈を行じ、善く如來慧に入り、大智ありて、智成滿に達し、名聲百千の世界に聞え、百千俱胝那由他の衆生を救濟せし者なりき。其名を

- (一) 妙德法王子菩薩摩訶薩 *Mañjuśrī Kumārabhūta Bodhi-*
sattva Mahāsattva

菩薩摩訶薩。八萬人。皆於阿耨多羅三藐三菩提。不退轉。皆得陀羅尼。樂說辯才。轉不退轉法輪。供養無量。百千諸佛。於諸佛所。植衆德本。常爲諸佛之所稱歎。以慈修身。善入佛慧。通達

大智。到於彼岸。名稱普聞。無量世界。能度無數。百千衆生。其名曰。文殊師利菩薩。觀世音菩薩。得大勢菩薩。常精進菩薩。不休息菩薩。寶掌菩薩。藥王菩薩。勇施菩薩。寶月菩薩。月光菩薩。滿月菩薩。大力菩薩。無量力菩薩。越三界菩薩。跋陀婆羅菩薩。彌勒菩薩。寶積菩薩。導師菩薩。如是等菩薩摩訶薩。八萬人俱。

- (二) 觀自在菩薩摩訶薩 *Avalokiteśvara B.*
 (三) 得大勢 *Mahāśāmaprāpta*
 (四) 一切義名 *Sarvārthanāman*
 (五) 常精進 *Niyodyukta*
 (六) 不休息 *Anikṣipadhura*
 (七) 寶掌 *Ratnapāṇi*
 (八) 藥王 *Bhaiṣajyarāja*
 (九) 藥上 *Bhaiṣajyasamudgata*
 (一〇) 莊嚴王 *Vyūharāja*
 (一一) 勇施 *Pradānaśra*
 (一二) 寶月 *Ratnacandra*
 (一三) 寶光 *Ratnaprabhā*
 (一四) 滿月 *Purnacandra*
 (一五) 大度 *Malavikrāmin*

- (一六) 超無邊 *Anantavikramin*
- (一七) 越三界 *Trailokyavikramin*
- (一八) 大辯才 *Mahapatibhāna*
- (一九) 常恒精進 *Satatasmitābhivyakta*
- (二〇) 持地 *Dharaṇīdhara*
- (二一) 無盡意 *Akṣyamati*
- (二二) 蓮華德 *Padmasri*
- (二三) 宿王 *Nakṣatrarāja*
- (二四) 慈氏菩薩摩訶薩 *Maitreya B.*
- (二五) 師子菩薩摩訶薩 *Siṃha B.*

と云ひき。又賢護を始めとせる十六の正士と共に其名を

- (一) 賢護 *Bhadrapāla*
- (二) 寶藏 *Ratnakara*

- (三) 美商主 *Susarthavaḥa*
- (四) 人授 *Naradatta*
- (五) 洞藏 *Guhya Gupta*
- (六) 婆留拏授 *Varuṇadatta*
- (七) 因陀羅授 *Indradatta*
- (八) 上意 *Utaramati*
- (九) 勝意 *Viśeṣamati*
- (一〇) 增意 *Vardhamānamati*
- (一一) 不空見 *Amoghadarśin*
- (一二) 善住 *Susanprasthita*
- (一三) 善超越 *Suvikrāntavikramin*
- (一四) 無比意 *Anupamamati*
- (一五) 日藏 *Sūryagarbha*
- (一六) 持地 *Dharaṇīdhara*

爾時釋提桓因。與其眷屬。二萬天子俱。復有名月天子。普香天子。寶光天子。四大天王。與其眷屬。萬天子俱。自在天子。大白在天子。與其眷屬。三萬天子俱。娑婆世界主。梵天王。尸棄大梵。光明大梵等。與其眷屬。萬二千天子俱。有八龍王。難陀龍王。跋難陀龍王。娑伽羅龍王。和脩吉龍王。德叉迦龍王。阿那婆達多龍王。摩那斯龍王。優婆塞羅龍王等。各與若

千。百千眷屬俱。有四緊那羅王。法緊那羅王。妙法緊那羅王。大法緊那羅王。持法緊那羅王。各與若干。百千眷屬俱。有四乾闥婆王。樂乾闥婆王。樂音乾闥婆王。美乾闥婆王。美音乾闥婆王。各與若干。百千眷屬俱。有四阿脩羅王。婆羅阿脩羅王。佉羅耆馱阿脩羅王。毗摩質多羅阿脩羅王。羅睺阿脩羅王。各與若干。百千眷屬俱。有四迦樓羅王。大威德迦樓羅王。大身迦樓羅王。

序品第一

と云ひき。此等を始めとせる八萬の菩薩と共なりき。又天帝釋 (Śakra devānām Indra) 及其眷屬二萬の天子と共なりき。其名を

- (一) 月天子 Candha Devaputra
 - (二) 日天子 Sūrya D.
 - (三) 普香天子 Samantagandha D.
 - (四) 寶光天子 Ratnaprabha D.
 - (五) 光耀天子 Avabhasprabha D.
- と云ひき。此等を始めとせる二萬の天子ありき。又四大王及其眷屬三萬の天子と共なりき。其名を
- (一) 增長大王 Virūdhaka Mahārāja
 - (二) 廣目大王 Virūpaksu M.
 - (三) 持國大王 Dhṛtarāṣṭra M.
 - (四) 多聞大王 Vaiśravaṇa M.

と云ひき。又自在天子。大自在天子及其眷屬三萬の天子ありき。又堪忍世界主梵 (Brahman Sahasrpati) 及其眷屬萬二千の梵衆天子と共なりき。其名を

- (一) 尸棄梵 Śikhiṇ B.
 - (二) 光明梵 Jyotiṣprabha B.
- と云ひき。此等を始めとせる萬二千の梵衆天子ありき。又八龍王及其眷屬百千俱胝の龍と共なりき。其名を
- (一) 難陀龍王 Nanda Nāgarāja
 - (二) 優波難陀 Upananda
 - (三) 娑伽羅 Śāgara
 - (四) 和脩吉 Vāsuki
 - (五) 德叉迦 Takṣaka
 - (六) 摩那斯 Manasiṇ
 - (七) 阿那婆達多 Anavatapta

序品第一

大滿迦樓羅王。如意
迦樓羅王。各與若干。
百千眷屬俱。草提希
子。阿闍世王。與若干。
百千眷屬俱。各禮佛
足。退坐一面。

序品第一

10

- (八) 漚鉢羅迦龍王 *Utpalaka N.*
と云ひき。又四緊那羅王、及其眷屬百千俱胝那由他の緊那
羅と共なりき。其名を
- (一) 樹緊那羅王 *Druva Kinrarāja*
(二) 大法緊那羅王 *Mahādharmā K.*
(三) 順法緊那羅王 *Sudharma K.*
(四) 持法緊那羅王 *Dharmadhara K.*
といひき。又四乾闥婆衆天子 (*Gandharvakāyika*)、及其眷屬百
千の乾闥婆と共なりき。其名を
- (一) 樂乾闥婆 *Manojā Gandharva*
(二) 樂音 *Manojasvara*
(三) 美 *Madhura*
(四) 美音乾闥婆 *Madhurasvara G.*
と云ひき。又四阿修羅王、及其眷屬百千俱胝那由他の阿修

羅と共なりき。其名を

- (一) 婆林阿修羅王 *Balin Asurendra*
(二) 法羅騫駄阿修羅王 *Kharaskandha A.*
(三) 毗摩質多黎阿修羅王 *Vemacetri A.*
(四) 羅睺阿修羅王 *Rāhu A.*
と云ひき。又四金翅鳥王、及其眷屬千俱胝那由他の金翅鳥
と共なりき。其名を
- (一) 大威德金翅鳥王 *Mahatējas Garudendra*
(二) 大身 *Mahākāya*
(三) 大滿 *Mahāpūrṇa*
(四) 得大如意金翅鳥王 *Maharddhiprāpta G.*
と云ひき。又た草提希 (*Vaideti*) の子にして摩揭陀 (*Magadha*)
の王なる未生怨 (*Ajitasatru*) と共なりき。
- 其時世尊四衆に圍繞せられ、恭敬尊重供養禮拜せられ、善

爾時世尊。四衆圍
繞。供養恭敬。尊重讚

序品第一

11

歎。爲諸菩薩。說大乘經。名無量義。教菩薩法。佛所護念。佛說此經已。結跏趺坐。入於無量義處三昧。身心不動。是時天雨曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。曼殊沙華。摩訶曼殊沙華。而散佛上。及諸大衆。普佛世界。六種震動。爾時會中比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。天。龍。夜叉。乾闥婆。阿脩羅。伽樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人。及諸小王。轉輪聖王。是諸大衆。得未曾有。歡喜合掌。一心觀佛。

序品第一
薩の教にして一切諸佛の攝受なる大方等經典の「大義」(Mahāyāna)と名くる法門を説き了り、大法座の上に結跏趺坐し、身心不動にして、無量義處 (Anantaṅgadesa-pratīḥana) と名くる定に入りたまひき。世尊の(定に)入りたまひし時、曼陀羅縛 (Mandaraḥa) 大曼陀羅縛、曼殊沙迦 (Mañjuśāka) 大曼殊沙迦の天華の大華雨降りて、世尊と四衆を覆ひき。普き佛國は轉、徧轉、震、徧震、動、徧動の六種に震動したりき。其時會中に集まりて著座せし諸比丘、比丘尼、清信士、清信女、天、龍、藥叉 (Yakṣa)、乾闥婆、阿修羅、金翅鳥、緊那羅、摩睺羅伽 (Mahoraga) 人、非人、及諸王、小王、有力なる轉輪(王)及四洲の轉輪(王)は皆其眷屬と共に奇異と未曾有(の想)を得て、歡喜心を以て世尊を瞻仰したりき。

其時世尊の眉の中間の毫輪より一の光放たれたり。其(光)は東方に於て萬八千の佛國に達せり、而して其一切佛國

至阿鼻地獄。上至阿迦尼吒天。於此世界。盡見彼土。六趣衆生。又見彼土。現在諸佛。及聞諸佛。所說經法。并見彼諸比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。諸修行得道者。復見諸菩薩摩訶薩。種種因緣。種種信解。種種相貌。行菩薩道。復見諸佛。般涅槃者。復見諸佛。般涅槃後。以佛舍利。起七寶塔。

爾時彌勒菩薩。作是念。今者世尊。現神變相。以何因緣。而有此瑞。今佛世尊。入于

無間を普譯には無擇と義譯し秦譯には阿鼻と譯す。六倍の

三昧。是不可思議。現希有事。當以問誰。誰能答者。復作此念。是文殊師利。法王子。已曾親近供養。過去無量諸佛。必應見此。希有之相。我今當問。

爾時比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。及諸天龍鬼神等。咸作此念。是佛光明。神通之相。今當問。

爾時彌勒菩薩。欲自決疑。又觀四衆。比丘比丘尼。優婆塞。優

婆夷。及諸天龍鬼神等。衆會之心。而問文殊師利言。以何因緣。而有此瑞。神通之相。放大光明。照于東方。萬八千土。悉見彼佛。國界莊嚴。於是彌勒菩薩。欲重宣此義。以偈問曰。文殊師利。導師何故。眉間白毫。大光普照。雨曼陀羅。曼殊沙華。栴檀香風。悅可衆心。以是因緣。地皆嚴淨。而此世界。六種震動。時四部衆。咸皆歡喜。身意快然。得未曾有。眉間光明。照于東方。萬八千土。皆如金色。

而して是くの如きの大奇異。未曾有。不可思議なる大神變相は現出せり。我今此疑義を問はんことす。此義を發遣するに堪能なる者は其れ誰ぞや」と。復た此念を作せり。「此妙徳法王子は過去の時那(Tina)に從て修行し、善根を積植し、無量の諸佛に親近せり。妙徳法王子は曾て過去の諸如來應供、正等覺者の是くの如き相を見たりし事あるべし。又妙徳法王子は過去の大法話をも證知すべし。故に我今妙徳法王子に此義を問ふべきなり」と。

又其比丘比丘尼、清信士、清信女の四衆、及無量諸天、龍、藥叉、乾闥婆、阿修羅、金翅鳥、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人も是くの如き世尊の大光明神變相を見て、奇異と未曾有と好奇心を得て、此念を作せり。「我等今此世尊所作の大光明神變相の是くの如くなるは何が故ぞと問はんことす」と。其瞬間に慈氏菩薩摩訶薩、心に其四會の心念を知り、自ら

*發遣の二字は音譯に依る。時那又は檀那、最勝義、譯す佛の通號なり。

法縁を得て、其時妙徳法王子に問ふて曰く。「妙徳よ、何の因、何の縁ありてか、是くの如きの世尊所作の奇異未曾有なる光明神變ありて、彼如來に導かれ、如來に監督せられたる、嚴飾美麗にして最も美麗なる萬八千の佛國は見られしや」と。其時慈氏菩薩摩訶薩(Citih)を以て妙徳法王子に問ふて曰く。

*伽陀又は偈と音譯し頌と義譯す。

- (一) 妙徳こはそも何故ぞ 人導師より放光する、眉間の白毫輪よりぞ この一光は照曜する。
- (二) 諸天はなはだ喜びて 曼陀羅華雨を降しけり、曼殊旃檀の香粉は 天の香ありてこゝろよし。
- (三) この地普くかゝりて 四衆はなはだ喜び、この國全く震動して 六種はなはだおそるべし。
- (四) その光明は東方に 萬八千土にみちにけり、一時にすべてを照しつゝ、 國土は金色の如くなり。

從阿鼻獄 上至有頂
諸世界中 六道衆生
生死所趣 善惡業緣
受報好醜 於此悉見
又觀諸佛 聖主師子
演說經典 微妙第一
其聲清淨 出柔輦音
教諸菩薩 無數億萬
梵音深妙 令人樂聞
各於世界 講說正法
種種因緣 以無量論
照明佛法 開悟衆生
若人遭苦 厭老病死
爲說涅槃 盡諸苦際
若人有福 曾供養佛
志求勝法 爲說緣覺
若有佛子 修種種行
求無上慧 爲說淨道

文殊師利 我住於此
見聞若斯 及千億事
如是衆多 今當略說
我見彼土 恒沙菩薩
種種因緣 而求佛道
或有行施 金銀珊瑚
眞珠摩尼 碑磔碼碯
金剛諸珍 奴婢車乘
寶飾輦輿 歡喜布施
迴向佛道 願得是乘
三界第一 諸佛所歎
或有菩薩 馴馬寶車
欄楯華蓋 軒飾布施
復見菩薩 身肉手足
及妻子施 求無上道
又見菩薩 頭目身體
欣樂施與 求佛智慧
文殊師利 我見諸王

序品第一

- (五) 無間より上有頂まで それらの國の有情等は、六のちまたに迷ひつゝ、死してはさらに他に生る。趣く所に苦樂あり、
- (六) 彼等の種々の業因は 趣く所に苦樂あり、卑賤と豪貴と中品と みなこの土より見らるべし。
- (七) 我また諸佛を拜見す 人王師子は法を演ぶ、俱胝の有情を愍めて 柔輦音をぞいだしける。
- (八) 深妙希有の音聲を 各自の國にいだしつゝ、俱胝那由他の因縁にて 佛の法をぞ示めしける。
- (九) 苦惱の有情は愚癡にして 生と老死に苦心せり、涅槃寂靜を説きひろめ 比丘苦の終りこのたまへり。
- (十) 勢力を有する人はみな 福を得て又見佛す、獨覺乘を説き示し 此法則をまもらしむ。
- (二) 其他の善逝の諸子も 無上の智慧を求めつゝ、つねに諸行を修せしかば 菩提の道をぞ勧めける。

妙音は妙徳の別號なり

- (三) 妙音、我はこゝに居て かくの如きを見聞す、其他千億の事あるも 一二をかたるばかりなり。
- (三) 無量の國の中にして 恒沙の菩薩を我は見る、其數千億減少なし 種々精進に求道せり。
- (四) 或は布施を行じつゝ、 財寶金銀金貨より、眞珠摩尼螺石珊瑚 奴婢馬羊をも與へけり。
- (五) 又寶飾の輦輿をも 歡喜心にて施行せり、無上の道に回向して われらは乘を得んといふ。
- (六) 三界最勝の妙乘は 善逝の説ける佛乘なり、我速かに得んために 布施を行すさまをしけり。
- (七) 或は馴馬の車をも 華座幢幡飾りつゝ、或は寶の器をも 布施物として與ふなり。
- (八) 或は男女の子を與へ 或は妻や肉までも、請ふ者あらば手足をも 求道の爲めに與ふなり。

序品第一

往詣佛所 問無上道
 傾捨樂土 宮殿臣妾
 鬚除鬚髮 而被法服
 或見菩薩 而作比丘
 獨處閑靜 樂誦經典
 又見菩薩 勇猛精進
 入於深山 思惟佛道
 又見離欲 常處空閑
 深修禪定 得五神通
 又見菩薩 安禪合掌
 以千萬偈 讚諸法王
 復見菩薩 智深志固
 能問諸佛 聞悉受持
 又見佛子 定慧具足
 以無量論 爲衆議法
 欣樂說法 化諸菩薩
 破魔兵衆 而擊法鼓
 又見菩薩 寂然宴默

天龍恭敬 不以爲喜
 又見菩薩 處林放光
 濟地獄苦 令入佛道
 又見佛子 未嘗睡眠
 經行林中 勤求佛道
 又見具戒 威儀無缺
 淨如寶珠 以求佛道
 又見佛子 住忍辱力
 增上慢人 惡罵捶打
 皆悉能忍 以求佛道
 又見菩薩 離諸戲笑
 及癡眷屬 親近智著
 一心除亂 攝念山林
 億千萬歲 以求佛道
 或見菩薩 肴膳飲食
 百種湯藥 施佛及僧
 名衣上服 價直千萬
 或無價衣 施佛及僧

序品第一

(二五) 或^{かしこ}は頭^{かしこ}を或は眼^めを 或は最愛の身を與ふ、
 欣悦心に施行して 如來の智慧を求むなり。
 (二六) 妙徳、我は諸處に見る 榮へる國をふりすて、
 後宮または全洲も 大臣親族もすつるなり。
 (二七) 世界の導師に近づきて 安樂の爲め法を問ひ、
 壞色の衣を身に著けつ 頭髮鬚髯を剃除せり。
 (二八) 或る諸菩薩を我は見る 比丘の如くに森に居す、
 或は曠野に住してぞ 讀誦の行を樂しめる。
 (二九) 或る諸菩薩を我は見る 常に山窟に分け入りて、
 此佛智をば分別し よく思惟して悟るなる。
 (三〇) 他は悉く欲をすて 身も處をも淨めつ、
 五通を得ては曠野にて 善逝の子として住めるなり。
 (三一) 或は齊足固く立ち 合掌導師に向ひつ、
 千偈をもちて時那王を いさみつたいへまつるなり。

(三二) 或は念順調和して 微細の行を曉了し、
 兩足尊の法を問ひ 聞けるみ法を念持せり。
 (三三) 或る時那王の諸子等の 身をば現すを我は見る、
 無量那由他の因縁にて 多億の人に法を説く。
 (三四) 歡喜を懷きて法を説き 一切菩薩を化するなり、
 魔の兵乘を破りてぞ 法の鼓を撃ちにける。
 (三五) 善逝の教に従ふ者を見る 人天鬼神も尊敬す、
 善逝の子は安住し 謙卑寂然靜修せり。
 (三六) 其他は密林に退きて 身より光を放ちつ、
 地獄の有情を濟ひてぞ 菩提の道に入らしむる。
 (三七) 精進に立てる時那子あり 全く睡眠を廢めつ、
 林に住みて經行し 精進に由りて求道せり。
 (三八) つねに清淨を守るあり 珠寶の如く戒缺けず、
 かれら諸行を具足して 淨戒に由りて求道せり。

千萬億種 梅檀寶舍
 衆妙臥具 施佛及僧
 清淨園林 華果茂盛
 流泉浴池 施佛及僧
 如是等施 種種微妙
 歡喜無厭 求無上道
 或有菩薩 說寂滅法
 種種教詔 無數衆生
 或見菩薩 觀諸法性
 無有二相 猶如虛空
 又見佛子 心無所著
 以此妙慧 求無上道
 文殊師利 又有菩薩
 佛滅度後 供養舍利
 又見佛子 造諸塔廟
 無數恒沙 嚴飾國界
 寶塔高妙 五千由旬
 縱廣正等 二千由旬

序品第一

- (三) 或る忍力の時那子あり 増上慢の比丘よりの、
 罵詈訶責をも忍びつゝ、 堪忍に由りて求道せり。
 (四) 或る菩薩をば我は見る、 すべて戯樂をすてはてゝ、
 癡眷屬にもはなれつゝ、 このみて智者に親近す。
 (五) 亂るゝ心を除き去り、 一心に林中に穴居して、
 禪思すること千億年、 靜慮に由りて求道せり。
 (六) 時那と弟子衆の現前に、 或は布施を作すもあり、
 飲食剛柔の食物と、 諸病の醫藥數多し。
 (七) 千億の衣服を供ふあり、 百千億の價なり、
 時那と弟子衆の現前に、 又は無價衣を供ふなり。
 (八) 寶と旃檀をもちてこそ、 百億の精舍を造立し、
 多き牀座を具へつゝ、 善逝の前に供ふなれ。
 (九) 最上人と聲聞に、 華果多くして美麗なる、
 淨く樂しき園林を、 經行の爲めに供ふあり。

一一塔廟 各千幢幡
 珠交露幔 寶鈴和鳴
 諸天龍神 人及非人
 香華伎樂 常以供養
 文殊師利 諸佛子等
 爲供舍利 嚴飾塔廟
 國界自然 殊特妙好
 如天樹王 其華開敷
 佛放一光 我及衆會
 見此國界 種種殊妙
 諸佛神力 智慧希有
 放一淨光 照無量國
 我等見此 得未曾有
 佛子文殊 願決衆疑
 四衆欣仰 瞻仁及我
 世尊何故 放斯光明
 佛子時答 決疑令喜
 何所饒益 演斯光明

序品第一

- (四) 種々無量の布施物を、 かくの如くに喜捨すなり、
 菩提に精進おこしつゝ、 布施に由りてぞ求道する。
 (二) 或は寂靜の法を説き、 無量那由他の因縁にて、
 千億人に示しつゝ、 智に由りてこそ求道すれ。
 (四) 不二の法をば悟りつゝ、 虚空の如くみなひとし、
 善逝の子は無著にて、 妙慧に由りて求道せり。
 (三) 妙音我はなほも見る、 已滅善逝の教をば、
 現に固守する菩薩あり、 時那の遺形を恭敬せり。
 (四) 千億の塔を我は見る、 多きは恒沙の如くなり、
 時那子の作るところに、 億の國土をかざるなり。
 (五) 七寶塔は淨妙なり、 高さは滿五千由旬、
 千億の傘幡具へつゝ、 周圍は二千由旬なり。
 (六) 諸幡はつねにかゝやけり、 諸鈴はつねにひびくなり、
 華香音樂具へつゝ、 人天鬼神は尊敬す。

佛坐道場 所得妙法
 爲欲說此 爲當授記
 示諸佛土 衆寶嚴淨
 及見諸佛 此非小緣
 文殊當知 四衆龍神
 瞻察仁者 爲說何等

序品第一

(四七) 善逝の諸子はこの如く 時那の遺形に敬事せり、
 十方世界を照しつゝ、 開ける珊瑚の如くなり。
 (四八) 時那の放てる一光は 華さく天とこの界の、
 無量俱胝の人をこそ 我この土より見るべけれ。
 (四九) 嗚呼最上人の力なり 嗚呼其智廣大淨無漏なり、
 光をこの界に放ちてぞ 數千の國土を見せしむる。
 (五〇) この無量希有の相を見て われらは奇異のおもひあり、
 妙音佛子に演義して 好奇の心を去らしめよ。
 (五一) 勇者よ四衆は欣仰し 仁者と我を瞻察す、
 疑を去りよろこばせ 善逝の子よ説き示せ。
 (五二) いま何故ぞ善逝は この光をぞ放ちける、
 嗚呼最上人の力なり 嗚呼其智廣大淨無漏なり。
 (五三) 光をこの界に放ちてぞ 數千の國土を見せしむる、
 この大光を放ちけり こそその義なからずや。

爾時文殊師利。語
 彌勒菩薩摩訶薩。及
 諸大士。善男子等。如
 我惟付。今佛世尊。欲
 說大法。雨大法雨。吹
 大法雲。擊大法鼓。演
 大法義。諸善男子。我
 於過去諸佛。曾見此
 瑞。放斯光已。即說大
 法。是故當知。今佛現

序品第一

(四) 最上人たる善逝は 妙法を道場に得たまへり、
 世主今こそ説くべきか 菩薩に授記する爲めなりや。
 (五) 數千の國土を示せるは 小なき縁にはあらざらん、
 衆寶嚴淨美麗なり 無量眼の佛を拜見す。
 (五) 時那の子慈氏は請問し 人天鬼神も欲願す、
 妙音いかに説くべきと 四衆もろごも待ちにけり。
 其時妙德法王子は、慈氏菩薩摩訶薩及一切の菩薩に語り
 て曰く。『善家の諸男子よ、此の如來の意思は、大法教を説き、
 大法雨を雨ふらし、大法鼓を撃ち、大法幢を建て、大法炬を燃
 やし、大法螺を吹き、大法片鼓を扣かんとなり。又善家の諸
 男子よ、如來の意思は、今日大法を演義せんとなり。善家の
 諸男子よ、我此念を作せり。『我過去の諸如來應供正等覺者
 に於て、是の如き前相を見たりき。彼等過去の諸如來應供
 正等覺者も亦是の如き放光現ありき』と。故に我は如來大

*第五十六
 頌の英譯
 には慈氏
 時那の子
 に問ふと
 す又時那
 の子よに
 作れる寫
 本あり

光亦復如是。欲令衆生咸得聞知。一切世間難信之法。故現斯瑞。

諸善男子。如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫。爾時有佛。號日月燈明。如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。演說正法。初善。中善。後善。其義深遠。其語巧妙。純一無雜。具足清白。梵行之相。爲求聲聞者。說應四諦。

序品第一

法教を説き、普く大法教を聞かしのめんと欲して、是の如き此前相を現じたまへりと知れり。其故は、如來應供正等覺者は普く一切世間難信 (Sarva-loka-vipratyanyaka) の法門を聞かしのめんと欲して、是の如き此大奇瑞と放光現の前相とを示したまひたればなり。

『善家の諸男子よ、我は記憶せり、過去の時、無數、尙無數、廣大、無量、不可思議、不可量、不可計劫、其以前、尙以前、其時分に、月日燈 (Candrasūryapradīpa) と名くる如來 (Tathāgata) 應供 (Arhat) 正等覺者 (Samyaksambuddha) 明行足 (Vidyācaranisaṃpanna) 善逝 (Sūrata) 世間解 (Lokavid) 無上士 (Anuttara) 調御可化丈夫者 (Puruṣadāmyasarathi) 諸天及諸人之師 (Śāstri devānāṃ ca manuṣyānāṃ ca) 佛 (Buddha) 世尊 (Bhagavat) は世に興出し、正法を説き、梵行を開顯したまひき、初中後皆善 (Adau kalyāṇam madhye kalyāṇam parivāśame kalyāṇam) なり、其義其語共に善なり、全滿清淨

*佛名を支那譯には日月燈明に作る。

法。度生老病死。究竟涅槃。爲求辟支佛者。說應十二因緣法。爲諸菩薩。說應六波羅蜜。令得阿耨多羅三藐三菩提。成一切種智。

次復有佛。亦名日月燈明。次復有佛。亦名日月燈明。如是二萬佛。皆同一字。號日月燈明。又同一姓。姓頗羅墮。勸當知。初佛後佛。皆同一字。名日月燈明。十號具足。所可說法。初中後善。

なりき。即ち諸聲聞の爲めには、四聖諦に關し、(十二緣起より) 進向して、生老病死憂悲苦惱失心を超度し、涅槃を究竟すべき法を説きたまひき。又諸菩薩摩訶薩の爲めには、六度に關し、無上正等覺を始めとして、一切智智を究竟すべき法を説きたまひき。

『又善家の諸男子よ、其月日燈如來應供正等覺者の次に、同く月日燈と名くる如來應供正等覺者世に興出したまひき。無能勝 (Ajita) よ、是の如く實に一樣に相續して、月日燈と名くる諸如來應供正等覺者の同一名號にして、頗羅墮跋闍姓 (Bharadvāja-gotra) なる同一族姓の二萬の如來ましましき。無能勝よ、彼等二萬の諸如來の最初の如來と共に、最後の如來も亦月日燈と名くる如來、應供、正等覺者、明行足、善逝、世間解、無上士、調御可化丈夫者、諸天及諸人之師、佛、世尊なりき。彼も亦正法を説き、梵行を顯示したまひき、初中後皆善なり』

*次を英譯には前とせり然れども持釋に伴ふが故に今は次と譯す。無能勝は慧氏の別名なり阿逸多是なり。

其義其語共に善なり、全滿清淨なりき。即諸聲聞の爲めには、四聖諦に關し、(十二)緣起より進向して、生老病死憂悲苦惱失心を超度し、涅槃を究竟すべき法を説きたまひき。又諸菩薩摩訶薩の爲めには、六度に關し、無上正等覺を始めとし、一切智智を究竟すべし (Sarva-jñā-jñāna-paryavasāna) 法を説きたまひき。

『又無能勝よ、其世尊月日燈如來應供正等覺者の初め王子として、未だ出家したまはざりし時、八子ありき。其名を』

- (一) 有意王子 *Mati Rājakumārā*
- (二) 善意王子 *Sumati R.*
- (三) 無邊意 *Anantamati*
- (四) 寶意 *Ratnamati*
- (五) 勝意 *Vīśamati*
- (六) 除疑意 *Vimatismuljatin*

其最後佛。未出家時。有八王子。一名有意。二名善意。三名無量意。四名寶意。五名增意。六名除疑意。七名響意。八名法意。是八王子。威德自在。各領四天下。是諸王子。聞父出家。得阿耨多羅三藐三菩提。悉捨

王位。亦隨出家。發大乘意。常修梵行。皆爲法師。已於千萬佛所。植諸善本。

是時日月燈明佛。說大乘經。名無量義。教菩薩法。佛所護念。說是經已。即於大眾中。結跏趺坐。入於無

(七) 音意 *Ghṛṣamati*

(八) 法意王子 *Dharmamati R.*

と云ひき。又無能勝よ、彼等八王子、即ち彼世尊月日燈如來の諸子には廣大なる福德ありき。各四大洲を領し、其中に於て主權を行ひき。彼等は彼世尊の出家したまひしことを知り、而して無上正等覺を證得したまひしことを聞き、りて、一切の主權所領を捨て、彼世尊に隨て出家し、皆無上正等覺に志して說法者となれりき。彼等諸王子は常に梵行者 (*Brahmacārin*) となりて、百千諸佛の所に於て善根を植ゑたりき。

『又無能勝よ、其時彼世尊月日燈如來應供正等覺者は、菩薩の教にして、一切諸佛の攝受なる大方等經典の「大義」と名くる法門を説き了り、其同一瞬間 (*Kṣana*) 頃刻 (*Lava*) 暫時 (*Mūhūrta*) に、其集會の中に於て、大法座の上に結跏趺坐し、身心

量義處三昧。身心不動。是時天雨曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。曼殊沙華。摩訶曼殊沙華。而散佛上。及諸大衆。普佛世界。六種震動。爾時會中比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。天。龍。夜叉。乾闥婆。阿脩羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人。非人。及諸小王。轉輪聖王等。是諸大衆。得未曾有。歡喜合掌。一心觀佛。爾時如來。放眉間白毫相光。照東方。萬八千佛土。靡不周徧。如今所見。是諸佛土。彌勒當知。

爾時會中。有二十億菩薩。樂欲聽法。是

不動にして、無量義處と名くる定に入りたまひき。時に又彼世尊の(定に)入りたまひし時、曼陀羅縛、大曼陀羅縛、曼珠沙迦、大曼珠沙迦の天華の大華雨降り、彼世尊と會衆とを覆ひき。又普き佛國は轉、徧轉、震、徧震、動、徧動の六種に震動したりき。其時分に於て、其會中に集まりて着座せし諸比丘、比丘尼、清信士、清信女、天、龍、藥叉、乾闥婆、阿修羅、金翅鳥、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人、及諸王、小王、有力なる轉輪(王)、及四洲の轉輪(王)は皆其眷屬と共に、奇異と未曾有(の想)を得て、歡喜心を以て彼世尊を瞻仰したりき。其時彼世尊、月日燈如來の眉の中間の毫端より一の光放たれたり。其(光)は東方に於て萬八千の佛國に達せり、而して其一切佛國は遍く其光明に由て照されき。無能勝よ、譬へば今此等の諸佛國の見られしが如し。

『又無能勝よ、其時彼佛に隨從せる二十俱胝の菩薩ありき。』

諸菩薩。見此光明。普照佛土。得未曾有。欲知此光。所爲因緣。

時有菩薩。名曰妙光。有八百弟子。是時日月燈明佛。從三昧起。因妙光菩薩。說大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。六十小劫。不起于座。

時會聽者。亦坐一處。六十小劫。身心不動。聽佛所說。謂如食頃。是時衆中。無有一人。若身若心。而生懈倦。

日月燈明佛。於六十小劫。說是經已。即

其會に於て法を聞ける所の彼等は、此大光に由て照されたる世界を見て、奇異と未曾有(の想)を得て、歡喜心と好奇心とを生じたりき。

『又無能勝よ、彼世尊の教化の時、勝光(Vasuprabha)と名くる菩薩ありき。彼に八百の弟子ありき。而して彼世尊、定より起ちて、此勝光菩薩等に、妙法蓮華と名くる法門を説きたまひき、乃至滿六十中劫の間だ、傾かざる身と、動かざる心と以て、一座に坐して説きたまひき。』

『又一切會衆も其六十中劫の間だ、一座に坐して、彼世尊より法を聞きたりき、而して其會中一有情も身心の疲勞あることなかりき。』

『時に彼世尊、月日燈如來應供正等覺者は六十中劫の間、相續せる菩薩の教にして、一切諸佛の攝受なる大方等經典の妙法蓮華と名くる法門を説き了り、其同一瞬間、頃刻暫時に

菩薩の名を普譯には超光、秦譯には妙光とせり、弟子の數を普譯には十八とせり、秦譯には六十小劫とせり

於梵覺沙門。婆羅門。及天人。阿脩羅衆中。而宣此言。如來於今日中夜。當入無餘涅槃。

時有菩薩。名曰德藏。日月燈明佛。即授其記。告諸比丘。是德藏菩薩。次當作佛。號曰淨身。多陀阿伽度。阿羅訶。三藐三佛陀。

佛授記已。便於中夜。入無餘涅槃。佛滅度後。妙光菩薩持妙法蓮華經。滿八十小劫。爲人演說。日月燈明佛八子。皆師妙光。妙光教化。令其堅固。

阿耨多羅三藐三菩提。是諸王子。供養無量。百千萬億佛已。皆成佛道。其最後成佛者。名曰然燈。

八百弟子。中有一人。號曰求名。貪著利養。雖復讀誦衆經。而不通利。多所忘失。故號求名。是人亦以種種善根。因緣故。得值無量。百千萬億諸佛。供養恭敬。尊重讚歎。

彌勒當知。爾時妙光菩薩。豈異人乎。我身是也。求名菩薩。汝身是也。今見此瑞。與本無異。

序品第一

天 (Deva) 魔羅 (Māra) 梵 (Brahman) の世界、沙門 (Śramaṇa) 婆羅門 (Brahmana) 天 (Deva) 人 (Manusa) 阿修羅 (Asura) の生類 (prajā) の前に於て、般涅槃 (parinirvāna) を宣説して曰く。「諸比丘よ、今日、此夜の中分に於て、如來無餘依涅槃界に入るべし」云。

『無能勝よ、其時彼世尊日月燈如來應供正等覺者は德藏 (Dē) (Garbha) と名くる菩薩摩訶薩に無上正等覺に於て授記し給ひき。授記し了りて、彼一切會衆に告げて曰く。「諸比丘よ、

此德藏菩薩は我が後久しからずして無上正等覺を證得し、淨眼 (Vimalendra) と名くる如來應供正等覺者と成るべし』云。

『無能勝よ、彼世尊日月燈如來應供正等覺者は其同夜の中分に於て、無餘依涅槃界に入りたまひき。又彼勝光菩薩摩訶薩は其妙法蓮華なる法門を持ちき、而して其勝光菩薩摩訶薩は八十中切の間、彼入寂したまひし世尊の教を持ち、且つ説きたりき。無能勝よ、有志を上首とする彼世尊の八子

*菩薩の名を晉譯には首藏とせり

*佛名を晉譯には離垢體、秦譯には淨身とせり

は、其勝光菩薩の弟子となり、其教に由て無上正等覺に熟し、其後百千俱胝尼由他の諸佛を見て之を尊敬したりき。彼等は皆無上正等覺を證得しき、而して其最後は然燈 (Dipankara) 如來應供正等覺者なりき。

『又彼八百の弟子の中に一の菩薩ありき、極めて利得と尊敬と名聞とを重んじ、榮譽を欲せしと雖も、彼に教へられたる語言文字は忘失して止まらざりき、故に彼の名をば求名 (Yasakāma) と云ひき。百千俱胝那由他の諸佛は、其善根を以て、彼をも嘉納したまひき。嘉納し了りて、恭敬尊重供養禮拜せられたまひき。』

『時に又無能勝よ、汝に疑惑不信あるべし。彼時分に於て他の説法者にして、勝光と名くる菩薩摩訶薩ありきと。是の如く見察すべからず。其故は、彼時分に於て我は其説法者にして、勝光と名くる菩薩摩訶薩たりき。又彼懈怠にし

是故惟付。今日如來。當說大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。

爾時文殊師利。於大眾中。欲重宣此義。而說偈言。

我念過去世 無量無數劫
有佛人中尊 號日月燈明
世尊演說法 度無量衆生
無數億菩薩 令入佛智慧
佛未出家時 所生八王子
見大聖出家 亦隨修梵行
時佛說大乘 經名無量義

て、求名と名くる所の菩薩摩訶薩ありき(と見るべからず)。無能勝よ、彼時分に於て汝は實に其懈怠者にして、求名と名くる菩薩摩訶薩たりき。

『是の故に無能勝よ、此世尊の前相なる、是の如き放光を見りて我は推度せり、世尊も亦彼菩薩の教にして、一切諸佛の攝受なる大方等經典の妙法蓮華なる法門を説かんと欲したまふなり』と。

其時妙徳法王子尙廣く此義を示しつゝ、伽陀を説て曰く

- (五) 過去の時をば憶念す 不可思議無央數劫に、人中尊なる時那ありき 月日燈とまうしけり。
- (六) 人導師は説法し 無數億の有情を度したまふ、不思議無上の佛慧に もろもろの菩薩を入らしむる。
- (七) 導師の王子たりし時 八人の御子はましましき、大牟尼の出家を見たまひて 欲を棄てとく出家しき。

於諸大眾中 而爲廣分別
佛說此經已 即於法座上
踞坐三昧 名無量義處
天雨曼陀華 天鼓自然鳴
諸天龍鬼神 供養人中尊
一切諸佛土 即時大震動
佛放眉間光 現諸希有事
此光照東方 萬八千佛土
示一切衆生 生死業報處
有見諸佛土 以衆寶莊嚴
琉璃頗梨色 斯由佛光照
及見諸天人 龍神夜叉衆
乾闥緊那羅 各供養其佛
又見諸如來 自然成佛道
身色如金山 端嚴甚微妙
如淨琉璃中 內現眞金像
世尊在大衆 敷演深法義
一一諸佛土 聲聞衆無數

(六) 世主は法を説きたまふ 最勝無量義經なり、これを方廣と名づけてぞ 千億黎庶を開化する。

(七) 導師は法を説き了り 瞬間に踞坐して坐したまふ、最勝無量義三摩地に 牟尼尊法座に靜慮せり。

(八) 天の曼陀羅華雨ありき 鼓せざる天鼓は鳴りにけり、諸天藥叉は虚空にて 兩足尊を供養しき。

(九) 瞬間に諸國は震動しき これぞ未曾有希有なりき、眉間より極めて美麗なる 一光を導師は放ちけり。

(十) 其光東の方に行き 萬八千土にみちにけり、一切世界を照曜し 有情の生死を示しけり。

(十一) 或は寶合成の國土なり 或は吠瑠璃の光あり、導師の光曜に由りてこそ 極めて美麗に見ゆるなれ。

(十二) 諸天諸人龍藥叉 乾闥婆緊那羅天女等、善逝の供養を爲せるもの 世界に供養するは見ゆ。

開化の譯語は普譯に依る

因佛光所照 悉見彼大衆
或有諸比丘 在於山林中
精進持淨戒 猶如護明珠
又見諸菩薩 行施忍辱等
其數如恒沙 斯由佛光照
又見諸菩薩 深入諸禪定
身心寂不動 以求無上道
又見諸菩薩 知法寂滅相
各於其國土 說法求佛道
爾時四部衆 見日月燈佛
現大神通力 其心皆歡喜
各自相問 是事何因緣
天人所奉尊 適從三昧起
讚妙光菩薩 汝爲世間眼
一切所歸信 能奉持法藏
如我所說法 唯世能證知
世尊既讚歎 令妙光歡喜
說是法華經 滿六十小劫

不起於此座 所說上妙法
是妙光法師 悉皆能受持
佛說是法華 令衆歡喜已
尋卽於是日 告於天人衆
諸法實相義 已爲汝等說
我今於中夜 當入於涅槃
汝一心精進 當離於放逸
諸佛甚難值 億劫時一遇
世尊諸子等 聞佛入涅槃
各各懷悲惱 佛滅一何速
聖主法之王 安慰無量衆
我若滅度時 汝等勿憂怖
是德藏菩薩 於無漏實相
心已得通達 其次當作佛
號曰爲淨身 亦度無量衆
佛此夜滅度 如薪盡火滅
分布諸舍利 而起無量塔
比丘比丘尼 其數如恒沙

序品第一

- (五) 各自生なる佛は見ゆ 美麗金色の如くなり、
瑠璃中の金像の如くにて 會中に法を説きたまふ。
(六) 聲聞の數は知りがたし 善逝の聲聞は無量なり、
導師の一一の國にして 光曜一切を見せしむる。
(七) 精進に達し戒缺けず 全戒珠寶のごとくなり、
人導師の諸子は見ゆ 彼等は巖窟に住めるなり。
(八) 一切の財を施こして 忍力定樂賢智なる、
諸菩薩恒沙の如くにて 光に由りて見ゆるなり。
(九) 顛倒傾動することなく 深く定樂に入り忍に住し、
定より無上覺に發趣せる 善逝の實子は見ゆるなり。
(十) 眞實寂靜無漏地をば 知りつゝ、彼等は示すなり、
もろもろの世界に說法す 善逝の威神よりこの果あり。
(十一) 彼等の四會は保護者なる 月日燈の威神を見て、
其時總べて喜びて 此は何故と問ひ合へり。

- (十二) 人天藥叉の供養せる 世導師たちまち定を出で、
賢き菩薩法師なる 其子勝光にのたまひき。
(十三) 汝は世眼歸依處なり 賢きまことの持法者なり、
我衆生の爲めに説く 我が法藏に證者たれ。
(十四) もろもろの菩薩をたゝしめて 鼓舞讚歎せしめつゝ、
六十中劫圓滿して 時那は無上法を説きたまふ。
(十五) 世主は一座に端坐して 無上妙法を説きたまふ、
時那の子、法の師勝光は 一切これを記憶せり。
(十六) 時那は無上法を説きたまひ 群生を鼓舞したまひて、
天をも有せる世間に 其日導師は説きたまふ。
(十七) 此法眼は我說けり かゝる法性は示したり、
諸比丘、今此中夜こそ 我的滅度の時刻なれ。
(十八) 信解堅固に不放逸なれ 我がこの教を勤むべし、
俱胝那由他劫を経て 時那大仙は遇ひがたし。

倍復加精進 以求無上道
 是妙光法師 奉持佛法藏
 八十小劫中 廣宣法華經
 是諸八王子 妙光所開化
 堅固無上道 常見無數佛
 世養諸佛已 隨順行大道
 相繼得成佛 轉次而授記
 最後天中天 號曰然燈佛
 諸仙之導師 度脫無量衆
 是妙光法師 時有一弟子
 心常懷懈怠 貪著於名利
 求名利無厭 多遊族姓家
 棄捨所習誦 廢忘不通利
 以是因緣故 號之爲求名
 亦行衆善業 得見無數佛
 世養於諸佛 隨順行大道
 具六波羅蜜 今見釋師子
 其後當作佛 號名曰彌勒

廣度諸衆生 其數無有量
 彼佛滅度後 懈怠者汝是
 妙光法師者 今則我身是
 我見燈明佛 本光瑞如此
 以是知今佛 欲說法華經
 今相如本瑞 是諸佛方便
 今佛放光明 助發實相義
 諸人今當知 合掌一心待
 佛當雨法雨 充足求道者
 諸求三乘人 若有疑悔者
 佛當爲除斷 令盡無有餘

序品第一

- (一) 諸佛子憂惱を生じたり 劇苦を以て苦しめり、
 兩足尊の聲を聞き 滅度はあまりに急なりと。
- (二) 不可思議俱胝の群生を 王・中王は慰めき、
 比丘我が滅度を怖るゝな 我が無き時に佛あらん。
- (三) この賢菩薩德藏は 無漏智に行を行じつゝ、
 最上覺に達してぞ 淨上眼といふ時那となる。
- (四) 其夜中刻に滅度しき 燈因盡きたるごとくなり、
 其遺形は分たれて 多億那由他の塔ありき。
- (五) もろもろの比丘と比丘尼あり 最上覺に進趣せり、
 恒沙のごとく數多く 善逝の教を勤めたり。
- (六) そのとき法師の比丘ありて 勝光といふ持法者なり、
 八十中劫圓滿して 如法に無上法を説きにけり。
- (七) 彼に八百の弟子ありて 一切彼に度せられき、
 彼等は多億の佛を見て 其大仙を恭敬せり。

- (八) 隨順して行を行じてぞ もろもろの世界に成佛せり、
 互に相繼ぎ間斷なく 無上覺にぞ授記しける。
- (九) 轉次の諸佛の最後をば 天中天、然燈と名づけたり、
 仙衆に供養せられてぞ 千億衆生を度脱しき。
- (一〇) 彼善逝の子勝光の 法を説きける其時に、
 利得と名聞に著しつゝ、 懈怠貪欲の弟子ありき。
- (一一) 極めて榮譽を求めしも 勝劣不定に近づけり、
 一切の教も獨習も 所説即時に忘失す。
- (一二) 彼の名は是求名なり 其名は十方に聞こえけり、
 昔し瑕疵ある所造の 善業に由て彼も亦。
- (一三) 千億の諸佛を慰めて 大供養をぞ爲しにける。
 隨順して行を行じつゝ、 釋迦師子佛を拜見す、
- (一四) 彼は最後の者となり 無上覺を獲得し、
 慈氏世尊と成り得てぞ 千億有情を化度すなる。

序品第一

(五) 已滅善逝の法の中 懈怠を得たる者ありき、
 汝は實にそれなりき 我は其時の法師なり。
 (六) 我かゝる因縁に かくの如きの相を見て、
 彼の示せる相を知り 第一の觀察を我言はん。
 (七) たしかに時那帝、普眼なる 諸釋中王、見勝義者は、
 我が聞きし無上の法門を 説きたまはんと欲すなり。
 (八) 今日圓滿の瑞相は 導師の善巧方便なり、
 釋師子助發を爲したまひ 法自性印を宣説せん。
 (九) 決定善心に合掌せよ 利愍世者は宣説せん、
 無邊の法雨を雨してぞ 求道の者を飽かしめん。
 (一〇) 求道の菩薩なる我子等の いかなる疑を懐けるも、
 又は惑も不信をも 智人はそれを除くべき。

右聖妙法蓮華法門に於て因縁品第一

妙法蓮華經

方便品第二

爾時世尊。從三昧安詳而起。告舍利弗。諸佛智慧。甚深無量。其智慧門。難解難入。一切聲聞。辟支佛。所不能知。所以者何。佛曾親近。百千萬億。無數諸佛。盡行諸佛。無量道法。勇猛精進。名稱普聞。成就甚深。未曾有法。隨宜所說。意趣難解。舍利弗。吾從成佛已來。種種因緣。種種譬論。廣演言教。無數方便。引導衆生。令離諸著。所以者何。

方便品第二

其時世尊、念と慧とを以て、彼定より起立して、具壽なる舍利子に告げて曰く、『舍利子よ、諸如來應供正等覺者の證入したる佛智は深し、入り難く解し難し、一切の聲聞獨覺の曉了し難き所なり。舍利子よ、其故は、諸如來應供正等覺者は實に百千俱胝那由他の諸佛に親近し、無上正等覺に於て百千俱胝那由他の諸佛の善行を行じ、精進の所作は遠く聞こむ、奇異未曾有の法を具し、曉了し難き法を具し、曉了し難き法を領納すればなり。舍利子よ、諸如來應供正等覺者の密意説は曉了し難きなり。其故は、彼等は種々の善巧方便 (Upaya-kauśalya) と智見 (jñāna-darśana) と因縁 (Hetukāraṇa) と根本理想 (Nirdeśa-ārambhaṇa) と言説 (Nirukti) と施設 (prajñapti) とを以て、各自緣起の諸法を詮顯し、此等の善巧方便を以て、彼彼

*密意説の譯語は支婁迦讖の金剛經の譯に依る。

如來方便。知見波羅蜜。皆已具足。舍利弗。如來知見。廣大深遠。無量無礙。力無所畏。禪定。解脫。三昧。深入無際。成就一切。未曾有法。舍利弗。如來能種種分別。巧說諸法。言辭柔軟。悅可衆心。舍利弗。取要言之。無量無邊。未曾有法。佛悉成就。止。舍利弗。不須復說。所以者何。佛所成就。第一希有。難解之法。唯佛與佛。乃能究盡。諸法實相。所謂諸法。如是相。如是性。如是體。如是力。如

方便品第二

に著する諸有情を度脱せしめんごすればなり。舍利子よ諸如來應供正等覺者は大善巧方便ご智見ごの最勝なる成滿 (Paramita) を得たり。舍利子よ、彼等諸如來應供正等覺者は無著無礙なる智見ご(十)力 (Bala) ご(四)無畏 (Vairadya) ご(十)八)不共法 (Ayonika) ご(五)根 (Indriya) ご(五)力 (Bala) ご(七)覺支 (Bojjhanga) ご(四)靜慮 (Dhyana) ご(八)解脫 (Vimoksha) ご等持 (Samadhi) ご等至 (Samapatti) ごの未曾有法を具し種々の法を詮顯し、大なる奇異未曾有を得たり。舍利子よ、所説をしてかくのごくならずしむれば足れり、舍利子よ、諸如來應供正等覺者は最勝なる未曾有を得たりご。舍利子よ、唯如來のみ如來の法を教ふるごを得るなり、如來は諸法を知る、舍利子よ、唯如來のみ一切法を教へ、唯如來のみ一切法をも知れり、諸法は何んぞや、諸法は云何んぞや、諸法は何の如きや、諸法は何なる相ありや、諸法は如何なる自性ありや。諸法は何ん

*等持は靜慮定にして等至は無色定なり

*秦譯のト如是の如くならず普譯に似たる所あり

是作。如是因。如是緣。如是果。如是報。如是本末究竟等。

爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言。
世雄不可量 諸天及世人
一切衆生類 無能知佛者
佛力無所畏 解脫諸三昧
及佛諸餘法 無能測量者
本從無數佛 具足行諸道
甚深微妙法 難見難可了
於無量億劫 行此諸道已
道場得成果 我已悉知見
如是大果報 種種性相義
我及十方佛 及能知是事
是法不可示 言辭相寂滅
諸餘衆生類 無有能得解
除諸菩薩衆 信力堅固者

ぞや、云何んぞや、何の如きや、如何なる相ありや、如何なる自性ありやご此等の諸法に於て唯如來のみ現在の守護者なり。

*其時世尊尙廣く此義を示しつゝ、伽陀を説て曰く。

- (一) 大勇健者は無量なり 天と人との世に於て、一切有情は諸導師を 全く知ること不能なり。
- (二) 彼等の力と解脫をも かくのごときの無所畏をも、かくのごときの佛法も 誰も知ること不能なり。
- (三) 俱胝の諸佛のみもとにて 過去に行をぞ行じける、甚深にして微妙なり 曉るもみるもみなかたし。
- (四) 不可思議俱胝の劫をへて その行業を行じてぞ、われこの菩提道場にて かくのごときの果を得たる。
- (五) それはいかにかにぞいか様ぞ またその相はいかなるぞ、われこのことをよく知れり 他の世導師もまたおなじ。

方便品第二

*此一行漢英皆闕く

諸佛弟子衆 曾供養諸佛
 一切漏已盡 住是最後身
 如是諸人等 其力所不堪
 假使滿世間 皆如舍利弗
 盡思共度量 不能測佛智
 正使滿十方 皆如舍利弗
 及餘諸弟子 亦滿十方利
 盡思共度量 亦復不能知
 辟支佛利智 無漏最後身
 亦滿十方界 其數如竹林
 斯等共一心 於億無量劫
 欲思佛實知 莫能知少分
 新發意菩薩 供養無數佛
 了達諸義趣 又能善說法
 如稻麻竹葦 充滿十方利
 一心以妙智 於恒河沙劫
 咸皆共思量 不能知佛智
 不退諸菩薩 其數如恒沙

一心共思求 亦復不能知
 又告舍利弗 無漏不思議
 甚深微妙法 我今已具得
 唯我知是相 十方佛亦然
 舍利弗當知 諸佛語無異
 於佛所說法 當生大信力
 世尊法久後 要當說眞實
 告諸聲聞衆 及求緣覺乘
 我令脫苦縛 速得涅槃者
 佛以方便力 示以三乘教
 衆生處處著 引之令得出

- (六) それを示すはいとかたし
 かくのごときの人もまた
 一切世間にあらぬなり。
- (七) 信心 領解 堅固 なる
 この法は彼に説かることも
 いかでか所説を知り得べき。
- (八) 世間 解者 の 諸 聲 聞
 最後身なる漏盡者も
 善逝のほむる成行者、
 時那の智慧には及ばれず。
- (九) たごひ一切の世界に
 一致して思ひ量ることも
 舍利子の如きみちくして、
 善逝の智は知りがたし。
- (十) 仁者の如き賢人の
 または其他の諸聲聞
 たごひ十方にみちくして、
 おなじくそれに充滿し。
- (一一) 一切彼等一致して
 わが無量の佛智をば
 善逝の智をはかることも、
 了知すること不能なり。
- (一二) 無漏清淨の獨覺者
 華と林の竹のごと
 最後身なる利根者は、
 一切十方に充滿し。

- (一三) 無邊 俱 胝 那 由 他 劫
 一致して思ひ量ることも
 わが無上法の一分を、
 實義を知ることなかりけり。
- (一四) 新 乘 發 趣 の 諸 菩 薩
 または十方に充滿し
 俱胝の諸佛を供養して、
 よく義を求め説法し。
- (一五) 常時に華と竹のごと
 善逝の説けるみのりをば
 たねす世界に充滿し、
 一致して思ひ量るべし。
- (一六) 俱 胝 多 劫 に 思 量 し て
 他なき心と妙智にて
 恒沙の如く無量なり、
 また其境界にあらぬなり。
- (一七) 不 退 轉 位 の 諸 菩 薩 も
 他なき心にはかることも
 恒沙の如く無量なり、
 また其境界にあらぬなり。
- (一八) 佛 法 甚 深 微 妙 な り
 十方世界の諸時那も
 無漏清淨不思議なり、
 われご同じくこれを知る。
- (一九) 舍 利 子 よ、 善 逝 の 説 け る を ば
 時那大仙は實語者なり
 信解力もて求むべし、
 久しく最上義を説けるなり。

爾時大衆中有諸聲聞。漏盡阿羅漢。阿若憍陳如等。千二百人。及發聲聞。辟支佛心。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。各作是念。今者世尊。何故慙歎。稱歎方便。而作是言。佛所得法。甚深難解。有所言說。意趣難知。一切聲聞。辟支佛。所不能及。佛說一解脫義。我等亦得此法。到於涅槃。而今不知。是義所趣。

爾時舍利弗。知四

衆心疑。自亦未了。而白佛言。世尊。何因何緣。慙歎稱歎。諸佛第一方便。甚深微妙。難解之法。我自昔來。未曾從佛。聞如是說。今著四衆。咸皆有疑。唯願世尊。敷演斯事。世尊何故。慙歎稱歎。甚深微妙。難解之法。

爾時舍利弗。欲重宣此義。而說偈言

慧日大聖尊 久乃說是法
自說得如是 力無畏三昧
禪定解脫等 不可思議法
道場所得法 無能發問者
我意難可測 亦無能問者
無問而自說 稱歎所行道

方便品第二

四四

(一〇) 一切これらの聲聞と 獨覺を求むる諸人と、
我れの滅度に安立し 苦縛を脱せし者に告ぐ。
(一一) これわが無上の善巧方便なり 世界に久しく説法す、
處々の著者を度せんとして 三乗教をぞ宣説する。
其時其會中の諸大聲聞。了本際を上首とせし。漏盡にして自制力ある。千二百の諸阿羅漢と。其他の聲聞乘の比丘。比丘尼。清信士。清信女と。獨覺乘に發趣せる者は。一切此念を作せり。『今何の因。何の緣ありて。世尊は極めて諸如來の善巧方便を稱歎したまふや。我が證得する此法は甚深なりと稱歎したまふや。一切の聲聞。獨覺の解し難き所なりと稱歎したまふや。由來世尊は唯一の解脫を説きたまひしが故に。我等も亦佛の法を得て。滅度を得たるなり。然るに我等。世尊の此所説の義を知ることなし』と。
其時具壽なる舍利子。其四衆の疑惑を知り。自心を以て他

の心疑を推知し。且つ自身も法疑を懷きて。其時世尊に問ふて曰く。『世尊よ。何の因。何の緣ありて。世尊は反覆して諸如來の善巧方便。智見説法を稱歎したまふや。我が證得する法は甚深なり。密意説は難解なりと。反覆して稱歎したまふや。我は未だ曾て世尊より。かくの如き法門を聞かざるなり。世尊よ。此四會は疑惑を懷けり。故に願はくば。世尊如來が反覆して如來の深法の稱歎を爲したまへる所の密意を宣説したまへ』と。

其時具壽なる舍利子は此等の伽陀を説て曰く。

(一二) 人中の日は今遂に かくの如きの説をなす、
力と解脫と静慮との 無量を我は得たりきと。
(一三) 道場を宣説なしたまふ 仁者に問ふ者さらになし、
密意を宣説なしたまふ 誰も仁者に問はぬなり。
(一四) 問ふ者なきに説きたまひ 自身の行をほめたまふ、

方便品第二

四五

智慧甚微妙 諸佛之所得
無漏諸羅漢 及求涅槃者
今皆墮疑網 佛何故說是
其求緣覺者 比丘比丘尼
諸天龍鬼神 及乾闥婆等
相視懷猶豫 瞻仰兩足尊
是事爲云何 願佛爲解說
於諸聲聞衆 佛說我第一
我今自於智 疑惑不能了
爲是究竟法 爲是所行道
佛口所生子 合掌瞻仰待
願出微妙音 時爲如實說
諸天龍神等 其數如恒沙
求佛諸菩薩 大數有八萬
又諸萬億國 轉輪聖王至
合掌以敬心 欲聞具足道

爾時佛告舍利弗。
止。止。不須復說。若說
是事。一切世間。諸天
及人。皆當驚疑。
舍利弗。重自佛言。
世尊。唯願說之。唯願
說之。所以者何。是會
無數。百千萬億。阿僧
祇衆生。曾見諸佛。諸
根猛利。智慧明了。聞
佛所說。則能敬信。
爾時舍利弗。欲重
宣此義。而說偈言
法王無上尊 唯說願勿慮
是會無量衆 有能敬信者

方便品第二

智得を宣説したまひて 甚深の法を説きたまふ。
三〇 今日我等疑情あり 自制力あり漏盡にて、
滅度を求むる人達も いかにか時那かく説けるぞこ。
三一 獨覺求むる人もまた 比丘も比丘尼もみなごもに、
諸天諸龍も諸藥叉も 諸乾闥婆も摩睺羅伽も。
三二 兩足尊を瞻仰し 互ひに語り合ひにけり、
また疑惑をも懐くなり 大牟尼これを説きたまへ。
三三 こゝに一切善逝の 諸聲聞はあつまれり、
我は成満を得たるぞこ 最上仙はのたまへり。
三四 最上人よ、我が位置に なほまた私の疑惑あり、
我に示せる所行は 滅度を究竟し得べきかこ。
三五 微妙鼓音よ、發聲し 如實に法を説きたまへ、
時那の正子はこゝに立ち 合掌して時那を瞻仰す。
三六 天龍藥叉羅刹婆 千億恒沙の如くなり、

滿八十千こゝに立ち 無上菩提を求むなり。
三七 諸王地王轉輪王 千億土より來りてぞ、
いかに所行を具せんぞこ 合掌恭敬して立ちにける。
是の如く言はれたる時世尊、具壽なる舍利子に告げて曰
く。『足れり、舍利子よ、何んぞ此義を説くを用ひんや、其故は
舍利子よ、若し此義の説かるゝ時は、此天をも含有せる世間
は驚愕すべければなり』。
具壽なる舍利子再び世尊に請ふて曰く。『願くば世尊、願
くば善逝、此義を説きたまへ、其故は、世尊よ、此會中に、過去の
諸佛を拜見し、智慧ありて、世尊の所説を信樂し奉行し受持
すべき數百、數千、數百千、數百千俱胝那由他の有情あればなり』。
其時舍利子伽陀を以て世尊に白して曰く。
三〇 最上時那よ、明示せよ この會は數千の有情あり、
善逝を信愛敬重し 所説の法を了知せむ。

佛復止舍利弗。若
說是事。一切世間。天
人阿修羅。皆當驚疑。
增上慢比丘。將墜於
大坑。

爾時世尊。重說偈
言。

止不須說。我法妙難思。
諸增上慢者。聞必不敬信。

爾時舍利弗。重白
佛言。世尊。唯願說之。
唯願說之。今此會中。
如我等比。百千萬億。
世世已曾。從佛受化。
如此人等。必能敬信。
長夜安穩。多所饒益。
爾時舍利弗。欲重
宣此義。而說偈言。

其時世尊亦再び舍利子に告げて曰く。『足れり、舍利子よ
此義を説くを用ひんや、舍利子よ、若し此義の説かるゝ時は、
此天をも含有せる世間は驚愕し、而して増上慢なる諸比丘
は大なる過誤に墜落すべければなり』。

其時世尊伽陀を説て曰く。

〔四〕説法すべしと言ふ勿れ。この智は微妙難思なり、

増上慢の愚者多し。説く法を知らず譏るなり。

具壽なる舍利子三たび世尊に請ふて曰く。『願くば世尊
願くば善逝、此義を説きたまへ、世尊よ、此會中に、我と等しき
數百の有情あり、又其他の數百、數千、數百千、數百千俱胝那由
他の有情あり、彼等は已に前生に於て世尊に教化せられた
り、故に當に世尊の所説を信樂し奉行し受持すべきなり其
〔法〕は長夜に彼等の利益安樂の爲めなるべければなり』と。
其時具壽なる舍利子伽陀を説て曰く。

無上兩足尊。願説第一法。

我爲佛長子。唯垂分別説。

是會無量衆。能敬信此法。

佛已曾世世。教化如是等。

皆一心合掌。欲聽受佛語。

我等千二百。及餘求佛者。

願爲此衆故。唯垂分別説。

是等聞此法。則生大歡喜。

爾時世尊。告舍利

弗。汝已懇勸三請。豈

得不説。汝今諦聽。善

思念之。吾當爲汝。分

別解説。

説此語時。會中有
比丘比丘尼。優婆塞。
優婆夷。五千人等。即
從座起。禮佛而退。所
以者何。此輩罪根深
重。及増上慢。未得謂

〔五〕兩足尊よ、法を説きたまへ。長子たる我は仁者に請ふ、

こゝに千億の有情あり。所説の法を信すべし。

〔六〕前の世常に仁者より。有情は長夜に教へらる、

みな合掌してこゝに立ち。仁者の法を信すべし。

〔七〕我と等しき千二百。其他求道の者もあり、

善逝此を見説きたまへ。大歡喜をば生すべし。

其時世尊、三たび舍利子の請へることを見て、具壽なる舍
利子に告げて曰く。『舍利子よ、今汝は三たびまでも如來に
請へり、舍利子よ、我は是の如く請へる汝に答ふべし。故に
舍利子よ、聽け、善く正に思念せよ、我汝の爲めに説くべし』。
世尊此語を説き給ひし時、五千の増上慢なる比丘比丘尼、
清信士、清信女は、其座より起ち、頭を以て世尊の兩足を禮し
て、其會より去りにき。即ち是れ増上慢なる善根に由て未得
を得と想ひ、未證を證と想ひ、自身を梵天と俱なりと信じて、

*此一段晉
秦英譯と
一致せず
晉譯には
慢無巧便
秦譯には
罪根深重
及増上慢

得。未證謂證。有如此失。是以不住。世尊默然而不制止。

爾時佛告舍利弗。我今此衆。無復枝葉。純有眞實。舍利弗。如是增上慢人。退亦佳矣。汝今善聽。當爲汝說。舍利弗言。唯然。世尊。願樂欲聞。

佛告舍利弗。如是妙法。諸佛如來。時乃說之。如優曇鉢華。時一現耳。舍利弗。汝等當信。佛之諸說。言不虛妄。舍利弗。諸佛隨宜說法。意趣難解。所以者何。我以無數方便。種種因緣。譬喻言詞。演說諸法。是法非

思量分別之所能解。唯有諸佛。乃能知之。所以者何。諸佛世尊。唯以一大事因緣故。出現於世。舍利弗。云何名諸佛世尊。唯以一大事因緣故。出現於世。諸佛世尊。欲令衆生。開佛知見。使得清淨故。出現於世。欲示衆生。佛知見故。出現於世。欲令衆生。悟佛知見故。出現於世。欲令衆生。入佛知見道故。出現於世。舍利弗。是爲諸佛。唯以一大事因緣故。出現於世。佛告舍利弗。諸佛

方便品第二

此會より去りたり。而して世尊は默然として住せしめ給ひき。其時世尊具壽なる舍利子に告げて曰く。『舍利子よ。我が會は棘なく。廢物なく。信實に於て安立せり。舍利子よ。此等の増上慢者の過去は佳なりとす。故に舍利子よ。我、其義を説くべし。』然り世尊よ。具壽なる舍利子は世尊に對へき。

世尊曰く。『舍利子よ。如來、時ありて時に是の如き法教を説けり。舍利子よ。譬へば靈瑞(Udumbara)華の時ありて時に現するが如く、是の如く、舍利子よ。如來も亦時ありて時に是の如き法教を説けり。舍利子よ。我を信せよ。我は眞語者なり。我は如語者なり。我は無異語者なり。舍利子よ。如來の密意説は解了し難きなり。其故は、舍利子よ。種々の言説、顯示解説、圖解なる、多百千の善巧方便を以て我は法を説けばなり。舍利子よ。妙法は超理なり。理解の境に非ず。如來の分別するのみなり。其故は、舍利子よ。如來應供正等覺者は、一の

とあれども梵本には不善根と見るべき阿の音なし

目的、一の所作大目的、大所作を以て世に出現すればなり。舍利子よ。如來應供正等覺者が其目的を以て世に出現する所の、如來の一の目的、一の所作、大目的、大所作とは何んぞや。曰く、諸有情をして如來の智見に安立せしめんが爲の故に如來應供正等覺者は世に出現せり。諸有情をして如來の智見を示さんが爲めの故に、如來應供正等覺者は世に出現せり。諸有情をして如來の智見に入らしめんが爲めの故に、如來應供正等覺者は世に出現せり。諸有情をして如來の智見を悟らしめんが爲の故に、如來應供正等覺者は世に出現せり。諸有情をして如來の知見道に入らしめんが爲の故に如來應供正等覺者は世に出現せり。舍利子よ。此は如來の世に出現せる一の目的、一の所作、大目的、大所作、一の意見なり。舍利子よ。是の如く實に如來は是を如來の一の目的、一の所作、大目的、大所作と爲すなり。其故は舍利子よ、

英譯には示と開との二節のみ秦譯には開示偈入の四節あり晉譯は此梵本と同一五節あり

如來。但教化菩薩。諸有諸作。當爲一事。唯以佛之知見。示悟衆生。舍利弗。如來但以。一佛乘故。爲衆生說法。無有餘乘。若二若三。舍利弗。一切十方諸佛。法亦如是。

舍利弗。過去諸佛。以無量無數方便。種種因緣。譬諭言辭。而爲衆生。演說諸法。是法皆爲。一佛乘故。是諸衆生。從諸佛聞法。究竟皆得。一切種智。

我實に如來の智見に安立せしむる者なり。舍利子よ、我は實に如來の智見を示す者なり。舍利子よ、我は實に如來の智見に入らしむる者なり。舍利子よ、我は實に如來の智見を悟らしむる者なり。舍利子よ、我は實に如來の智見に入らしむる者なればなり。舍利子よ、我は唯一乘を以て始めとして諸有情に法を説けり、即ち是れ佛乘なり、舍利子よ、或る第二、或は第三の乘は在ること無し。舍利子よ、此は一切十方世界に於ての法性なり。

『舍利子よ、過去の時、十方無量無數の世界に在せし所の彼諸如來應供正等覺者も亦群生の利益安樂の爲め、世間の哀愍の爲め、生類の大衆の義利の爲め、諸天と諸人との利益安樂の爲めに、種々の信解と性質の偏向ある諸有情の志樂を知りて、種々の指示と、顯示と、種々の因縁と、根本思想と、言説との善巧方便を以て、法を説きたまひき。舍利子よ、彼一切

舍利弗。未來諸佛。當出於世。亦以無量。無數方便。種種因緣。譬諭言辭。而爲衆生。演說諸法。是法皆爲。一佛乘故。是諸衆生。從佛聞法。究竟皆得。一切種智。

諸佛世尊も亦一乘を以て始めとして、諸有情に法を説きたまひき、即ち是れ佛乘なり、一切智を究竟とす。即ち是れ諸有情をして同じく如來の智見に安立せしめ、如來の智見を示し、如來の智見に入らしめ、如來の智見を悟らしめ、如來の智見道に入らしめんが爲めに、法を説きたまひき。舍利子よ、此過去の諸如來應供正等覺者より妙法を聞きたる所の彼諸有情も亦皆無上なる正等覺を得たりき。

『舍利子よ、未來の時、十方無量無數の世界に在すべき所の彼諸如來應供正等覺者も亦群生の利益安樂の爲め、世間の哀愍の爲め、生類の大衆の義利の爲め、諸天と諸人との利益安樂の爲めに、種々の信解と、性質の偏向ある諸有情の志樂を知りて、種々の指示と、顯示と、種々の因縁と、根本思想と、言説との善巧方便を以て、法を説きたまふべし。舍利子よ、彼一切諸佛世尊も亦唯一乘を以て始めとして、諸有情に法を

舍利弗。現在十方。無量百千萬億。佛土中。諸佛世尊。多所饒益。安樂衆生。是諸佛。亦以無量。無數方便。種種因緣。譬諭言辭。而爲衆生。演說諸法。是法皆爲。一佛乘故。是諸衆生。從佛聞法。究竟皆得。一切種智。

説きたまふべし。即ち是れ佛乘なり。一切智を究竟とす。即ち是れ諸有情をして同じく如來の智見に安住せしめ、如來の智見を示し、如來の智見に入らしめ、如來の智見を悟らしめ、如來の智見道に入らしめんが爲めに法を説きたまふべし。舍利子よ、此未來の諸如來應供此等覺者より此法を聞くべき所の彼諸有情も亦皆無上なる正等覺を得るなるべし。

『舍利子よ、今現在の時、十方無量無數の世界に住し、留まり其身を持ち、法を説きたまふ所の彼諸如來應供正等覺者も亦群生の利益安樂の爲め、世間の哀愍の爲め、生類の大衆の義利の爲め、諸天と諸人との利益安樂の爲めに、種々の信解と、性質の偏向ある諸有情の志樂を知りて、種々の指示と、顯示と、種々の因縁と、根本思想と、言説との善巧方便を以て、法を説きたまふ。舍利子よ、彼一切諸佛世尊も亦唯一乘を以て始めとして、諸有情に法を説きたまふ、即ち是れ佛乘なり、

一切智を究竟とす、即ち是れ諸有情をして同じく如來の智見に安住せしめ、如來の智見を示し、如來の智見に入らしめ、如來の智見を悟らしめ、如來の智見道に入らしめんが爲めに、法を説きたまふ。舍利子よ、此現在の諸如來應供正等覺者より此法を聞く所の彼諸有情も亦皆無上なる正等覺を得るなるべし。

舍利弗。是諸佛。但教化菩薩。欲以佛之知見。示衆生故。欲以佛之知見。悟衆生故。欲令衆生。入佛知見道故。舍利弗。我今亦復如是。知諸衆生。有種種欲。深心所著。隨其本性。以種種因縁。譬諭言辭。方便力故。

『舍利子よ、今我れ如來應供正等覺者も亦群生の利益安樂の爲め、世間の哀愍の爲め、生類の大衆の義利の爲め、諸天と諸人との利益安樂の爲めに、種々の信解と、性質の偏向ある諸有情の志樂を知りて、種々の指示と、顯示と、種々の因縁と、根本思想と、言説との善巧方便を以て法を説けり。舍利子よ、我も亦唯一乘を以て始めとして、諸有情に法を説けり、即ち是れ佛乘なり、一切智を究竟とす、即ち是れ諸有情をして同じく如來の智見に安住せしめ、如來の智見を示し、如來の

而爲說法。舍利弗。如此皆爲。得一佛乘。一切種智故。舍利弗。十方世界中。尚無二乘。何況有三。

舍利弗。諸佛出於五濁惡世。所謂劫濁。煩惱濁。衆生濁。見濁。命濁。如是。舍利弗。劫濁亂時。衆生垢重。慳貪嫉妬。成就諸不善根故。諸佛以方便力。於一佛乘。分別說三。舍利弗。若我弟子。自謂阿羅漢。辟支佛者。不聞不知。諸佛如來。但教化菩薩事。此非佛弟子。非阿羅漢。非辟支佛。

又舍利弗。是諸比丘。比丘尼。自謂已得阿羅漢。是最後身。究竟涅槃。便不復志求。阿耨多羅三藐三菩提。當知此輩。皆是增上慢人。所以者何。若有比丘。實得阿羅漢。若不信此法。無有是處。除佛滅度後。現前無佛。所以者何。佛滅度後。如是等經。受持讀誦。解其義者。是人難得。若遇餘佛。於此法中。便得決了。舍利弗。汝等當一心信解。受持佛語。諸佛如來。言無虛妄。無有餘乘。唯一佛乘。

智見に入らしめ、如來の智見を悟らしめ、如來の智見道に入らしめんが爲めに、法を説けり。舍利子よ、今我より此法を聞く所の彼諸有情も亦皆無上なる正等覺を得るなるべし。是故に舍利子よ、當さに知るべし、十方世界に於て第二乘の施設する尙有ることなし、何に況んや第三をやこ。

『然れども又舍利子よ、諸如來應供正等覺者が、或は劫濁、或は有情濁、或は煩惱濁、或は見濁、或は命濁の中に興出したまひ、舍利子よ、是の如き劫亂濁の中、諸有情は垢重、慳貪、善根薄少なる時は、舍利子よ、諸如來應供正等覺者は善巧方便を以て、三乘の稱呼に由りて、彼唯一佛乘を顯示したまふなり。舍利子よ、今此活動作なる、如來の佛乘に安立せしめたまふことを聞かず、入らず、悟らざる所の彼聲聞、應供、或は獨覺は舍利子よ、如來の聲聞ども、應供ども、獨覺ども、認識すべからざるなり。』

『然れども又舍利子よ、若し比丘或は比丘尼ありて、應供性を得たりとし、無上なる正等覺に發願せずして、我は佛乘より斷除せらると言ひ、乃至滅度に至る我が出現の最後身なりと言ふならば、舍利子よ、彼を増上慢の人なりと知れ。其故は、舍利子よ、若し比丘ありて、無漏の應供にして、如來の前に於て法を聞きて信せずんば、不相應にして、其處なければなり、唯如來滅度の時を除く。其故は、舍利子よ、如來滅度の其時分に於て、是の如き經典を或は持ち、或は示す所の諸聲聞あるべからざればなり。又舍利子よ、他の諸如來應供正等覺者に於て、彼等は疑を除くべし。舍利子よ、此諸佛の法に於て、汝等は我を信解受持せよ。其故は、舍利子よ、諸如來の妄語は在ること無ければなり、舍利子よ、唯此一乘のみ、即ち是れ佛乘なり。』

其時世尊尙廣く此義を示しつゝ、伽陀を説て曰く。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言
 比丘比丘尼 有懷增上慢
 憍婆塞我慢 憍婆夷不信
 如是四衆等 其數有五千
 不自見其過 於戒有缺漏
 護惜其瑕疵 是小智已出
 衆中之糟糠 佛威德故去
 斯人眇福德 不堪受是法
 此衆無枝葉 唯有諸真實
 舍利弗善聽 諸佛所得法
 無量方便力 而爲衆生說
 衆生心所念 種種所行道
 若干諸欲性 先世善惡業
 佛悉知是已 以諸緣譬諭
 言辭方便力 令一切歡喜
 或說脩多羅 伽陀及本事
 本生未曾有 亦說於因緣

- (三) 増上慢を得たるひと 比丘と比丘尼と清信士、清信女も亦不信にて その數全く五千なり。
- (四) このあやまちをながめつゝ 學にはもとより缺漏あり、おほくの瑕疵をまもりてぞ 小智のものは去りにける。
- (五) 會中の奸詐なりと知り また廢物と世主はいふ、この法門を聞き得べき 善は彼等にさらになし。
- (六) 清淨にして殻皮なく 我が會はいまや發趣せり、一切無實をはなれてぞ その眞實に住しける。
- (七) 舍利子我れよりこれを聞け 最上人はいかに法を知る、種々に善巧方便し 諸佛導師は説きたまふ。
- (八) この土の俱胝の有情等の 心行種々の信解あり、彼等の種々の作業と 其宿善をも知れるなり。
- (九) 種々の言説諸緣もて 彼等に此を得しむなり、我亦因と諸譬諭もて かく群生を喜ばす。

*晋譯には不自見瑕穢とし秦譯には不自見其過となせしも梵本には不の字なし

譬諭并祇夜 優波提舍經
 鈍根樂小法 貪著於生死
 於諸無量佛 不行深妙道
 衆苦所惱亂 爲是說涅槃
 我設是方便 令得入佛慧
 未曾說汝等 當得成佛道
 所以未曾說 說時未至故
 今正是其時 決定說大乘
 我此九部法 隨順衆生說
 入大乘爲本 以故說是經
 有佛子心淨 柔軟亦利根
 無量諸佛所 而行深妙道
 爲此諸佛子 說是大乘經
 我記如是人 來世成佛道
 以深心念佛 修持淨戒故
 此等聞得佛 大喜充偏身
 佛知彼心行 故爲說大乘
 聲聞若菩薩 聞我所說法

- (一) 我れまた經と伽陀を説き 本事と本生と未曾有と、種々の譬諭もて緣起をも 重頌と論議も説けるなり。
- (二) 小法を樂しむ無智者あり 俱胝の諸佛に奉事もせず、流轉に著して苦しめり 彼等に滅度を示すなり。
- (三) 佛智を得しめん爲めにとて 自生者方便をなせるなり、汝等佛に成るべしと 説きたることはさらになし。
- (四) 能者は時を待ちしなり 時を見て何に説かざらむ、其時はまれに今得たり ことゝに實證を我説かむ。
- (五) 我が此の九部の教法は 有情の利鈍によりて説く、我れ此の方便を説き示し 惠與者の智に入らしめき。
- (六) 此の土につねに清淨なる 賢善可愛の佛子あり、俱胝の諸佛に奉事せりき 方等經を爲めに説く。
- (七) 彼等は志樂の成満と 清淨の相を具足せり、汝等來世に慈愍なる 佛とならんと我は説く。

*十二分教の時第一の經第二を重頌第四を伽陀第六を緣起第八を本事第九を本生第十一を未曾有法第十二を論議とす

乃至於一偈 皆成佛無疑
 十方佛土中 唯有一乘法
 無二亦無三 除佛方便說
 但以假名字 引導於衆生
 說佛智慧故 諸佛出於世
 唯此一事實 餘二則非眞
 終不以小乘 濟度於衆生
 佛自住大乘 如其所得法
 定慧力莊嚴 以此度衆生
 自證無上道 大乘平等法
 若以小乘法 乃至於一人
 我則墮墮食 此事爲不可
 若人信歸佛 如來不欺誑
 亦無貪嫉意 斷諸法中惡
 故佛於十方 而濁無所畏
 我以相嚴身 光明照世間
 無量衆所尊 爲說實相印
 舍利弗當知 我本立誓願

方便品第二

(五) 聞きて一切喜べり 世首たる佛となるべしと、
 彼等の行を我知りて 方等經を説けるなり。
 (五) 尊師の此等の聲聞も この無上法を聞きしかば、
 一偈を聞くも受持するも 一切成道疑はず。
 (四) 世間には唯一乘あり 第二第三さらになし、
 種々なる乗を説くことは 人最上者の方便なり。
 (五) 佛智を説かん爲めにとて 世主は世間に出づるなり、
 唯一事あり第二なし 諸佛は小乗にては濟度せず。
 (五) 自生者自身のあるところ かくのごとき智覺あり、
 力定解脫根もあり そこに有情も安住す。
 (五) 我れ淨勝覺を得たるのち 一有情をも小乘に、
 安住せしめば慳貪の 過失ありてぞ不可とする。
 (五) 我にはいかなる慳もなし 嫉・欲染も我になし、
 諸法の惡を斷除して 世間に知られて佛となる。

*第五四偈は、晉譯には佛道有一、未曾有二、何況一世、而當有三、除人中上、人行權方便、以用乘故、開化說法、せり。秦譯には十方佛土中、唯有一乘法、無二亦無三、除佛方便說なり。小乘を晉譯には下劣乘とせり。

欲令一切衆 如我等無異
 如我昔所願 今者已滿足
 化一切衆生 皆令入佛道
 若我遇衆生 盡教以佛道
 無智者錯亂 迷惑不受教
 我知此衆生 未曾修善本
 堅著於五欲 癡愛故生惱
 以諸欲因緣 墜墮三惡道
 輪回六趣中 備受諸苦毒
 受胎之微形 世世常增長
 薄德少福人 衆苦所逼迫
 入邪見稠林 若有若無等
 依止此諸見 具足六十二
 深著虛妄法 堅受不可捨
 我慢自矜高 詭曲心不實
 於千萬億劫 不聞佛名字
 亦不聞正法 如是人難度
 是故舍利弗 我爲設方便

(五) 一切世間を照しつゝ、 我は相もてかざりけり、
 多百有情に敬せられ この法自性印を我れ説かむ。
 (六) 舍利子よ、我はかく思ふ いかには群生もかくあらむ、
 三十二相を持ちたる 世間解自生者自照せむ。
 (六) 我が見るごとく思ふごとく 往古に分別せしごとし、
 我がこの願は成滿し 佛の菩提を宣説す。
 (三) 舍利子、我れ若し有情等に 菩提に起欲を勸めなば、
 一切無智者は迷亂し 我が善言を取らざらむ。
 (三) 前生に行を修せざりし 彼等をかくと我は知る、
 欲に著して堅固なり 愛に迷ひて癡心あり。
 (四) 六趣の中に惱みつゝ、 欲より惡趣に墮在せり、
 かさねて胎形を増長し 少福にして苦に逼らるゝ。
 (五) 有と無と如是と不如是との 邪見の林に常に入る、
 六十二見を檢査して 不實有を取り安住す。

*英譯には佛智を説かずとすれども余が梵本の寫本には否決の語なし。
 *胎形は秦譯の受胎之微形の一句に據る、晉譯には黑冥之法とせり、英譯

說諸善苦道 示之以涅槃
 我雖說涅槃 是亦非真滅
 諸法從本來 常自寂滅相
 佛子行道已 來世得作佛
 我有方便力 開示三乘法
 一切諸世尊 皆說一乘道
 今此諸大衆 皆應除疑惑
 諸佛語無異 唯一無二乘
 過去無數劫 無量滅度佛
 百千萬億種 其數不可量
 如是諸世尊 種種緣譬論
 無數方便力 演說諸法相
 是諸世尊等 皆說一乘法
 化無量衆生 令入於佛道
 又諸大聖主 知一切世間
 天人衆生類 深心之所欲
 更以異方便 助顯第一義
 若有衆生類 值諸過去佛

方便品第二

- (六) 改め 難き 慢虚飾 曲惡少聞愚癡にして、
千俱胝生のあひだにも 佛の妙音を聞かぬなり。
苦惱の有情を觀見し 苦盡を作せと説けるなり、
また滅度をも示すなり、
常滅の性と我は説く、
未來世時那となりぬべし。
是れ我が善巧方便なり、
一乗すなはち一法なり。
疑ふ者に知らしめよ、
此は一乗にして第二なし。
多千の滅度の諸佛なり、
その數さらに知れぬなり。
多百の因縁説明と、
最淨法を説示する。
- (七) かく疑惑をば除き去れ 疑ふ者に知らしめよ、
世の導師は無異語者ぞ
此は一乗にして第二なし。
過去の如來もまし／＼き 多千の滅度の諸佛なり、
過去の世、無數の劫波にて 其の數さらに知れぬなり。
(七) これら一切の最上人 多百の因縁説明と、
善巧方便を用ひてぞ 最淨法を説示する。

には樂處
 と譯し
 て、新た
 なる生と
 註せり

若聞法布施 或持戒忍辱
 精進禪智等 種種修福德
 如是諸人等 皆已成佛道
 諸佛滅度已 若人善願心
 如是諸衆生 皆已成佛道
 諸佛滅度已 供養舍利者
 起萬億種塔 金銀及頗黎
 碑碣與碼碯 玫瑰琉璃珠
 清淨廣嚴飾 莊校於諸塔
 或有起石廟 栴檀及沈水
 木椽并餘材 瓶瓦泥土等
 若於曠野中 積土成佛廟
 乃至童子戲 聚沙爲佛塔
 如是諸人等 皆已成佛道
 若人爲佛故 建立諸形像
 刻彫成衆相 皆已成佛道
 或以七寶成 鍮鉈赤白銅
 白鐵及鉛錫 鐵木及與泥

- (七) みな一乘を示しけり たゞ一乘を紹介し、
不思議千億の衆生を 一乗に於て熟せしむ。
(八) 時那には種々の方便あり 信解樂欲を知了して、
天と世間に如來は 我が最上法を示しけり。
(九) 一切、諸佛の現前に 法を聞くもの、聞きしもの、
施を布き戒を行じつゝ、 忍にて諸行を成就せり。
(十) 進と定とに成功し 智にて諸法を思量せり、
種々の福をば修してこそ 一切、覺を得たるなれ。
(十一) 彼等滅度の諸時那の 教に住する諸有情は、
忍と調意に導かれ 一切、覺を得たりけり。
(十二) 彼等滅度の諸時那の 遺形供養をなすものは、
黄金 白銀 水精の 多千の寶塔を起立せり。
(十三) また綠玉と猫睛と 眞珠と最上の青玉と、
碧玉の塔を起立して 一切、覺を得たりけり。

方便品第二

梵本の第
 三句に不
 明の語あり

或以膠漆布 嚴飾作佛像
 如是諸人等 皆已成佛道
 綵畫作佛像 百福莊嚴相
 自作若使人 皆已成佛道
 乃至童子戲 若艸木及華
 或以指爪甲 而畫作佛像
 如是諸人等 漸漸積功德
 具足大悲心 皆已成佛道
 但化諸菩薩 度脫無量衆
 若人於塔廟 寶像及畫像
 以華香幡蓋 敬心而供養
 若使人作樂 擊鼓吹角貝
 簫笛琴箏磬 琵琶鐃銅鈸
 如是衆妙音 盡持以供養
 或以歡喜心 歌頌頌佛德
 乃至一小音 皆已成佛道
 若人散亂心 乃至以一華
 供養於畫像 漸見無數佛

或有人禮拜 或復但合掌
 乃至舉一手 或復小低頭
 以此供養像 漸見無量佛
 自成無上道 廣度無數衆
 入無餘涅槃 如薪盡火滅
 若人散亂心 入於塔廟中
 一稱南無佛 皆已成佛道
 於諸過去佛 現在或滅後
 若有聞是法 皆已成佛道
 未來諸世尊 其數無有量
 是諸如來等 亦方便說法
 一切諸如來 以無量方便
 度脫諸衆生 入佛無漏智
 若有聞法者 無一不成佛
 諸佛本誓願 我所行佛道
 誓欲令衆生 亦同得此道
 未來世諸佛 雖說百千億
 無數諸法門 其實爲一乘

方便品第二

- (六〇) また石塔を作るあり または梅檀密香樹、
 天木の塔を作るあり または餘材を集めたり。
 (六一) 埴瓦や土を集めつゝ 喜び時那塔を起立せり、
 または供養の爲めにとて 土墳を荒野に作るあり。
 (六二) 小童處々に戯むれて 沙の積聚を作りてぞ、
 時那の塔となしにける 一切、覺を得たりけり。
 (六三) 三十二相を具足せる 寶の像を作らしめ、
 これを供へしものもあり 一切、覺を得たりけり。
 (六四) 或るは七つの寶にて または赤銅黃銅の、
 善逝の像を作りにき 一切、覺を得たりけり。
 (六五) 或るは鉛鐵泥土にて また漆灰にて美麗なる、
 善逝の像を作りにき 一切、覺を得たりけり。
 (六六) 畫壁に像を作るあり 百福の相身に満てり、
 自畫もあり又他畫もあり 一切、覺を得たりけり。

- (六七) またもろ／＼の弟子ありて 遊び樂しみ木片を、
 爪にて壁に像をかき 一切、覺を得たりけり。
 (六八) これらの人も小童も 一切彼等は慈悲ありて、
 多くの菩薩を化してこそ 俱胝の衆生を救ふなれ。
 (六九) もろ／＼の如來の遺形に または塔にも土像にも、
 壁の畫像と土塔にも 華香を供ふるものありき。
 (七〇) またかく樂を奏せしむ 鼓と螺と美音の銅鼓あり、
 銀胴の大鼓も響かされ 最上覺をぞ供養する。
 (七一) 笛と鏡の響きあり 小鼓と蘆笛の聲樂し、
 合奏はなはだ和らぎぬ 一切、覺を得たりけり。
 (七二) 樂器も彼等に奏せられ または水調また異調、
 善逝の供養を顯はして 和雅なる歌は歌はれき。
 (七三) 一切この世に成佛す 多種の遺形を禮拜し、
 善逝の遺形に少分も 一の樂器を奏しけり。

方便品第二

*第九一偈
 第三句の
 梵本に不
 明の語あり
 *第二九偈
 第二第四
 の二句に
 も亦然り

諸佛兩足尊 知法常無性
佛種從緣起 是故說一乘
是法住法位 世間相常住
於道場知已 導師方便說
天人所供養 現在十方佛
其數如恒沙 出現於世間
安穩衆生故 亦說如是法
知第一寂滅 以方便力故
雖示種種道 其實爲佛乘
知衆生諸行 深心之所念
過去所習業 欲性精進力
及諸根利鈍 以種種因緣
譬諭亦言辭 隨應方便說
今我亦如是 安穩衆生故
以種種法門 宣示於佛道
我以智慧力 知衆生性欲
方便說諸法 皆令得歡喜
舍利弗當知 我以佛眼觀

方便品第二

(四) 一の華もて禮しつゝ、善逝の像を壁にかき、
散亂心もて禮するも、漸次に億佛に見ゆべし。
(五) 彼等は塔に合掌し、また具足して禮拜し、
唯一瞬間頭を舉げ、またはひとたび身を屈す。
(六) 散亂心のひとにても、遺形奉持の處にて、
ひとたび南無佛と稱ふれば、最上覺をぞ證得する。
(七) 滅度とまたは現在の、彼諸善逝のその時に、
法の名のみ聞く諸有情は、一切覺を得たりけり。
(八) 未來多億の諸佛も、不可思議にしてはかりなし、
かの最上世主時那等も、この方便を説示せむ。
(九) 彼等の世間の導師の、善巧方便かぎりなし、
無漏の佛智にそれをもて、俱胝の衆生を化導せむ。
(一〇) ひとりの有情も法を聞き、佛と成らぬものはなし、
行じて覺に導くは、それぞ如來の願なる。

*第九六傷は秦譯の若人散亂心、入於塔廟中、一稱南無佛、皆已成佛道に當る

*第一〇〇傷の初二句は秦譯の若有聞

見六道衆生 貧窮無福慧
入生死險道 相續苦不斷
深著於五欲 如羸牛愛尾
以貪愛白蔽 盲瞑無所見
不求大勢佛 及與斷苦法
深入諸邪見 以善欲捨苦
爲是衆生故 而起大悲心
我始坐道場 却樹亦經行
於三七日中 思惟如是事
我所得智慧 微妙最第一
衆生諸根鈍 著樂解所盲
如斯之等類 云何而可度
爾時諸梵王 及諸天帝釋
護世四天王 及大自在天
并餘諸天衆 眷屬百千萬
恭敬合掌禮 請我轉法輪
我即自思惟 若但讚佛乘
衆生沒在苦 不能信是法

(一〇) 多千俱胝の法樂を、未來世に彼等は宣説し、
この一乘を示しつゝ、如來性にて説法せむ。
(一一) 法眼つねに相續し、法性つねに著るし、
佛兩足尊はこれを知り、この一乘を説示せむ。
(一二) 法住とまた法の位と、世に動かざる常住と、
道場に覺を證得し、善巧方便を説示せむ。
(一三) 十方人天の供養する、恒沙のごとき諸佛あり、
衆生安樂の爲めにとて、最上覺をぞ宣示する。
(一四) 善巧方便明しつゝ、種々の乘をば示せども、
諸佛は最勝寂靜地を、一乘なりと宣説す。
(一五) 一切衆生の所行と、またその志樂と過去の業、
精進勢力性癡を、知りてぞ彼等は示すなる。
(一六) 導師の智力は諸縁と、諸因と譬喩を示すなり、
有情の性癡を知り得てぞ、種々の言辭を示すなる。

法者、無一成不佛に當る *普譯には法樂を法門に作る *第一〇二傷の第二句は秦譯の佛從緣起に當るも一致せず *第一〇三傷は秦譯の是法住法位世間相常住云云に當る

方便品第二

被法不信故 墜於三惡道
 戰寧不說法 疾入於涅槃
 尋念過去佛 所行方便力
 我今所得道 亦應說三乘
 作是思惟時 十方佛皆現
 梵音慰諭我 善哉釋迦文
 第一之導師 得是無上法
 隨語一切佛 而用方便力
 我等亦皆得 最妙第一法
 爲諸衆生類 分別說三乘
 少智樂小法 不自信作佛
 是故以方便 分別說諸果
 雖復說三乘 但爲救苦薩
 舍利弗當知 我聞聖師子
 深淨微妙音 喜稱南無佛
 復作如是念 我出濁惡世
 如諸佛所說 我亦隨順行
 思惟是事已 即趣波羅奈

方便品第二

(一八)時那主導師の我も今 現在の有情を利せんとして、
 種々千億の言辭えて この佛覺をば宣示する。
 (一九)衆生の性欲を了知して 多種の法をば宣説し、
 種々方便して喜ばす これ我が智恵の力なり。
 (二〇)貧窮の有情を我は見る 智にも福にもはなれたり、
 滅惡趣にぞ流轉して 苦の相續に沈沒する。
 (二一)犁牛の尾に愛著するがごと つねに欲もて失明し、
 大勢の佛をも尋求せず 苦盡の法にも近づかず。
 (二二)六趣に默在の心もて 邪見に住して動くなし、
 苦より苦に入る彼等には 我は大悲をおこすなり。
 (二三)我れ彼の菩提道場に 滿三七日安坐して、
 かしこの樹をば觀見し この義を知りて思惟しき。
 (二四)樹王を見つめて觀察し その樹の下に經行す、
 この智は未曾有最勝なり 有情は癡盲無智なりと。

*默在の二
 字は晉譯
 に從ふ英
 譯も同じ

諸法寂滅相 不可以言宣
 以方便力故 爲五比丘說
 是名轉法輪 便有涅槃音
 及以阿羅漢 法僧差別名
 從久遠劫來 讚示涅槃法
 生死苦永盡 我常如是說
 舍利弗當知 我見佛子等
 志求佛道者 無量千萬億
 咸以恭敬心 皆來至佛所
 曾從諸佛聞 方便所說法
 我即作是念 如來所以出
 爲說佛慧故 今正是其時
 舍利弗當知 鈍根小智人
 著相憍慢者 不能信是法
 今我喜無畏 於諸菩薩中
 正直捨方便 但說無上道
 菩薩聞是法 疑網皆已除
 千二百羅漢 悉亦當作佛

方便品第二

一五ごきに梵天我に請ふ 釋羅もまたは四の護世も、
 大自在また自在まで 千億の天衆みなしかり。
 二六恭敬合掌してみな立てり いかになさんと我れ思ふ、
 我れもし覺を讚すとも 有情は苦中に沒在す。
 二七我が説く法を愚者は捨つ 捨て、惡地に赴かん、
 むしろ我れより説かずして 今日寂滅我に有れ。
 二八かれらの善巧方便と 過去の諸佛を念じつゝ、
 否我れも亦佛覺を 三種の説もて説くべしと。
 二九かく我れこの法を思惟せり 十方の其他の諸佛は、
 自身を我に現じてぞ 善哉の聲を擧げにける。
 三〇善哉牟尼世勝導師 無上智をこゝに得たまひて、
 世導師達の巧方便 思惟してこそ説けるなれ。
 (三一)我等諸佛も妙語をば 三種となして宣説す、
 劣性無智の諸人は 成佛すべしと信知せず。

如三世諸佛 說法之儀式
 我今亦如是 說無分別法
 諸佛興出世 縣遠值遇難
 正使出于世 說是法復難
 無量無數劫 聞是法亦難
 能聽是法者 斯人亦復難
 譬如優曇華 一切皆愛樂
 天人所希有 時時乃一出
 聞法歡喜讚 乃至發一言
 則爲已供養 一切三世佛
 是人其希有 過於優曇華
 汝等勿有疑 我爲諸法王
 普告諸大衆 但以一乘道
 教化諸菩薩 無聲聞弟子
 汝等舍利弗 聲聞及菩薩
 當知是妙法 諸佛之祕要
 以五濁惡世 但樂著諸欲
 如是等衆生 終不求佛道

方便品第二

(二三)我等もろくの縁をもて 善巧方便用ひつゝ、
 果を得ることを嗟歎して 諸覺有情を選擇す。
 (二四)最勝人の妙音を 聞きたる我は喜びき、
 喜心、妙士にまふしける 大仙の勝語徒設なしと。
 (二五)かしこき世導師の言ふごとく 我れまたこれを行すべし、
 有情濁中に現在し おそるべき世に隨順す。
 (二六)舍利子よ、我れは之を知り そのとき波羅奈斯に赴きて、
 寂靜地法を方便し 五比丘の爲めに宣説す。
 (二七)我が法輪は轉せられ 滅度の音も世に出でき、
 應供の名もまた法の名も 僧の名までもあらはれき。
 (二八)多年の間に我は説き 滅度の地をも示すなり、
 これを流轉の苦盡とす 常時にしかく我れは説く。
 (二九)舍利子よ、我れはそのときに 兩足尊の多子を見る、
 最勝覺に發趣しき その數千億無量なり。

*妙士は普
 譯に從ふ
 *隨順は秦
 譯に從ふ
 原語は動
 搖と譯す
 べき語な
 り

當來世惡人 聞佛說一乘
 迷惑不信受 破法墮惡道
 有慙愧清淨 志求佛道者
 當爲如是等 廣讚一乘道
 舍利弗當知 諸佛法如是
 以萬億方便 隨宜而說法
 其不習學者 不能曉了此
 汝等既已知 諸佛世之師
 隨宜方便事 無復諸疑惑
 心生大歡喜 自知當作佛

方便品第二

(二九)種々の善巧方便の 諸時那の法を聞きしひご、
 我れの所に來りてぞ 恭敬合掌してみな立ちき。
 (三〇)そのとき我は思念せり 勝法を説くべき時節なり、
 我れその爲めに世に出でき 最勝覺を説示せん。
 (三一)相に著する小智人 憍慢にして無智なれば、
 信ずることはいまかたし たゞ菩薩のみ聞くべしと。
 (三二)一切の怯懦をすてはて、 我れ無畏にして喜べり、
 善逝の子の中に説き かれらを覺にぞ立たしむる。
 (三三)この佛の子を親見し 汝の疑惑は去らるべし、
 また千二百の漏盡者も みな世に佛と成りぬべし。
 (三四)かれら往古の大聖と 未來の時那の法性と、
 ひとしく我れのも無分別 いま我れ汝に之を説く。
 (三五)ある時處とかく世に 最勝人の出るあり、
 無極明者は世に出で、 ときにこの法を説けるなり。

*大聖も普
 譯の文字
 なり

(二六)俱胝那由他の劫波にも この勝法には値ひがたし、
 勝法を聞き信じつる この有情にも遇ひがたし。
 (二七)靈瑞の華の得難きも ある時處見ることく、
 人天界に稀れに有る この妙色も出るなり。
 (二八)それよりも稀有を我は説く よく説く法を聞きしのち、
 隨喜の一語を誦するもの 一切佛を供養せり。
 (二九)汝疑惑を去りぬべし 我は法王と告ぐるなり、
 最勝覺に化導す 聲聞弟子は我れになし。
 (三〇)舍利子、秘要は汝の爲めぞ また我が聲聞の爲めなるぞ、
 この勝れたる諸菩薩は 我がこの秘要を持つなる。
 (三一)いかなればこの五濁時に 有情は邪惡となりにけむ、
 欲に盲して小智なり 覺にはこゝろさらになし。
 (三二)この時那に由り説かれたる 我がこの一乘を聞きてのち、
 未來に有るべき有情は 修多羅をすて、墮獄せん。

(三四)最勝覺に發趣せる 漸愧清淨の有情には、
 無畏に住して我はまた 一乘の廣讚を宣示せむ。
 (三五)これ諸導師の教なり 最勝善巧方便なり、
 密意説にて説けるなり 不學はこれを知りがたし。
 (三六)世を行く大聖諸佛の 密意の説を了知せよ、
 疑を除き惑を去り 歡喜を生じ作佛せむ。

右聖妙法蓮華法門に於て方便品第二

爾時舍利弗。踊躍歡喜。即起合掌。瞻仰尊顏。而白佛言。

今從世尊。聞此法音。心懷踊躍。得未曾有。所以者何。我昔從佛。聞如是法。見諸菩薩。受記作佛。而我等不預斯事。甚自感傷。失於如來。無量知見。世尊我常獨處。山林樹下。若坐若行。每作是念。我等同入法性。云何如來。以小乘法。而見濟度。是我等

苦。非世尊也。所以者何。若我等待說所因。成就阿耨多羅三藐三菩提者。必以大乘。而得度脫。

然我等不為方便。隨宜所說。初聞佛法。即便信受。思惟取證。世尊我從昔來。終日竟夜。每自剋責。

而今從佛。聞所未聞。未曾有法。斷諸疑悔。身意泰然。快得安穩。今日乃知。真是佛子。從佛口生。從法化生。得佛法分。

譬喻品第三

其時具壽なる舍利子は踊躍歡喜し、心に悅豫を生じ、合掌を世尊に向け、世尊に面して、世尊を見つゝ、世尊に白して曰く。

「世尊よ、此の如き法音を世尊より聞きて、我は奇異未曾有を得たり、非常の喜を得たり。其故は、世尊よ、我は曾て世尊より此の如き世尊の法を聞かず、他の諸菩薩を見、且つ未來世に於て諸菩薩の得べき佛名を聞きて、此の如き智見なる如來智性より黜けられしとして甚だ悲傷したればなり。」「又世尊よ、我は日日の遊行の爲めに、靜かに山、丘、巖窟、樹林園、河、樹下の一邊に行く時も、世尊よ、我は亦常にそれ以上の所住に住せり。」「入法界は實に等同なるに、世尊は小乘を以て我等を度したまへり」と。世尊よ、其時に於て我は此の如

く念せり、「此は我等の過咎にして、世尊の過咎に非ざるなり」と。其故は、若し我等無上正等覺を始めとして、一切に超過せる法教を説きたまひつゝある世尊を尊敬せしならば、世尊よ、我等も亦其諸法の中に於て度せられしなるべければなり。

「又世尊よ、我等は諸菩薩の未だ集らざる時、世尊の密意説を知らず、急速を以て法教を聞きて、世尊の第一説を受持思惟したりしなり、故に世尊よ、我は尤も自ら剋責して日夜を經過せり。」

「世尊よ、今日我は滅度を得たり。世尊よ、今日我寂靜に住せり。世尊よ、今日我は安穩を得たり。世尊よ、今日我は應供性を得たり。世尊よ、今日我は世尊の長子なり、胸懷より生じ、樂みより生じ、法より生じ、法より化生し、法分を得て、法に由て成就せられたり。世尊よ、今日世尊の所より是の如

普譯には應時品に作る

從樂生を泰譯には從佛口生させり

き未曾有の法、未曾聞の音聲を聞いて、焚燒の痛苦を免かれ
たり』

- 其時具壽なる舍利子は伽陀を以て世尊に白して曰く。
- (一) 希有こそ得たれ大導師 好奇心もて音は聞く、疑はまた我になし この勝乘に熟したり。
 - (二) 希有なる善逝の音聲は 有情の疑苦を除くなり、我が苦も去りて漏盡なり みな音聲を聞くに由る。
 - (三) 日日遊行のその時に 林藪諸園樹根に、また山窟に歩みつゝ たゞこのことを思惟せり。
 - (四) 嗚呼惡念に欺むかる 法は平等無漏なるに、三界無比の法をしも 未來世に説き得ざるかご。
 - (五) 三十二相は我を去り 皮の金色も去りにけり、力も解脱もみな去れり 嗚呼平等法に迷没す。
 - (六) 大牟尼尊の髓形好 滿八十種の妙相も、

爾時舍利弗。欲重宣此義。而說偈言
我聞是法音 得所未曾有
心懷大歡喜 疑網皆已除
昔來蒙佛教 不失於大乘
佛音甚希有 能除衆生惱
我已得漏盡 聞亦除憂惱
我處於山谷 或在林樹下
若坐若經行 常思惟是事
嗚呼深自責 云何而自欺
我等亦佛子 同入無漏法
不能於未來 演說無上道
金色三十二 十力諸解脫
同共一法中 而不得此事
八十種妙好 十八不共法
如是等功德 而我皆已失
我獨經行時 見佛在大衆
名聞滿十方 廣饒益衆生

- 十八不共の法までも みな去りて我は迷惑す。
- (七) 利世慈愍の仁者を見 獨り遊行を爲すときも、不可思議にして無礙の智に 嗚呼捨てらると思惟しき。
 - (八) 主よ、日と夜とを過ごしにき 世尊にしかく尋ぬべし つねにこれをば思ひつゝ、
 - (九) 時那主よ、しかく思ひつゝ、 我失せりやいかにぞご。世間の導師に譽めらるゝ 常時に日夜を過ごすなり、
 - (一〇) 我れこの佛の法を聞き 他の諸菩薩を見をはり。不可思議微妙無礙智なり これこそ密意の説となす、
 - (一一) 我れもと邪見に著してぞ 時那は道場に説きたまふ。行乞して外道に敬まはる、
 - (一二) 主は我が意樂を知ろしめし 邪を抜き滅を説きたまふ。
 - (一三) すべて邪見を離れてぞ 我は空法を證したり、滅度を得たりと思へども いまだ滅度を得ざるなり。
 - (一四) 佛無上尊となる時は 人天惡鬼も尊敬し、

自惟失此利 我爲自欺誑
我常於日夜 每思惟是事
欲以問世尊 爲失爲不失
我常見世尊 稱讚諸菩薩
以是於日夜 籌量如此事
今聞佛音聲 隨宜而說法
無漏難思議 令衆至道場
我本著邪見 爲諸梵志師
世尊知我心 拔邪說涅槃
我悉除邪見 於空法得證
爾時心自謂 得至於滅度
而今乃自覺 非是實滅度
若得作佛時 具三十二相
天人夜叉衆 龍神等恭敬
是時乃可謂 永盡滅無餘
佛於大衆中 說我當作佛
聞如是法音 疑悔悉已除
初聞佛所說 心中大驚疑

將非實作佛 憊亂我心耶
佛以種種緣 譬諭巧言說
其心安如海 我聞疑網斷
佛說過去世 無量滅度佛
安住方便中 亦皆說是法
現在未來佛 其數無有量
亦以諸方便 演說如是法
如今者世尊 從生及出家
得道轉法輪 亦以方便說
世尊說實道 波旬無此事
以是我定知 非是實作佛
我隨疑網故 謂是實所爲
開佛柔轆音 深遠甚微妙
演暢清淨法 我心大歡喜
疑悔永已盡 安住實智中
我定當作佛 爲天人所敬
轉無上法輪 教化諸菩薩

譬喻品第三

- (一) 三十二相を具足して 無餘滅度者となれるなり。
- (二) 天をも有する世の前に 無上覺にぞ授記しける、
- (三) 我れ我が滅度の音を聞き 一切の疑悔はのぞこりぬ。
- (四) さきに導師の聲を聞き 我に大なる怖畏ありき、
- (五) 佛の形に變化せる 憊亂者魔羅に非ずやこ。
- (六) もろくの因または縁 俱胝那由他の解を以て、
- (七) 無上の智は説かれたり 我れ法を聞きて疑惑なし。
- (八) 千億の佛、時那ありて 滅度しけりと説きたまふ、
- (九) 善巧方便安住して またこの法を説きにけり。
- (十) 未來の世にも多佛あり 第一義を見て安住せり、
- (十一) 種々に善巧方便し 現當の世に説法す。
- (十二) 出家の後に轉起せる 佛の自身の行もまた、
- (十三) 法輪もかく知覺され 説法にこそ安立すれ。
- (十四) 我れ知る魔羅に非ずして 世尊實道を説きたまふ、

*疑悔は秦譯に依る
英譯には注意又は思想と譯す
怖畏の梵語明かならず

爾時佛告舍利弗。吾今於天人沙門婆羅門等大眾中說。我昔曾於二萬億佛所爲無上道故。常教化汝。汝亦長夜。隨我受學。我以方便。引導汝故。生我法中。會利弗。我昔教汝。志願佛道。汝今悉忘。而便自謂。已得滅度。

魔羅はこゝに住み得じこ

我が心疑惑に墮ちしなり。

- (一) 柔軟 深遠 微妙の 佛音、我を慰めて、
 - (二) 一切の疑悔は消滅し 我は實智に安住す。
 - (三) この天人に敬はれ 我は定めて作佛せむ、
- 密意に佛道を説き示し もろくの菩薩を教化せむ。
かく言はれし時、世尊は具壽なる舍利子に告げて曰く。
『舍利子よ、我れこの天魔梵を有せる世界の前、沙門婆羅門を有せる人の前に於て、汝に告げ、汝に示さん。舍利子よ、汝は二十百千俱胝那由他の諸佛の所に在りて、無上正等覺に於て、我が爲に教化せられたり。又舍利子よ、汝は長夜に我に就て學びたりき。舍利子よ、汝は菩薩の教訓、菩薩の告示に由て、こゝに我が教中に生れたり。舍利子よ、汝は菩薩の力に由て、彼昔の行願、菩薩の教訓、菩薩の告示を記念せず、滅度せりと思へり。』

*晉譯には三十二千億佛と譯す
意佛秦譯には二萬億佛と譯す

我今還欲令汝憶念。本願所行道故。爲諸聲聞。說是大乘經名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。

舍利弗。汝於未來世。過無量無邊不可思議劫。供養若干千萬億佛。奉持正法。具足菩薩所行之道。當得作佛。號曰華光如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。

國名離垢。其土平正。清淨嚴飾。安穩豐樂。天人熾盛。琉璃爲地。有八交道。黃金爲繩。以界其側。其傍各有七寶行樹。常有華果。

『舍利子よ、我は汝の昔の所願智覺を憶念せしめんご欲するが故に、諸聲聞の爲めに、此菩薩の教にして、諸佛の攝受なる大方經典の妙法蓮華なる法門を説けるなり。』

『然れども又舍利子よ、汝は未來の時、無量不可思議不可計劫の後、百千俱胝那他の諸佛の正法を持ちて、種種の供養を作し、此菩薩の行を具足して、世に於て華光 (Padmaprabha) と名くる如來、應供、正等覺者、明行足、善逝、世間解、無上士、調御可化丈夫者、諸天及諸人之師、佛、世尊と成るべきなり。』

『又舍利子よ、其時彼世尊華光如來には、平正、可樂、安穩、最上善見にして、清淨、嚴飾、富有、靜謐、豐饒なる諸人民と天との散布せられたる、青玉 (Vaidurya) 合成にして、黄金の繩を以て其限界とする八交道ある、離垢 (Viraja) と名くる佛國あるべし。其八交道の限界には、常恒不斷に七寶の華果を有せる寶樹あるべきなり。』

*晉譯には蓮華光とせり

華光如來。亦以三乘。教化衆生。舍利弗。彼佛出時。雖非惡世。以本願故。說三乘法。其劫名大寶莊嚴。何故名曰。大寶莊嚴。其國中。以菩薩爲大寶故。彼諸菩薩。無量無邊。不可思議。算數譬論。所不能及。非佛智力。無能知者。

若欲行時。寶華承足。此諸菩薩。非初發意。皆久植德本。於無量百千萬億佛所。淨修梵行。恒爲諸佛之所稱歎。常修佛慧。具大神通。善知一切諸法之門。實直無僞。志

『舍利子よ、彼華光如來應供正等覺者も亦實に三乘を以て始めとして法を説くべし。又舍利子よ、彼如來は劫濁に出でざるも、亦本願力に由て法を説くべきなり。』

『又舍利子よ、其劫をば大寶嚴 (mahāratnapratimandita) と名くべし。舍利子よ、云何に思ふや、何んが故ぞ其劫をば大寶嚴と名くるや。舍利子よ、佛國の諸菩薩をば寶と名く、其時彼離垢世界に多數の菩薩あり、無量無數不可思議無比不可稱にして算數を超過せり、唯如來の算數を除く。是故に其劫をば大寶嚴と名くるなり。』

『又舍利子よ、其時彼佛國の諸菩薩は寶蓮華上を遊行すべし。又其諸菩薩は初心の行者に非ず、久しく善根を植ゑ多百千佛の所に於て梵行を修し、如來に稱歎せられ、常に佛慧を修し、大神通を具し、善く一切の法要を知り、柔和にして念あり。之を要するに、彼佛國は是の如き諸菩薩の充滿する』

*秦譯には大寶莊嚴と譯せり

*寶の梵語單數なり疑ふべし

念堅固。如是菩薩。充滿其國。

舍利弗。華光佛壽十二小劫。除爲王子。未作佛時。其國人民。壽八小劫。華光如來。過十二小劫。授堅滿菩薩。阿耨多羅三藐三菩提。告諸比丘。是堅滿菩薩。次當作佛。號曰華足安行。多陀阿伽度。阿羅訶。三藐三佛陀。其佛國土。亦復如是。

舍利弗。是華光佛滅度之後。正法住世。三十二小劫。像法住世。亦三十二小劫。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

舍利弗來世 成佛普智尊
號名曰華光 當度無量衆
供養無數佛 具足菩薩行
十力等功德 證於無上道
過無量劫已 劫名大寶殿
世界名離垢 清淨無瑕穢
以瓊瑤爲地 金繩界其道
七寶雜色樹 常有華果實
彼國諸菩薩 志念常堅固
神通波羅蜜 皆已悉具足
於無數佛所 善學菩薩道
如是等大士 華光佛所化
佛爲王子時 棄國捨世榮
於最末後身 出家成佛道
華光佛住世 壽十二小劫
其國人民衆 壽命八小劫
佛滅度之後 正法住於世

所なり。

『又舍利子よ、彼華光如來の壽量は、童真たる時を除き、十二中劫なるべし。又彼諸有情の壽量は八中劫なるべし。又舍利子よ、彼華光如來は十二中劫を過ぎて堅滿(Dhṛtiparipūrṇa)と名くる菩薩摩訶薩に無上正等覺の記を授けて、滅度すべし。諸比丘よ、此堅滿菩薩摩訶薩は我が後直ちに無上正等覺を證得し、世に於て超華主(Padmavṛśabhakṛāmin)と名くる如來、應供、正等覺者、明行足、善逝、世間解、無上士、調御可化丈夫者、諸天及諸人之師、佛、世尊と成るべきなり』と授記すべきなり。舍利子よ、彼超華主如來の佛國も亦是の如く(華光如來のも同一)なるべきなり。

『又舍利子よ、彼華光如來滅度の後、正法は三十二中劫(世に住すべし。其正法滅盡の後、彼(如來の正法の像(Saddharma-pratīpaka)即ち像法)は三十二中劫(世に住すべきなり)』。

晉譯には度蓮華界と譯し秦譯には華足安行とせり共に原語に親しからず

*英譯に華光を超華主に作るは恐らくは誤ならむ

其時世尊は伽陀を説て曰く。

- (三) 舍利子よ汝も未來時に 時那如來とは成りぬべし、華光と名くる普眼にて 千俱胝衆を化度すべし。
- (四) 多俱胝佛を尊敬し そこに行力を獲得し、又十力をも生じつゝ、 最上覺をば證すべし。
- (五) 不可思議無量の劫中に 大寶劫こそあるべけれ、兩足尊の淨國を 離垢世界とは名くべし。
- (六) 其地は青玉を遍敷して 金繩をもて飾られむ、美麗なる華果の飾りある 數百の寶樹もありぬべし。
- (七) 諸菩薩そこに念ありて 行を示すに巧みなり、諸佛に行を學習し かの國土には生るべし。
- (八) 彼時那最後の身に於て 童真位をばさしおきて、愛欲を棄て家を出で 最上覺をば證すべし。
- (九) 彼時那尊の壽命は 正しく十二中劫なり、

中劫を河口慧海氏將來の梵本には不中劫即ち小劫とせり秦譯に合す但し像法の下は中劫なり晉譯には二十中劫とせり

三十二小劫 廣度諸衆生
正法滅盡已 像法三十二
舍利廣流布 天人普供養
華光佛所爲 其事皆如是
其兩足聖尊 最勝無倫匹
彼即是汝身 宜應自欣慶

爾時四部衆。比丘
比丘尼。優婆塞。優婆
夷。天。龍。夜叉。乾闥婆。
阿脩羅。迦樓羅。緊那
羅。摩睺羅伽等大衆。
見舍利弗。於佛前受。
阿耨多羅三藐三菩
提記。心大歡喜。踊躍
無量。各各脫身。所著
上衣。以供養佛。釋提
桓因。梵天王等。與無
數天子。亦以天妙衣。
天曼陀羅華。摩訶曼

陀羅華等。供養於佛。
所散天衣。住虛空中。
而自回轉。諸天伎樂。
百千萬種。於虛空中。
一時俱作。雨衆天華。
而作是言。佛昔於波
羅奈。初轉法輪。今乃
復轉。無上最大法輪。
爾時諸天子。欲重
宣此義。而說偈言
昔於波羅奈 轉四諦法輪
分別說諸法 五衆之生滅
今復轉最妙 無上大法輪
是法甚深奧 少有能信者
我等從昔來 數聞世尊說
未曾聞如是 深妙之上法
世尊說是法 我等皆隨喜
大智舍利弗 今得受尊記
我等亦如是 必當得作佛
於一切世間 最尊無有上

譬喻品第三

その人民の壽命も 八中劫は存すべし。
彼時那滅度の後までも 滿三十二中劫に、
天と世間を利せんとして 正法その時住すべし。
正法滅盡にその像は 三十二中劫住すべし、
妙士の流布せし遺形は 天人つねに尊敬す。
彼尊かくこそあるべけれ 舍利子、汝は慶喜せよ、
汝はかゝる無比倫の 兩足尊とは成りぬべし。
其時彼四衆なる諸比丘、比丘尼、清信士、清信女、天龍、藥叉、乾
闥婆、阿修羅、金翅鳥、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人、は、具壽なる舍利
子が、現前に於て佛より無上正等覺の記を授かりしことを
聞きて、歡喜踊躍し心に悅豫を懷き、各各の上著衣を以て世
尊を覆ひき、又天帝釋も堪忍世界主梵も其他の百千俱胝の
天子は、天衣を以て世尊を覆ひき。又彼等は曼陀羅縛、大曼
陀羅縛の天華を以て散布しき。又彼等は空中に於て天の

譬喻品第三

衣物を回轉しき。又彼等は空中に於て百千の天樂と鏡鈸
を奏しき。又大華雨を雨ふらして、彼等は是の言を作し
き。『昔世尊、波羅奈斯(Vairāṇṣī)仙人墮落處(Ṛṣipatana)の鹿苑
(Mṛgadvā)に於て法輪を轉じたまひき、今日又世尊は第二回
の無上の法輪を轉じたまふ』と。
其時彼諸天子は伽陀を説て曰く。
三三 世間に於て無比なるよ 汝は法輪を轉じたまふ、
波羅奈斯に於て、大勇よ 五蘊の生滅を説きたまふ。
三四 最初はそこに轉せられ 導師よ、第二次はこそぞかし、
導師よ今日説かれたり 彼等は信じ難きなり。
三五 世間尊主の御前にて 我等は諸法を聞きしかど、
前に聞きたる何れにも かくのごとき法はさらになし。
三六 諸大仙等の密意説 大勇、我等は隨喜する、
智慧ある舍利弗多羅は かくぞ記別を受けにける。

佛道思議 方便隨宜說
我所有福業 今世若過世
及見佛功德 盡回向佛道

爾時舍利弗。白佛
言世尊。我今無復疑
悔。親於佛前。得受阿
耨多羅三藐三菩提
記。是諸于二百。心自
在者。昔住學地。佛常
教化言。我法能離。生
老病死。究竟涅槃。是
學無學人。亦各自以
離我見。及有無見等。
謂得涅槃。而今於世
尊前。聞所未聞。皆墮
疑惑。善哉世尊。願為

四衆。說其因緣。令離
疑悔。

爾時佛告舍利弗。
我先不言。諸佛世尊。
以種種因緣。譬諭言
詞。方便說法。皆為阿
耨多羅三藐三菩提
耶。是諸所說。皆為化
菩薩故。然舍利弗。今
當復以譬諭。更明此
義。諸有智者。以譬諭
得解。

舍利弗。若國邑聚
落。有大長者。其年衰
邁。財富無量。多有田
宅。及諸僮僕。其家廣
大。唯有一門。多諸人

〔三七〕我等も世間の中にして 上なき佛の菩提をば、
密意説もて説きたまふ かゝる無上の佛たらん。

〔三八〕この世或は過去の世に 我等の聞き且つ作せしこと、

正覺者をば慰めき 菩提に向ふの願となれ。

其時具壽なる舍利子は世尊に白して曰く。『世尊よ、我は
世尊の所より現前に於て、無上正等覺に就て此の自身の授
記を聞きて、復た疑惑あることなし。然れども世尊よ、此千
二百の自制者は昔し世界に由りて有學地に住せしめられ
是の如くに教化せられき。諸比丘よ、是れ我が法律の究竟な
り、即ち生老病死の苦を離れたるは滅度に至れるなり』と。
此我見有見無見一切の邪見を離れたるを以て、滅度に安立
したりしと自ら信知せる、世尊の聲聞(弟子)なる、一切學無學
の二千の比丘は世尊の所よりは是の如き未だ曾て聞かざり
し法を聞きて疑惑に墮在せり。故に願くは世尊は此諸比

*過去の世
は秦譯に
從ふ英譯
には次世
即未來と
せり

丘の惡所作を除かんが爲めに(其義を説きたまへ、若し然ら
ば世尊よ、此四衆は疑惑なきを得べきなり』

是の如く云はれたる時、世尊、具壽なる舍利子に告げて曰
く。『舍利子よ、我曾て汝に説かずや、如來應供正等覺者は諸
有情の種々の信解と種々界性の志樂とを知りて、種々の指
示、顯示、種々の因緣、根本思想、言説、善巧方便を以て法を説く
も、此無上正等覺を始めとして、一切法説を以つて菩薩乘に
發趣せしむるなり。然れども舍利子よ、尙廣く此義を説示
せんが爲めに、我は汝の爲めに譬諭を説くべし。其故は有
智の諸人は一の譬諭に由りて、所説の義利を了知すればな
り。』

『舍利子よ、譬へば或る村、或は町、或は城市、或は國、或は郡、或
は王國、或は首府に、老邁衰朽に達せる富豪多財の家主あら
む。而して其高く廣く舊造にして朽故なる家は、二三四五

*家主を晉
秦二譯に
は長者と
譯す

衆。一百二百。乃至五百人。止住其中。堂閣朽故。牆壁墮落。柱根腐敗。梁棟傾危。周市俱時。款然火起。焚燒舍宅。長者諸子。若十。二十。或至三十。在此宅中。

長者見是大火。從四面起。即大驚怖。而作是念。我雖能於此所燒之門。安穩得出。而諸子等。於火宅內。樂著嬉戲。不覺不知。不驚不怖。火來逼身。苦痛切己。心不厭患。無求出意。

舍利弗。是長者。作是思惟。我身手有力。當以衣被。若以凡案。從舍出之。復更思惟。是舍唯有一門。而復狹小。諸子幼稚。未有所識。戀著戲處。或當墮落。爲火所燒。我當爲說。怖畏之事。此舍已燒。宜時疾出。無令爲火之所燒害。作是念已。如所思惟。具告諸子。汝等速出。父雖憐愍。善言誘諭。而諸子等。樂著嬉戲。不肯信受。不驚不怖。了無出心。亦復不知。何者是火。何者爲舍。云何爲失。但東西走戲。視父而已。

爾時長者。即作是

百人の住處ならむ。其家に唯一の門ありて、草を以て覆はれ、樓は傾危し、柱根は腐敗し、壁の藁帳と漆灰とは剝落せられたらむ。俄然其全家は普く大火聚を以て焚燒せられむ。其人に或は五、或は十、或は二十の多子あらむ、而して其人は其家より外に出で來りたらむ。

『時に舍利子よ、其人は自家の普く大火聚を以て焚燒せらるゝを見て、恐怖痛心して、是の如く思惟せむ。』我は此大火聚に觸れられず、焼かれずして、速かに安全に此の焼かるゝ家の門より走り出ることを得たり。然れども我が幼童なる諸子は此の焼かるゝ家の中に、諸の嬉戲を以て遊樂馳走せり。而して彼等は此家の焼かるゝを覺らず、知らず、解せず、慮らず、驚怖せざるなり、又此大火聚を以て焼かれ、且つ苦聚に觸れらるゝも、彼等は苦を思はず、亦免出の思にも住せざるなり。』

『又舍利子よ、其人は強健にして臂力あらむ。彼は是の如く思惟せむ。』我は強健にして臂力あり、故に直ちに一切の我が諸子を一團にして、(我が)懐に取り、此家より免出せしめん』と。又彼は是の如く思惟せむ。時に此家には唯一の門ありて、其戸は閉されたり、諸子は浮薄剽輕にして、恐くは小兒の如く馳走し、彼等は此大火聚に由りて災厄に陥らむ、故に我は彼等を誘起せん』と、思量し了りて諸子に告て曰く。

『來れ、大德諸子よ、出で來れ、此家は大火聚に焼かれつゝあり、恐くは汝等皆此大火聚に焼かれ、災厄に陥るべし』と。時に諸子は是の如き利欲者なる父の所説を信受せず、驚かず、畏れず、戰慄せず、戰慄に至らず、注意せず、走り出でず、亦如何なるを焚燒と云ふことをも知覺せず、唯東西に馳走して、反覆其父を視るのみ。其故は亦是れ彼等の愚性に由ればなり。』時に其人は是の如く思惟せん、此家は大火聚に焚燒せら

念。此舍已爲大火所燒。我及諸子。若不時出。必爲所焚。我今當設方便。令諸子等得免斯害。父知諸子。先心各有所好。種種珍玩。奇異之物。情必樂著。而告之言。汝等所可玩好。希有難得。汝若不取。後必憂悔。如此種種。羊車。鹿車。牛車。今在門外。可以遊戲。汝等於此火宅。宜速出來。隨汝所欲。皆當與汝。爾時諸子。聞父所說。珍玩之物。適其願故。心各勇銳。互相推排。競共馳走。爭

れつゝあり、恐くは我及び諸子はこゝに此大火聚に由りて災厄に陥らざるべからず、故に我は善巧方便を以て諸子を我等の家より出下來らしめん」と。又其人は諸子の志樂を知り、且つ其信解を了知せん、而して諸子には多種一の玩具あり、種々愛樂すべく樂むべき珍寶にして難得なるものなり。時に其人は諸子の志樂を知りつゝ、諸子に告げて曰く、「諸子よ、汝等の爲めに有らゆる玩具あり、愛すべく、それを得るより汝等の満足する希有難得なる、多色多種のものなり、即ち牛車*(Go-ratha)、羊車*(Aja-ratha)、鹿車*(Mṅga-ratha)なり、大德等の樂ふべく、樂むべき珍寶なる彼等一切を、汝等の遊戲の爲めに、我は門戸の外に置けり。來れ諸大德よ、我等の門より走り出でよ、我は汝等に其利とし要する所のものを與へん。速かに來れ、彼等玩具の爲めに出でよ」。時に諸子は其愛すべく、欲望すべく樂むべき珍寶なる玩具の名を聞き

晋譯には象車馬車羊車伎車とし秦譯には羊車鹿車牛車に作る

出火宅。

是時長者見諸子等安穩得出。皆於四衢道中露地而坐。無復障礙。其心泰然。歡喜踴躍。時諸子等。各自父言。父先所許。玩好之具。羊車。鹿車。牛車。願時賜與。舍利弗。爾時長者各賜諸子。等一大車。其車高廣。衆寶莊校。周匝欄楯。四面懸鈴。又於其上。張設罽蓋。亦以珍奇雜寶。而嚴飾之。寶繩絞絡。垂諸華環。重數綖。安置丹枕。駕以百牛。膚色充潔。形體姝好。有大筋力。行步

て、其焼けつゝある家より、速疾に勇銳有力にして、互に他を顧みず「誰か第一なる、誰か最も第一なる」と、互に他を排したる身を以て、其焼けつゝある家より速かに走り出でたり。

『時に其人は諸子が安全に出で來れるを見て、無畏を得たりと知りて、村の四達の露地に坐して、歡喜し、執着障礙怖畏あることなけむ。時に諸子は其父の在る處に近づき、近づき了りて是の如く言はん。父よ、種々の玩具、即ち牛車羊車鹿車を我等に與へよ。時に舍利子よ、其人は自身の諸子に、風の如く速かなる牛車を與ふべし、其車は七寶合成にして、臺あり、鈴網を懸け、高廣なる奇異未曾有なる寶を以て嚴飾せられ、寶繩を以て作られたる飾あり、華鬘を以て飾られ、綿褥と毛被とを布かれ、白布と絹とを以て覆はれ。兩方に赤枕を安置し、白き最も白き速疾なる諸牛を駕し、多人に侍せられ、旛を有せるものなり。彼は其子の一一に一色一

旛を有せるの一句を英譯には下の節に屬す晋秦二譯には此語なし

平正。其疾如風。又多僕從。而侍衛之。所以者何。是大長者。財富無量。種種庫藏。悉皆充溢。而作是念。我財物無極。不應以下劣小車。與諸子等。今此幼童。皆是吾子。愛無偏黨。我有如是。七寶大車。其數無量。應當等心。各各與之。不宜差別。所以者何。以此物。周給一國。猶尙不匱。何況諸子。是時諸子。各乘大車。得未曾有。非本所望。舍利弗。於汝意云何。是長者。等與諸子。珍寶大車。寧有虛妄不。

舍利弗言。不也。世尊。是長者。但令諸子。

種の風力の如く速かなる牛車を與ふべし。其故は、舍利子よ、其人は富豪にして藏倉家屋を有す、彼は是の如く理會すべし。「我は諸子に他の(下劣なる)乗車の賦與を作すべからず」と。其故は、一切諸子は我が子なり、而して皆我が珍寶なればなり。又我は是の如き大乘を得たり、故に我は諸子をも皆、偏黨なく平等に思量すべきなり。我亦多き藏倉家屋を有するが故に、一切有情にも我は是の如き大乘を與へ得べし、何に況んや自身の諸子に於てをや。而して諸子は此時其大乘に乗りて、奇異未曾有を感ずるならんが如し、舍利子よ、汝は如何に思ふや、其人は恐くは妄語者ならん歟、初めには諸子に三乗を示して、後には一切(諸子)に大乘を與へ勝乘を與へたり。」

舍利子曰く、世尊よ、此れ實に然らず、善逝よ、此れ實に然らず。世尊よ、唯此に由りて其人を妄語者なりとなすべから

善逝を晉譯には安住と譯す

得免火難。全其軀命。非爲虛妄。何以故。若全身命。便爲已得。玩好之具。況復方便。於彼火宅。而拔濟之。世尊。若是長者。乃至不與。最小一車。猶不虛妄。何以故。是長者。先作是意。我以方便。令子得出。以是因緣。無虛妄也。何況長者。自知財富無量。欲饒益諸子。等與大車。

佛告舍利弗。善哉善哉。如汝所言。舍利弗。如來亦復如是。則爲一切世間之父。於諸怖畏。衰惱憂患。無

す、其人は善巧方便を以て諸子を其焚かれたる家より免がれしめ、而して生命を全からしめたればなり。其故は、世尊よ、彼等(諸子)は身體を全くしたるに由りて、一切の玩具を得たればなり。世尊よ、若し其人は諸子に一車をも與へざらんか、世尊よ、尙其人を以て妄語者と爲すべからず。其故は世尊よ、其人は豫め善巧方便を以て諸童子を其大なる苦聚より免出せしめんと考へたればなり、世尊よ、此に由りても亦其人は妄語者には非ざるなり。何んぞ況んや其人は多き寶藏と穀倉と家宅とを有せりと知りて、唯諸子の愛を思ひ、之に隨順して一種の車乘、即ち大乘を與ふるに於てをや。世尊よ、其人には妄語なきなり。」

かく言はれし時、世尊は具壽なる舍利子に告げて曰く。「善哉々々舍利子よ、是の如し舍利子よ、汝の言ふが如し。是の如く舍利子よ、如來應供正等覺者は一切の怖畏を離れ、一

明暗蔽。永盡無餘。而悉成就。無量知見。力。無所畏。有大神力。及智慧力。具足方便。智慧波羅蜜。大慈大悲。常無懈倦。恒求善事。利益一切。而生三界。朽故火宅。爲度衆生。生老病死。憂悲苦惱。愚癡暗蔽。三毒之火。教化令得。阿耨多羅三藐三菩提。見諸衆生。爲生老病死。憂悲苦惱。之所燒煮。亦以五欲財利故。受種種苦。又以貪著追求故。現受衆苦。後受地獄。畜生餓鬼之苦。若生天上。及在人間。貧窮困苦。愛別離苦。怨憎會苦。如是等種種諸苦。衆生沒在其中。歡喜遊戲。不覺不知。不

譬喻品第三

切の不幸、叫喚、失望、痛悼、苦惱、無明、黑闇の翳縛より皆悉く全く離れたり。如來は智力、無所畏、不共佛法を具足し、神通力を以て、甚だ力ある、世の父たり、大善巧方便智の最勝成滿を得たり、大悲者にして、心倦むことなく、善事を求め、慈心ある者なり。彼は生老病死、憂悲、苦惱、失望、無明、黑闇の翳縛に繫留する諸有情を欲染と瞋嫌と愚癡とより免出せしめ、無上なる正等覺に誘起する爲めに、屋背も庇蔭も朽故せる火宅の如き、大なる苦聚の三界に興出せり。彼は興出して、諸有情の生老病死、憂悲、苦惱、失望に由りて、燒煮、焚燬せられつゝあると、又樂と情欲との爲めに衆苦を受くるを見るなり。現在世に於ての追求と貪著との爲めに、未來世には地獄、傍生、夜魔界に於て、彼等は諸種の苦を受くべきなり。天上人間の貧困と怨憎會と愛別離、現存この衆苦をも受くるなり。又其苦積の中に輪轉しつゝ、彼等は戲樂遊行し、驚かず、怖れ

驚。不怖。亦不生厭。不求解脫。於此三界火宅。東西馳走。雖遭大苦。不以爲患。

舍利弗。佛見此已。便作是念。我爲衆生之父。應拔其苦難。與無量無邊。佛智慧樂。令其遊戲。

舍利弗。如來復作是念。若我但以神力。及智慧力。捨於方便。爲諸衆生。讚如來知見。力。無所畏者。衆生不能。以是得度。所以者何。是諸衆生。未免生老病死。憂悲苦惱。而爲三界火宅所燒。何由能解。佛之智慧。

ず、恐畏を生せず、覺らず、知らず、動搖せず、解脫を求めず、而して其火宅の如き三界に於て歡喜し、各處に馳走せり。又其大苦聚に遭へども、動苦の想を生ぜざるなり。

『舍利子よ、其時如來は是の如く覺知せり。』我は實に此諸有情の父なり、我は必ず是の如き苦聚より彼等を免出せしめて、彼等が戲樂遊戲を作すべき、無量不可思議の佛智の樂を與ふべし』と。

『舍利子よ、其時如來は是の如く覺知せり。』若し我れ智力ありとし、神通力ありとして、方便を用ひずして、如來の智力無所畏を諸有情に宣說せば、彼等は此諸法に由りて度脫し得ざるべし。其故は、此諸有情は實に五欲に貪著し、三界の樂を脱せず、生老病死、憂悲、苦惱、失望の爲に、燒煮、焚燬せらるればなり。庇蔭も屋背も朽故せる火宅の如き三界を出離するに非ざれば、如何に彼等は佛智を解すべけんや』と。

舍利弗。如彼長者。雖復身手有力。而不用之。但以慇懃方便。勉濟諸子。火宅之難。爲後各與珍寶大車。如來亦復如是。雖有力無所畏。而不用之。但以智慧方便。於三界火宅。拔濟衆生。爲說三乘。聲聞。辟支佛。佛乘。而作是言。汝等莫得樂住三界火宅。勿貪羶弊。色聲香味觸也。若貪著生愛。則爲所燒。汝等速出三界。當得三乘。聲聞。辟支佛。佛乘。我今爲汝。保任此事。終不虛也。汝等但當勤修精進。如來以是方便。誘進衆生。復作是言。汝等當知。此三乘法。皆是

『舍利子よ、其時如來は彼臂力ある人が其臂の力を用ひずして、善巧方便を以て其諸童子を火宅より抜き出だし、而して抜き出だして後に珍貴なる大乘を與へたらんが如く、是の如く實に如來の智力無所畏を具足せる如來應供正等覺者は如來の智力無所畏を用ひずして、善巧方便智を以て、屋背も庇蔭も朽故せる火宅の如き三界より、諸有情を抜き出さんか爲めに、聲聞と獨覺と菩薩との三乘を説示せり。而して此三乘を以て諸有情を引誘し、是の如く言へり。』諸子よ、此火宅の如き三界に於て、卑小なる色聲香味觸に樂著すること勿れ。汝等實に此三界に樂著し、五欲俱行の渴に由りて燒煮焚燬せらるゝなり。此三界を出離せよ、三乘を得べきなり、即ち聲聞乘と獨覺乘と菩薩乘となり。我は此地位に於て汝等の保任者なり、我は此三乘を汝等に與ふべし、三界を度脱せんが爲めに勉勵せよ』と。又是の如く我は彼

聖所稱歎。自在無繫。無所依求。乘是三乘。以無漏根力覺道禪定。解脫。三昧等。而自娛樂。使得無量安穩快樂。

舍利弗。若有衆生。內有智性。從佛世尊。聞法信受。慇懃精進。欲速出三界。自求涅槃。是名聲聞乘。如彼諸子。爲求羊車。出於火宅。若有衆生。從佛世尊。聞法信受。慇懃精進。求自然慧。樂獨善寂。深知諸法因緣。是名辟支佛乘。如彼諸子。爲求鹿車。出於火宅。若有衆生。從佛

等を誘引す。諸有情よ、此諸乘は尊聖なり、聖者の讚歎する所なり、大樂を具足せり、汝等は此を以て正大に戲樂遊行せよ。汝等は根力、覺支、靜慮、解脫等持、等至の大樂を感すべし。而して汝等は、大樂安穩を得べし』と。

『舍利子よ、其時智性ある諸有情は世の父たる如來を信するなり。信じて如來の教に注意し、勉勵に服するなり。其中に或る有情は大聲聞の隨行（即ち大導師の教に隨順すること）を求めつゝ、自身を棄捐する滅度（即ち無餘依涅槃）の爲めに、四聖諦を覺知せんとして、如來の教に注意す、彼等は聲聞乘を求めつゝ、三界を出離する者と謂ふべし、譬へば其他の諸子が鹿車を求めつゝ、其火宅を出づるが如し。他の有情は無師の智と自制と寂靜とを求めつゝ、自身の滅度の爲めに因縁を覺知せんとして、如來の教に注意す。彼等は獨覺乘を求めつゝ、三界を出離する者と謂ふべし、譬へば其他

世尊。聞法信受。勤修
精進。求一切智。佛智。
自然智。無師智。如來
知見。力無所畏。愍念
安樂。無量衆生。利益
天人。度脫一切。是名
大乘。苦薩求此乘故。
名爲摩訶薩。如彼諸
子。爲求牛車。出於火
宅。

舍利弗。如彼長者。
見諸子等。安穩得出
火宅。到無畏處。自惟
財富無量。等以大車。
而賜諸子。如來亦復
如是。爲一切衆生之
父。若見無量億千衆
生。以佛教門。出三界
苦。怖畏險道。得涅槃
樂。如來爾時。便作是
念。我有無量無邊智

譬喻品第三

の諸子が羊車を求めつゝ其火宅を出づるが如し、又他の有
情は一切智智、佛智、自在智、無師智を求めつゝ、群生の利樂の
爲め、世間の哀愍の爲め、諸天人の利樂の爲め、一切有情の滅
度の爲めに、如來の智力無所畏を覺知せんとして如來の教
に注意す。彼等は大乘を求めつゝ、三界を出離する者と謂
ふべし。是故に菩薩摩訶薩と名くるなり。譬へば其他の
諸子が牛車を求めつゝ、其火宅を出づるが如し。

『舍利子よ、譬へば彼人(即ち長者)が其諸子の火宅より出で
たるを見て、安全に免かれて無畏を得たりと知り、而して自
身の大富をも知りて、其諸子に一の勝れたる車乘を與ふる
が如し、是の如く舍利子よ、如來應供正等覺者は不一(即ち多
俱胝)の有情が三界を度脱し、苦痛怖畏惶恐不幸を免かれ、如
來の教に於て、一切の怖畏不幸險道を門より免出度脱し、滅
度の樂を得たるを見る時、舍利子よ、其時に如來應供正等覺

*羊車を晉
譯には馬
車・秦譯
には鹿車
に作る

*晉譯には
牛車を象
車に作る

慧力。無畏等。諸佛法
藏。是諸衆生。皆是我
子。等與大乘。不令有
人。獨得滅度。皆以如
來滅度。而滅度之。是
諸衆生。脫三界者。悉
與諸佛。禪定解脫等。
娛樂之具。皆等一相
一種。聖所稱歎。能生
淨妙。第一之樂。舍利
弗。如彼長者。初以三
車。誘引諸子。然後但
與大車。寶物莊嚴。安
穩第一。然彼長者。無
虛妄之咎。如來亦復
如是。無有虛妄。初說
三乘。引導衆生。然後
但以大乘。而度脫之。
何以故。如來。有無量
智慧力。無所畏。諸法
之藏。能與一切衆生。
大乘之法。但不盡能

者は多大の智力無所畏の藏ありと知り、又一切彼等は我が
子なりと知りて、唯佛乘を以て彼諸有情を引導せり。然れ
ども彼は一有情にも單獨の滅度を説かず。而して彼は如
來の滅度、大滅度を以て一切有情を引導す。又舍利子よ、
三界を度脱したる彼諸有情には如來は靜慮解脫、等持、等至、
の諸聖者の最勝樂なる戲樂の具を與ふ、一切此等是一種な
り。舍利子よ、譬へば彼人が其諸子に三乘を説示して、唯一
切中の一の大乗が與へられ七寶合成にして、一切の莊嚴を
以て飾られたる一種の勝乘にして、一切中の第一乗が與へ
らるゝに由りて妄語なきが如く、舍利子よ、是の如く如來應
供正等覺者は初めに善巧方便を以て三乘を説示し後に唯
大乘を以て諸有情を引導するに由りて妄語者に非ざるな
り。其故は舍利子よ、如來は實に多き智力無所畏の藏庫を
具足し、一切有情に一切智智俱行の法を説示すべき平等力

譬喻品第三

受。舍利弗。以是因緣。當知諸佛。方便力故。於一佛乘。分別說三。

佛欲重宣此義。而

說偈言

譬如長者 有一大宅
其宅久故 而復頓弊
堂舍高危 柱根摧朽
梁棟傾斜 基陸墮毀
牆壁圯圻 泥塗褻落
覆苫亂墜 椽椳差脫
周障屈曲 雜穢充徧
有五百人 止住其中
鴟梟鸚鵡 烏鵲鳩鴿
蜈蚣蝮蠍 蟻蚶蚰蝻
守宮百足 鼯狸鼯鼠
諸惡蟲輩 交橫馳走
屎尿臭處 不淨流溢

譬喻品第三

あればなり。是故に舍利子よ、是の如く知るべきなり、即ち如來は善巧方便智行^{*}を以て唯一の大乗のみを説けるなり』

^{*}行を普譯には行音とし、秦譯には力とす

其時世尊は伽陀を説て曰く。

- (三) 譬へば人の家あらむ 故く大きく力なく、かくその樓は摧壞し 柱の根も亦腐朽せり。
- (四) 圓窓 看樓 分傾し 壁帳 漆灰 剝落す、壁蓋 拆けていごふるく 草蓋 全く穿たれき。
- (五) 五百を減せざる程の 人はその家に住めるなり、小房 便房 多くして 糞穢 汗物 みちみたり。
- (六) 一切 梁棟 傾斜して 牆壁 ともに倒れたり、鳩鴿 鴟梟 他の 羽類 俱 厩の 鷲もそこすむ。
- (七) その方隅に惡蛇あり 大毒 猛惡 恐るべし、種々の鼠と蠍とあり 極惡 有情の 住處 なり、

蜣螂諸蟲 而集其上
狐狼野干 咀嚼踐踏
躄齧死屍 骨肉狼藉
由是羣狗 競來搏撮
飢羸悼惶 處處求食
鬪諍擅擊 唾齧嗥吠
其舍恐怖 變狀如是
處處皆有 魑魅魍魎
夜叉惡鬼 食噉人肉
毒蟲之屬 諸惡禽獸
孚乳產生 各自藏護
夜叉競來 爭取食之
食之既飽 惡心轉熾
鬪諍之聲 甚可怖畏
鳩槃荼鬼 蹲踞土埽
或時離地 一尺二尺
往返遊行 縱逸嬉戲
捉狗兩足 撲令失聲

- (四) そのうへ諸方に非人あり 屎尿の爲めに汗穢あり。
- (五) 昆蟲 螢 火 充滿し 犬と野干は群吠す、そこに恐るべき猛獸あり 人の屍體を噉食す。
- (六) それらの屍骸を求めつゝ 犬と野干は群居せり、彼等は常に飢に瘦せ 諸方に食を求めつゝ。
- (七) 諍を作して吠ゆるなり かくその家は恐るべし。
- (八) また極惡の藥叉あり 人の屍體を擱裂す、百足 大蛇 蝮蛇 まで そこに諸方に住めるなり。
- (九) 彼等窠窟を作りつゝ 諸方に住して其子あり、各自に之を藏護して 尙も藥叉に食はるなり。
- (十) 他有情を食ふ惡心の 藥叉は飽足せし時に、他有情肉に飽ける身は するごく諍を起すなり。
- (十一) 害毒心の鳩槃荼は 其荒家にぞ住みにける、身量八寸また尺五 三尺なるも遊行せり。

^{*}瓶の如き罌丸を有する、鬼の一種

以脚加頸 怖狗自樂
 復有諸鬼 其身長大
 羸形黑瘦 常住其中
 發大惡聲 叫呼求食
 復有諸鬼 其咽如鍼
 復有諸鬼 首如牛頭
 或食人肉 或復噉狗
 頭髮蓬亂 殘害兇險
 飢渴所逼 叫喚馳走
 夜叉餓鬼 諸惡鳥獸
 飢急四向 闕看窻牖
 如是諸難 恐畏無量
 是朽故宅 屬于一人
 其人近出 未久之間
 於後宅舍 忽然火起
 四面一時 其焰俱熾
 棟梁椽柱 燦聲震裂
 摧折墮落 牆壁崩倒

諸鬼神等 揚聲大叫
 鷓鴣諸鳥 鳩槃荼等
 周憚惶怖 不能自出
 惡獸毒蟲 藏窟孔穴
 毗舍闍鬼 亦住其中
 薄福德故 爲火所逼
 共相殘害 飲血噉肉
 野干之屬 竝已前死
 諸大惡獸 競來食噉
 臭煙蓬悖 四面充塞
 蜈蚣蝮蛇 毒蛇之類
 爲火所燒 爭走出穴
 鳩槃荼鬼 隨取而食
 又諸餓鬼 頭上火然
 飢渴熱惱 周憚闕走
 其宅如是 甚可怖畏
 毒害火災 衆難非一
 是時宅主 在門外立

譬喻品第三

(五) 彼等は狗の足を捉り かくして地上に顛倒し、
 頸を撮みて投げ出だし 虐待しつゝ、樂しめり。
 (五) 裸形にして黒く力なき 高大なる餓鬼も住めるなり、
 饑餓して食を求めつゝ、 諸處に苦聲を放つなり。
 (五) 鍼の口また牛の面 身量人と犬のごと、
 飢と渴とに焚かれつゝ、 亂髮にして叫喚す。
 (五) 藥叉も餓鬼も毗舍遮も 鷓も食をば求めつゝ、
 つねに窓牖の間にて そこに四方を窺看せり。
 (五) その家はかく恐るべし 大きく高く力なく。
 朽故に脆く敗壞せり これぞ一人の所有なる。
 (五) その人、家の外に在り 忽然普く四方より、
 數千の火燄に圍まれて 其家焚かるゝことあらん。
 (五) 棟梁桁椽火に焚かれ いと恐るべき響あり、
 柱も壁も亦焼かれ 藥叉と餓鬼は聲を揚ぐ。

*五部の鷓鴣
 本の四部
 には非人
 さあり

(五) 數百の鷓鴣は驅り出され 面を焼く鳩槃荼は周章し、
 普く數百の猛獸は そこに焚かれて叫喚す。
 (五) 多き毗舍遮も彷徨し 薄福にして火に焚かる、
 互に齒もて害してぞ 焼かれつゝ、血を灌ぎける。
 (五) 互に有情を食ひてぞ 猛獸はそこに死亡する、
 糞穢焚かれて惡臭は 四方の土地に充満す。
 (五) 百足は遁れ走りつゝ、 鳩槃荼迦に食はれけり、
 髮を焼く餓鬼は悶走し 飢と熱とに惱まざる。
 (五) 數千の火燄に焼かれつゝ、 かくその家は怖るべし、
 またその家の主たるひと 門に立ちてぞこれを見る。
 (五) 自身の諸子の玩具もて 遊戲に耽けるを彼は聞く、
 稚兒の無知なる如くにて 遊戲に狂して樂しめり。
 (五) 我が子を免かれしめんとす 聞きて直ちに家に入る、
 一切無知の我が子をば 焼滅することなからしむ。

譬喻品第三

聞有人言 汝諸子等
先因遊戯 來入此宅
穉小無知 歡娛樂著
長者聞已 驚入火宅
方宜救濟 令無燒害
告諭諸子 說衆患難
惡鬼毒蟲 災火蔓蕪
衆苦次第 相續不絕
毒蛇蚊虻 及諸夜叉
鳩槃荼鬼 野干狐狗
鴟鷲鴟梟 百足之屬
飢渴惱急 甚可怖畏
此苦難處 况復大火
諸子無知 雖聞交誨
猶故樂著 嬉戲不已
是時長者 而作是念
諸子如此 益我愁惱
今此舍宅 無一可樂

- (五) 家の過失を彼は説く 善男子こは痛苦なり、
群生ありてこの大火 衆苦次第に相續す。
(六) 毒蛇も悪心の藥叉も 多き鳩槃荼も餓鬼も住む、
猛獸も野干も犬群も 鷲も食をば求めつゝ。
(七) かゝる群類こゝに住む 火なきも最も怖るべし、
かくの如くにこの苦あり ましてあまねく火はみたり。
(八) いそがされつゝ愚意者なる 諸子は玩具に狂してぞ、
父の誨を考へず また注意をもせざりける。
(九) その人時に思惟しき 子を思ふゆへ愁惱す、
子なくば我はいかにせむ この子を火には焼かしめず。
(十) そのとき方便を思惟せり 諸子は玩具を好めども、
いかなる玩具もそこになし 諸子はかくこそ愚かなれ。
(十一) 彼言ふ聞けよ諸童子よ 我に種々なる乗車あり、
鹿羊勝牛を結束し 高大にして莊嚴せり。

而諸子等 耽湎嬉戲
不受我教 將爲火害
即便思惟 設諸方便
告諸子等 我有種種
珍玩之具 妙寶好車
羊車鹿車 大牛之車
今在門外 汝等出來
吾爲汝等 造作此車
隨意所樂 可以遊戯
諸子聞說 如此諸車
即時奔競 馳走而出
到於空地 離諸苦難
長者見子 得出火宅
住於四衢 坐師子座
而自慶言 我今快樂
此諸子等 生育甚難
愚小無知 而入險宅
多諸毒蟲 魑魅可畏

- (十二) 彼等は家の外にあり 馳せ出で彼事を作せ、
我汝の爲めに作りたり みな出行きて喜心あれ。
(十三) かゝる乗車ありと聞き 速かに得んと勵みてぞ、
みなその時に馳せ出で 苦なき平地に立ちにける。
(十四) その人諸子の出るを見て 村中四衢に留りて、
師子座に座して彼に言ふ 善人、今日我安慰す。
(十五) 彼等二十の愛すべき 弱子を不容易に救ひける、
群動充滿の怖るべき 危険の家に住みたりき。
(十六) 數千の火焰の焼く中に 彼等は戯樂に耽けりにき、
我今一切を度脱せり このゆる快樂を得たるなり。
(十七) 父の樂み居るを知り 諸子よ近づきかく言ひき、
多々よ、美麗の三乗を 如説に我等に與ふべし。
(十八) 三種の乗を與へんこ もし彼家中に言ひしごと、
多々よ、一切を實ならしめば 與へよ、今やその時ぞ。

大火猛焰 四面俱起
 而此諸子 貪樂嬉戲
 我已救之 令得脫離
 是故諸人 我今快樂
 爾時諸子 知父安坐
 皆詣父所 而白父言
 願賜我等 三種寶車
 如前所許 諸子出來
 當以三車 隨汝所欲
 今正是時 唯垂給與
 長者大富 庫藏衆多
 金銀琉璃 碑磬瑪瑙
 以衆寶物 造諸大車
 莊校嚴飾 周市欄楯
 四面懸鈴 金繩絞絡
 眞珠羅網 張施其上
 金華諸纓 處處垂下
 衆綵雜飾 周市圍繞

譬喻品第三

- (七) その人に衆多の庫藏あり 金銀摩尼珠眞珠あり、
 金塊多き奴僕あり 家人と種々の乗車あり。
 (八) 勝れたる寶の牛車あり 鈴網を懸けし腰架あり、
 傘蓋幡もて莊嚴し 眞珠摩尼網覆蓋せり。
 (九) 處々に垂下の櫻ありて 金の相狀美麗なり、
 貴き布もて蓋ひつゝ 妙華白紗を擴敷せり。
 (一〇) 柔輦細布の美褥あり 用ひて車を嚴飾す、
 鷓鴣鶴つる白鳥の美相ある 千億價品を擴敷せり。
 (一一) 白き肥ねたる多力なる 大量殊好の諸牛あり、
 もろくの寶車に結束し 多數の人に保護せらる。
 (一二) その人一切諸子にまで かく勝妙なるを與へたり、
 彼等喜心をもちてこそ 各々處々に遊行すれ。
 (一三) 舍利子よ、かく我大仙は 有情の父なり救護者なり、
 一切衆生は我が子なり 三界の欲に迷著す。

柔輦輪織 以爲茵褥
 上妙細氈 價直千億
 鮮白淨潔 以覆其上
 有大白牛 肥壯多力
 形體姝好 以駕寶車
 多諸寶從 而侍衛之
 以是妙車 等賜諸子
 諸子是時 歡喜踊躍
 乘是寶車 遊於四方
 嬉戲快樂 自在無礙
 告舍利弗 我亦如是
 衆聖中尊 世間之父
 一切衆生 皆是吾子
 深著世樂 無有慧心
 三界無安 猶如火宅
 衆苦充滿 甚可怖畏
 常有生老 病死憂患
 如是等火 熾然不息

- (一四) 三界はかの家のごと 畏るべき百苦みらみてり、
 多百の生と老病に 普く全く焼かるなり。
 (一五) 我三界を離れ寂靜なり 樹林に退き住すなり、
 この三界は我が有なり 焼かる、彼等は我が子なり。
 (一六) 彼等を救護せんためにとて 我亦苦なりと示せども、
 一切無知者は聞かずして こゝろは欲に粘著す。
 (一七) 我は善巧方便し 彼等に三乗を説けるなり、
 三界の衆苦を避けしめんご 知りてぞ方便説きにける。
 (一八) 我に歸依する彼子等は 三明六通自在なり、
 そくに獨覺の者もあり または不退の菩薩あり。
 (一九) 其時均しく彼子等に この賢良の譬喻をもて、
 我一佛乘を説けるなり 受けよ、一切時那となる。
 (二〇) 最勝にして意悦なり 一切世間に無上なり、
 兩足尊なる佛の慧は かくて崇高にして禮すべし。

如來已離 三界火宅
寂然閑居 安處林野
今此三界 皆是我有
其中衆生 悉是吾子
而今此處 多諸患難
唯我一人 能爲救護
雖復教詔 而不信受
於諸欲染 貪著深故
是以方便 爲說三乘
令諸衆生 知三界苦
開示演說 出世間道
是諸子等 若心決定
具足三明 及六神通
有得緣覺 不退菩薩
汝舍利弗 我爲衆生
以此譬論 說一佛乘
汝等若能 信受是語
一切皆當 得成佛道

是乘微妙 清淨第一
於諸世間 爲無有上
佛所悅可 一切衆生
所應稱讚 供養禮拜
無量億千 諸力解脫
禪定智慧 及佛餘法
得如是乘 令諸子等
日夜劫數 常得遊戲
與諸菩薩 及聲聞衆
乘此寶乘 直至道場
以是因緣 十方諦求
更無餘乘 除佛方便
告舍利弗 汝諸人等
皆是吾子 我則是父
汝等累劫 衆苦所燒
我皆濟拔 令出三界
我雖先說 汝等滅度
但盡生死 而實不滅
今所應作 唯佛智慧

譬喻品第三

- (三) 力と静慮と解脱と 多百俱胝の三昧も、かくこの車は勝れたり 佛子はつねに遊戯すべし。
- (四) 毎夜の遊戯は盡きぬなり 毎日、半月、毎月も、千俱胝切も盡きぬなり。
- (五) この勝れたる寶乘に 善逝に聞ける聲聞も さらばこの菩薩は遊戯しつゝ、もろくの菩薩は遊戯しつゝ、みな道場に至るなり。
- (六) 底沙^{テイシヤ}汝は今かく知りぬべし 除きて十方求むとも 最上人の方便を、
- (七) 汝等は我が子、我は父 多俱胝切も焼かれける 我は苦より逐ひ出せり、汝等を三界の怖難より、
- (八) かく我滅度を説きしかど たい佛乗を求むれば 汝等今なほ滅度せず、
- (九) こゝにあらゆる菩薩あり これ時那の善巧方便なり 流轉の苦より解脱せん。みな我が佛則を聽聞す、もろくの菩薩を引導す。

*秦譯には第九十四偈を脱す

*底沙は舍利子の名なり

譬喻品第三

- (一〇) 卑劣少小の愛欲を 世の導師なる無異語者は 苦を聖諦とぞ説きにける。
- (一一) 無知小智のものありて 集愛欲は苦本ぞと 苦の根本を見ざるべき、
- (一二) 無依こそ愛を滅すなれ 人の解脱は他にあらず かれらに道を宣説する。
- (一三) 舍利子、度脱は何よりぞ 一切いまだ解脱せず 滅諦はこれ第三ぞ、
- (一四) 最勝覺を得ざるをば 我法王に欲願あり 導師は未度と説きたまふ。
- (一五) 舍利子、これ我が法印なり 天をも有する世の爲めに 何故解脱と説かざるや、
- (一六) 有情汝に説話して 此の經を頂受するときは 最後時の我が所説なり、
- (一七) 有情汝に説話して 此の經を頂受するときは 隨喜するこの語を説きて、
- (一八) 有情汝に説話して 此の經を頂受するときは 此の人不退に至るなり。

*第一句の否語は英譯になし
*第二句は秦譯になし
*第四句を秦譯に勿妄宣傳とす

若有菩薩 於是衆中
能一心聽 諸佛實法
諸佛世尊 雖以方便
所化衆生 皆是菩薩
若人小智 深著愛欲
爲此等故 說於苦諦
衆生心喜 得未曾有
佛說苦諦 眞實無異
若有衆生 不知苦本
深著苦因 不能暫捨
爲是等故 方便說道
諸苦所因 貪欲爲本
若滅貪欲 無所依止
滅盡諸苦 名第三諦
爲滅諸故 修行於道
離諸苦縛 名得解脫
是人於何 而得解脫
但離虛妄 名爲解脫
其實未得 一切解脫
佛說是人 未實滅度
斯人未得 無上道故
我意不欲 令至滅度

譬喻品第三

- (一七)過去の如來を瞻仰し
かくある法を聞きしもの
(一八)我が高説の信者には
一切この我が比丘の衆も
(一九)この經は小智を迷惑す
諸聲聞等の境ならず
(二〇)舍利子、汝はよき信解あり
各自の智をば知らざるも
(二一)憍慢懈怠の瑜祇ヨギに
愚癡者は諸欲に著してぞ
(二二)つねに世に立つ佛則と
眉をひそめて乘を棄つ
(二三)我が在世の時また滅後
比丘に損害なすものは
- かれらに恭敬をいたしつゝ、
いまこの經を信すなり。
我も汝も見られたり、
一切の菩薩も見られたり。
通に達してかく説けるなり、
また獨覺の道ならず。
ましてや其他の聲聞は、
我を信じて進行す。
これを宣説すべからず、
所説の法を輕しむる。
我が善方便を輕賤し、
聞け、その異熟は強きなり。
この經典を輕賤し、
聞け、彼等には異熟あり。

*英譯には
汝及比丘
衆は一切
此等の菩
薩を見る
とせり

我爲法王 於法自在
安穩衆生 故現於世
汝舍利弗 我此法印
爲欲利益 世間故説
在所遊方 勿妄宣傳
若有聞者 隨喜頂受
當知是人 阿鞞跋致
若有信受 此經法者
是人已曾 見過去佛
恭敬供養 亦聞是法
若人有能 信汝所説
則爲見我 亦見於汝
及比丘僧 并諸菩薩
斯法華經 爲深智説
淺識聞之 迷惑不解
一切聲聞 及辟支佛
於此經中 力所不及
汝舍利弗 尙於此經
以信得入 况餘聲聞
其餘聲聞 信佛語故
隨順此經 非已智分
又舍利弗 憍慢懈怠

- (二四)人間に死し阿鼻致に
その、ち尙も多中劫
(二五)捺落の中に死する時
無力の犬や野干にて
(二六)我が勝覺を憎惡する
斑點瘍腫やぶみ痒かゆみあり
(二七)有情につねに侮ざられ
各處に杖に驚きて
(二八)佛規を謗れる小智者は
荷負して鞭捶を受くるなり
(二九)または野干となるもあり
聚落の童子強迫し
(三〇)愚者またそこに死して後
ひとしく五百由旬那の
- 滿一切は住すなり、
愚者等は死してそこに墮つ。
それより傍生に墮つるなり、
他人の玩具となれるなり。
彼等の色は黒くして、
毛髮もなく力なし。
土塊に打たれて啼哭す、
瘦身飢渴に苦しめり。
また駱駝も驢もなり、
食を求めて餘念なし。
醜みにくき一目不具にして、
愚者は土塊に打たるなり。
愚癡闇鈍に轉生し、
長身有情となるもあり。

計我見者 莫說此經
凡夫淺識 深著五欲
聞不能解 亦勿爲說
若人不信 毀謗此經
則斷一切 世間佛種
或復繁整 而懷疑惑
汝當聽說 此人罪報
若佛在世 若滅度後
其有誹謗 如斯經典
見有讀誦 書持經者
輕賤憎嫉 而懷結恨
此人罪報 汝今復聽
其人命終 入阿鼻獄
具足一切 劫盡更生
如是展轉 至無數劫
從地獄出 當墮畜生
若狗野干 其形頹瘦
驚駭疥癩 人所觸燒
又復爲人 之所惡賤
常困飢飢 骨肉枯竭
生受楚毒 死被瓦石
斷佛種故 受斯罪報

譬喻品第三

(二二)多俱胝有情に食はまれつゝ、
かゝる經をば誹謗して
(二三)人身を得るそのときも
彼等は不具また跛足にて
(二四)この佛道を信せざる
惡臭口より出づるなり
(二五)貧窮にして勞役し
彼等に多き病あり
(二六)彼等給事を作すときも
施與物もごく損失す
(二七)良醫の與へし順方の
またその痛苦を増益し
(二八)其他偷盜を作すもあり
其他は貨物を抄切し

足なく宛轉腹行す、
かくこそ苦受を感ずなれ。
この我が經を信せざる、
背偈一目愚鈍なり。
彼等を世間は信受せず、
鬼魅は彼等の身に入れり。
つねに他に侍し力なし、
依怙なく世間に彷徨す。
その主は施與するこゝろなし、
これその惡の結果なり。
藥を彼等の得るときも、
病は終りに行かぬなり。
爭鬪攻撃開戦し、
みなかの惡業に應報す。

若作鹿野 或生墮中
身常負重 加諸杖捶
但念水艸 餘無所知
謗斯經故 獲罪如是
有作野干 來人聚落
身體疥癩 又無一目
爲諸童子 之所打擲
受諸苦痛 或時致死
於此死已 更受躄身
其形長大 五百由旬
躄駘無足 腕轉腹行
爲諸小蟲 之所唼食
晝夜受苦 無有休息
謗斯經故 獲罪如是
若得爲人 諸根暗鈍
婬陋癡癡 盲聾背偈
有所言說 人不信受
口氣常臭 鬼魅所著
貧窮下賤 爲人所使
多病消瘦 無所依怙
雖親附人 人不在意
若有所得 尋復忘失

譬喻品第三

(二八)この我が佛規を誹謗して
世主をも彼は永く見す
(二九)愚癡者は法を聽聞せず
この覺道を誹謗して
(三〇)また千那由他俱胝劫
彼の闇鈍不具なるは
(三一)地獄は彼の園地なり
驢豚野干と狗の中
(三二)たごひ人身を得たりとも
つねに貧しく他に事ふ
(三三)病は彼の衣服なり
疥癬、癩瘡また皮膚
(三四)身見は彼の害者なり
彼の情慾いごつよく

大地を制する人帝王、
彼の所住は難處なり。
彼は耳なく知覺なし、
彼の安慰はさらになし。
恒河の沙のごとくにて、
經を謗れる結果なり。
不幸地は彼の住處なり、
彼はつねに住すなり。
聾盲または愚鈍なり、
これその時の負擔なり。
俱胝那由他の身の創と、
痲風、小瘤、惡臭あり。
彼の怒力は増益す、
つねに畜類を樂しめり。

難處の梵語阿利那は無時と譯すべし佛法を聞く時なき八難處を云ふ

若修醫道 順方治病
 更增佗疾 或復致死
 若自有病 無人救療
 設服良藥 而復增劇
 若他反逆 抄劫竊盜
 如是等罪 橫羅其殃
 如斯罪人 永不見佛
 衆聖之王 說法教化
 如斯罪人 常生難處
 狂聾心亂 永不聞法
 於無數劫 如恒河沙
 生輒墮癡 諸根不具
 常處地獄 如遊園觀
 在餘惡道 如已舍宅
 駝驢豬狗 是其行處
 謗斯經故 獲罪如是
 若得爲人 聾盲瘡癩
 貧窮諸衰 以自莊嚴
 水腫乾癆 疥癩癰疽
 如是等病 以爲衣服
 身常臭處 垢穢不淨
 深著我見 增益瞋恚

淫欲熾盛 不擇禽獸
 謗斯經故 獲罪如是
 告舍利弗 謗斯經者
 若說其罪 罪却不盡
 以是因緣 我故語汝
 無智人中 莫說此經
 若有利根 智慧明了
 多聞強識 求佛道者
 如是之人 乃可爲說
 若人曾見 億百千佛
 植諸善本 深心堅固
 如是之人 乃可爲說
 若人精進 常修慈心
 不惜身命 乃可爲說
 若人恭敬 無有異心
 離諸凡愚 獨處山澤
 如是之人 乃可爲說
 又舍利弗 若見有人
 捨惡知識 親近善友
 如是之人 乃可爲說
 若見佛子 持戒清潔
 如淨明珠 求大乘經

譬喻品第三

(二三)舍利子、今日もしも我
 この我が經を誹謗する
 (二四)舍利子、我この義利を見て
 汝、無智人の前にして
 (二五)たゞし聰明多聞にて
 最勝覺に發趣せば
 (二六)多俱胝佛を拜見し
 志樂堅固の者あらば
 (二七)精進につねに慈心あり
 身命をすてんものあらば
 (二八)つねに恭敬し異心なく
 巖居に満足するものは
 (二九)諸善友には親近し
 かゝる佛子を見る時は
 滿切罪過を説き得るも、
 彼の罪過を盡し得ず。
 汝に告ぐることぞある、
 かゝる經をば説くなかれ。
 念あり識あり智あるもの、
 第一義をば聽かしめよ。
 無量の善を積植し、
 第一義をば聽かしめよ。
 長夜にこゝに慈悲ありて、
 その前にこの經を説け。
 凡愚の交りさらになく、
 この妙經を聽かしめよ。
 諸惡友をは遠離する、
 この經典を説き示せ。

(四三)摩尼寶のごと破戒せず
 かゝる佛子を見る時は
 (四四)つねに質直にして怒りなく
 善逝を恭敬するものあらば
 (四五)無著清淨の心にて
 會中に説法のものあらば
 (四六)一切智性を求めつゝ
 善説比丘を尋ねつゝ
 (四七)方等經を持ちつゝ
 一偈も持たぬものあらば
 (四八)如來の遺形を持たんと
 かくこの經を求むもの
 (四九)他の經典にこゝろなく
 凡愚に應ずるものとして
 方等經を受習する、
 その前にこの經を説け。
 一切有情を哀愍し、
 その前にこの經を説け。
 俱胝那由他の譬喻をもて、
 その爲めにこの經を説け。
 合掌恭敬頂受せり、
 また十方を經めぐれり。
 その餘をこのむ心なく、
 この妙經を聽かしめよ。
 人は至心に求むなり、
 得たらば頂戴受持すべし。
 順世其他の群籍も、
 かれらをすて、これを説け。

譬喻品第三

如是之人 乃可爲說
若人無瞋 質直柔軟
常愍一切 恭敬諸佛
如是之人 乃可爲說
復有佛子 於大衆中
以清淨心 種種因緣
譬諭言辭 說法無礙
如是之人 乃可爲說
若有比丘 爲一切智
四方求法 合掌頂受
但樂受持 大乘經典
乃至不受 餘經一偈
如是之人 乃可爲說
如人至心 求佛舍利
如是求經 得已頂受
其人復 志求餘經
亦未曾念 外道典籍
如是之人 乃可爲說
告舍利弗 我說是相
求佛道者 窮劫不盡
如是等人 則能信解
汝當爲說 妙法華經

譬喻品第三

〔四〕舍利子よ、我は滿切も 千億相もて説き得べし、
最勝覺に發趣する 彼等にこの經を説き示せ。

右聖妙法蓮華法門に於て譬喻品第三

妙法蓮華經

信解品第四

爾時慧命須菩提、
摩訶迦旃延、摩訶迦
葉、摩訶目犍連、從佛
所聞、未曾有法、世尊
授舍利弗、阿耨多羅
三藐三菩提記、發希
有心、歡喜踊躍、即從
座起、整衣服、偏袒右
肩、右膝著地、一心合
掌、曲躬恭敬、瞻仰尊
顏、而白佛言。

我等居僧之首、年
並朽邁、自謂已得涅
槃、無所堪任、不復進
求、阿耨多羅三藐三

信解品第四

其時具壽なる須菩提〔Subhūti〕と具壽なる摩訶迦多衍耶
那〔Mahā-kāśyapa〕と具壽なる摩訶迦葉波〔Mahā-kāśyapa〕と具
壽なる摩訶目犍連耶那〔Mahā-maudgalyāyana〕とは、この曾て聞
かざる、かゝる法を聞き、又現前に世尊より具壽なる舍利子
に授けたまへる〔無上正等覺の記を聞き、奇異と未曾有と
歡喜とを得たり即時に座より起ち、世尊の在す所へ近づけ
り、近づきて、偏へに右肩を袒ぬぎ、右膝輪を地に著け、世尊の
在す所へ合掌を向け、屈曲偏向の躬を以て、現前に世尊を見
つゝ、即ち世尊に白して曰く。

『世尊よ我等は實に朽邁老耄せり、此の比丘衆〔の中〕に於て
長老として尊敬せられ、老朽にして、滅度を得たりとせり。
世尊よ、我等は無上正等覺に於て勉勵せず、方も精進行も有

信解品第四

菩提。世尊往昔。說法
既久。我時在座。身體
疲懈。但念空。無相無
作。於薩菩薩法。遊戲神
通。淨佛國土。成就衆
生。心不喜樂。所以者
何。世尊令我等。出於
三界。得涅槃證。又今
我等。年已朽邁。於佛
教化菩薩。阿耨多羅
三藐三菩提。不生一
念。好樂之心。我等今
於佛前。聞授聲聞。阿
耨多羅三藐三菩提
記。心甚歡喜。得未曾
有。不謂於今。忽然得
聞。希有之法。深自慶
幸。獲大善利。無量珍

信解品第四

らざるなり。又世尊法を説きて久しく坐し、我等も亦其説
法(の座)に在りしと雖も、世尊よ、久しく坐し、久しく世尊に事
へたる我等の(身體の)分支分も節支節も苦痛せり。この故
に世尊よ、我等は世尊の説きたまへる法を、一切空無相無願
なりと啓顯し、此等の諸法に於ても、或は佛國莊嚴に於ても、
或は菩薩の遊戲に於ても、或は如來の遊戲に於ても、我等は
樂欲を生ぜざるなり。其故は、世尊よ、此三界より出で、滅
度を得たる(の)想あり、而して我等は老朽なればなり。この
故に世尊よ、我等は他の菩薩に無上正等覺を教示すと雖も、
世尊よ、我等は亦一の欲念をも生ぜざるなり。世尊よ、我等
は今世尊より聲聞にも授けたまへる(無上正等覺の)記あり
と聞きて、奇異と未曾有と大得とを得たり。世尊よ、今日忽
然此の曾て聞かざる、かゝる如來音を聞きて、世尊よ、我等は
大寶を得たり、又我等は無量寶を得たり。世尊よ、我等は此

*英譯は啓顯するこ
と能はず
と譯すれ
ども今は
梵本に従
ふ亦秦譯
にも合す
るなり

寶。不求自得。世尊我
等今者。樂説譬論。以
明新義。

譬若有人。年既幼
穉。捨父逃逝。久住他
國。或十。或二十。至五十
歲。年既長大。加復窮
困。馳聘四方。以求衣
食。漸漸遊行。遇向本
國。其父先來。求子不
得。中止一城。其家大
富。財寶無量。金銀。瑞
璃。珊瑚。琥珀。頗梨珠
等。其諸倉庫。悉皆盈
溢。多有僮僕。臣佐吏
民。象馬車乘。牛羊無
數。出入息利。乃徧佗
國。商估賈客。亦甚衆
多。

の要求思索せざる、かゝる大寶を得たり。世尊よ、我等は明
かに知れり、善逝よ、我等は明かに知れり。
『世尊よ、譬へば人ありて父の所より逃れ去りて他國に往
かむ。其處に或は二十、或は三十、或は四十、或は五十(年)と、多
年間彼は住せむ。時に世尊よ、彼(父)は大人となり、而して他
(其子)は貧者となり、衣食の爲めの生業を求め、十方に奔走し
つゝ、他國に往かむ。又彼の父は其他の國に往きて、多き富
と穀と金塊と金庫と穀倉とを有し、多き金と銀と摩尼珠と
眞珠と青玉と螺殼と石と珊瑚と金銀とを具足し、多き奴婢
備作備功を有し、多き象馬車乘牛羊を具足せり。大なる僕
従あり、諸大國中の富者なり、多き作業と放利と農商とを管
せり。』

『時に世尊よ、其貧人は衣食を求むる爲めに、次第に村落都
府城市州郡王國首府に求めつゝ、彼多き財と金塊と金と金

*英譯には
金を大地
方に置く
と譯せり

信解品第四

父。所止之城。父每念子。與子離別。五十餘年。而未曾向人。說如此事。但自思惟。心懷悔恨。自念老朽。多有財物。金銀珍寶。倉庫盈溢。無有子息。一旦終沒。財物散失。無所委付。是以慙懣。每憶其子。復作是念。我若得子。委付財物。坦然快樂。無復憂慮。世尊。

爾時窮子。備貨展轉。遇到父舍。住立門側。遙見其父。踞師子牀。寶几承足。諸婆羅門。刹利居士。皆敬恭

圍繞。以真珠瓔珞。價值千萬。莊嚴其身。吏民僮僕。手執白拂。侍立左右。覆以寶帳。垂諸華幡。香水灑地。散衆名華。羅列寶物。出內取與。有如是等。種種嚴飾。威德特尊。窮子見父。有大力勢。即懷恐怖。悔來至此。竊作是念。此或是王。或是王等。非我備力。得物之處。不如往至貧里。肆力有地。衣食易得。若久住此。或見逼迫。強使我作。

作是念已。疾走而去。時富長者。於師子座。見子便識。心大歡

庫と穀倉とを有する人なる、彼の父の住する都府に達せむ。時に世尊よ、多き財と金と金庫と穀倉とを有する其貧人の父は、其都府に住しつゝ、常恒に五十年前に失ひたる子を憶念せむ、而して憶念しつゝ、未だ曾て(之を)人に語らず、唯自ら自身を苦しめ、かく思慮せむ。「我は朽邁老耄せり、我に多き金塊と金と財と穀と金庫と穀倉とあり、而して我には子あることなし、我若し死せば一切此(物)は委付する所なくして散失せん」と。彼は反復して(かく)其子を憶念せむ。「嗚呼、若し我れ我が子に此財積を委付することを得ば我は快樂を得たる者とならん」と。

『時に世尊よ、其貧人は衣食を求めつゝ、次第に彼多き金塊と金と穀と金庫と穀倉とを有する幸福なる人の家に近づくかむ。時に世尊よ、其貧人の父は、自身の家門に於て、婆羅門(Brahmana) 刹帝利(Kshatriya) 吠舍(Vaisya) 戍達羅(Gandhara)の衆

に圍繞恭敬せられ、金と銀とを以て飾られたる足臺ある大師子座の上に坐し、百千俱胝の金塊を以て事を作しつゝ、白拂を以て扇がれ、真珠と華とを散布して寶の瓔珞を垂れたる天蓋の張られたる地上に、大なる威風を以て坐せん。世尊よ、其貧人は自身の父が自身の家門に於て、かゝる威風を以て坐し、大衆に圍繞せられて、家主の事を作せるを見き。見了りて、又恐怖し、惱亂し、戰慄し、心を動かして、かく思惟しき。「圖らざりき我れ此王或は王族に遭遇せんとは、我等の作業は此處にあることなし、我等は去らん、貧里は少勞を以て我等の衣食を得べきなり、好し我れ久しく此處に留まりて、或は強制せられ、或は他の過失を招くべからず」と。

『時に世尊よ、其貧人は苦の相續あらんことを念ふの恐怖を以て速かに走り去り、其處に留まらざらん。時に世尊よ、其富人は自身の家門に於て、師子座に坐し、其自身の子を見

喜。即作是念。我財物
庫藏。今有所付。我常
思念此子。無由見之。
而忽自來。甚適我願。
我雖年朽。

猶故貪惜。即遣傍
人。急追將還。爾時使
者。疾走往捉。窮子驚
愕。稱怨大喚。我不相
犯。何爲見捉。使者執
之愈急。強牽將還。子
時窮子。自念無罪。而
被囚執。此必定死。轉
更惶怖。悶絕。躡地。父
逝見之。而語便言。不
須此人。勿強將來。以
冷水灑面。令得醒悟。

莫復與語。所以者何。
父知其子。志意下劣。
自知豪貴。無子所難。
審知是子。

而以方便。不語佗
人。云是我子。使者語
之。我今放汝。隨意所
趣。窮子歡喜。得未曾
有。從地而起。往至貧
里。以求衣食。爾時長
者。將欲誘引其子。而
設方便。密遣二人。形
色憔悴。無威德者。汝
可詣彼。徐語窮子。此
有作處。倍與汝直。窮
子若許。將來使作。若
言欲何所作。便可語

るご共に之を認識せん。見了りて、又満足し、爽神にして、深
く喜び、甚だ悦び、歡喜心を生じてかく思惟しき。「奇異なり、
今や實に此の大なる金塊と金と富と穀と金庫とを穀倉と
を委付すべき者を得たり、我れ常に彼を念ひしに、彼れ自ら
來れり、而して我は朽邁老耄せり」と。

『時に世尊よ、子の渴望に苦める其人は即時に、急使を發遣
して告げて曰く。「行け君等、速かに此人を携へ來れど。時
に世尊よ、其使人は皆速かに走りて其貧人を捕へん、時に世
尊よ、其貧人は恐怖し、憊亂し、戰慄し、心を動かして、大喚聲を
發し、叫喚して曰く。「我は仁者等を干犯せることなし」と。
其時其使人は虐待を以て、其叫喚せる貧人を牽引せん。又
其貧人は恐怖し、憊亂し、戰慄し、心を動かして、かく思惟しき。
「我は囚はれ、刑せらるゝこと莫からんや、我は(必ず)死せん」
と。彼は悶絶して地に仆れん、又彼の父は周章し、殆んど失

心して、其使人に、「君等しかく此人を携へ來ること勿れ」
と言ひ、冷水を彼に灑ぎて、復た言はざらん。其故は、其家主
は彼貧人の小信なること、自身の尊貴なること、を知り、
又彼は我が子なりと知ればなり。

『時に世尊よ、其家主は善巧方便を以て、誰にも此は我が子
なりと語らざらむ。時に世尊よ、其家主は他の人に告げて
曰く。「行け汝、嗚呼人よ、かく此貧人に告げよ。行け汝、嗚呼
人よ、汝の意の如く汝は自由なり」と。かく言へる時、其人
は彼に聽從し、其貧人の所に近づかむ、近づきてかく其貧人
に告げて曰く。「行け汝、嗚呼人よ、汝の意の如く汝は自由な
り」と。其時其貧人は此語を聞きて、奇異と未曾有とを得
む。彼は其地より起ちて、衣食を求むる爲めに貧里に近づ
かむ。其時其家主は其貧人を誘引せん爲めに善巧方便を
施設せむ。彼は二人の顔色憔悴して力の少なき者を用ひ

之。履汝除糞。我等二人亦共汝作。時二使人即求窟子。既已得之。具陳上事。爾時窟子先取其價。尋與除糞。其父見子。怒而怪之。又以佗日。於窓牖中。遙見子身。羸瘦憔悴。糞土塵盆。汗穢不淨。

即脫瓔珞。細頸上服。嚴飾之具。更著麤弊。垢膩之衣。塵土全身。右手執持。除糞之器。狀有所畏。語諸作

告げて曰く。「汝等二人は此處に來りし人のあらん所に行き、自身の語を以て、日俸を二倍して彼れを備ひ、我が家に於て業を作さしめよ。若し彼れ何の業をか作すべきと言はば、我等二人と共に塵埃の堆積を掃除すべきなりと言ふべし」と。其時其二人は其貧人を搜索して、其業を以て備約せむ。其時其二人と其貧人とは其大富人より(日)俸を取り、其家に於て塵埃の堆積を掃除せむ。又其大富人の家の近傍に於て茅屋の中に居住せむ。而して其富人は窓牖より其自身の子の塵埃の堆積を掃除するを見む。見りて又奇異(の想)を得む。

『其時家主は自身の家より降り、瓔珞莊嚴を捨て、褻淨嚴麗の服を脱し、垢膩の衣を著し、右手に籃を執り、塵土を以て自身を汗し、遠くより話しつゝ、彼貧人の所に近づかむ、近づきてかく言はむ。「君等籃を運べ、立つこと勿れ、塵を去れ」と。

人。汝等勤作。勿得懈怠。以方便故。得近其子。後復告言。唯男子。汝常此作。勿復餘去。當加汝價。諸有所須。盆器米麩。鹽酢之屬。莫自疑難。亦有老弊使人。須者相給。好自安意。我如汝父。勿復憂慮。所以者何。我年老大。而汝小壯。汝常作時。無有欺怠。嗔恨怨言。都不見汝。有此諸惡。如餘作人。自今已後。如所生子。

即時長者。更與作字。名之爲兒。爾時窟

此方便を以て其子に説話して曰く。「嗚呼人よ、汝は此處に在りて業を作せ、復た他に往くこと勿れ、我は汝に増俸を與ふべし。若しは瓶、若しは小瓶、若しは器皿、若しは木片、若しは鹽、若しは食、若しは衣服の價の要求あらば、疑ふことなく我に請へ。嗚呼人よ、我に古白衣あり、若し其要求あらば我に請へ、我之を汝に與ふべし。嗚呼人よ、かゝる家具の要求あらば、我は一切之を汝に與ふべし。嗚呼人よ、汝は安樂なれ、我を汝の父の如く思ふべし。其故は、我は老大にして汝は少壯なり、汝我が爲めに此塵埃の堆積を掃除して多くの業を作せり。嗚呼人よ、又汝の業を作すや、邪曲妄慢虛偽の所作あることなし。嗚呼人よ、他の作業人に此諸惡あるも、都べて汝に一の惡業をも見ず。今より後、汝は我が所生の子の如し」と。

『時に世尊よ、其家主は其貧人を子と呼び、又其貧人は其家

子。雖欣此遇。猶故自謂。客作賤人。由是之故。於二十年中。常令除糞。過是已後。心相體信。入出無難。然其所止。猶在本處。

世尊爾時長者。有疾。自知將死不久。語窮子言。我今多有金銀珍寶。倉庫盈溢。其中多少。所應取與。汝悉知之。我心如是。當體此意。所以者何。今我與汝。便爲不異。宜加用心。無令漏失。

爾時窮子。即受教勅。領知衆物。金銀珍寶。及諸庫藏。而無憾取。一餐之意。然其所

止。故在本處。下劣之心。亦未能捨。

復經少時。父知子意。漸已通泰。成就大志。自鄙先心。臨欲終時。而命其子。并會親族。國王大臣。刹利居士。皆悉已集。即自宣言。諸君當知。此是我子。我之所生。於某城中。捨吾逃走。恰傳辛苦。五十餘年。其本字某。我名某甲。昔在本城。懷憂推覓。忽於此間。遇會得之。此實我子。我實其父。今吾所有。一切財物。皆是子有。先所出內。是子所知。

世尊是時窮子。聞父此言。即大歡喜。得未曾有。而作是念。我本無心。有所請求。今此寶藏。自然而至。

主に對して父の想を生せむ。是故にて世尊よ、子を渴望せる其家主は二十年間其子をして塵埃の堆積を掃除せしめむ。二十年を過ぎて、其貧人は疑ふことなく其家主の家に出入すと雖も、尙茅屋の中に止住せむ。

『時に世尊よ、其家主は衰弱し、自身の死時の迫まれるを知り、其貧人に告げて曰く、「來れ汝、嗚呼人よ、我に此の多き金塊と金と富と穀と金庫と穀倉とあり、我れ疾めり、我れ之を與へて取らしめ、且つ委付すべき者あらんことを欲するなり。汝悉く之を領知せよ。其故は、我れ此の物の主たるが如く、汝も亦然ればなり、然れども汝今より後、之を損失すること勿れ」と。』

『時に世尊よ、其貧人は此方便を以て、其家主の多き金塊と金と富と穀と金庫と穀倉とを領知すと雖も、自ら之を欲するの意なし、又其中より乃至唯少量の麵粉の價をも要求せ

ず、貧人の思を爲しつゝ、茅屋の中に居住せん。

『時に世尊よ、其家主は其子の堪能熟達なる護持者なることを知り、又尊貴なる思想と共に鬱念あること、往日貧困の念を避け、慚愧嫌惡することをも知り、死時に臨みて彼貧人を招き、親族の大衆と、王或は王族の前と、又都人士の面前とに紹介して告げて曰く。「聞け諸君、此は我が子なり、實に我が生む所なり、某城あり、其處より彼は脱走して五十年を経たり、其名は某甲、我が名も亦某甲なり、我は其都城より彼を搜索しつゝ、此處に來りしなり、彼は我が子なり、我は彼の父なり、我は我が所得一切の物を彼に附與す、而して我が所有の富は、彼れ悉く之を領知すべし」と。』

『時に世尊よ、其貧人は其時かゝる言を聞き、奇異と未曾有とを得て、かく思惟せん、「忽然として我れ實に此の金塊と金と富と穀と金庫と穀倉とを得たり」と。』

世尊。大富長者。則是如來。我等皆似佛子。如來常說。我等爲子。世尊我等。以三苦故。於生死中。受諸熾惱。迷惑無知。樂著小法。今日世尊。令我等思惟。闕除諸法。戲論之。冀我等於中。勤加精進。得至涅槃。一日之價。既得此已。心大歡喜。自以爲足。便自謂言。於佛法中。勤精進故。所得弘多。然世尊。先知我等。心著弊欲。樂於小法。便見經捨。不爲分別。汝等當有。如來知見。寶藏之分。世尊以方便力。說如來智慧。我等從佛。得涅槃。一日之價。以爲大得。於此大乘。無

有志求。我等又因。如來智慧。爲諸菩薩。開示演說。而自於此。無有志願。所以者何。佛知我等。心樂小法。以方便力。隨我等說。而我等不知。真是佛子。今我等方知。世尊於佛智慧。無所吝惜。所以者何。我等昔來。真是佛子。而但樂小法。若我等有。樂大之心。佛則爲我。說大乘。法。今此經中。唯說一乘。而昔於菩薩前。毀譽聽聞。樂小法者。然佛實以。大乘教化。是故我等。說本無心。有所歸求。今法王大寶。自然而至。如佛子所應得者。皆已得之。

信解品第四

『是の如く實に世尊よ、我等は如來の子に齊し、而して如來は彼家主の如く、汝等は我が子なりと告げたまふ。又世尊よ、我等は三苦に惱まされたりき、何をか三苦とする、苦苦と行苦と壞苦となり、而して流轉に於て下劣なる信解ありき。是の故に世尊は我等をして塵聚の如き下劣なる諸法を思惟せしめたまへり。世尊よ、我等は此等諸法に關係してよ、勤加精進し、唯滅度を日俸の如くしつゝ、行道せり。又世尊よ、我等は此滅度を得たるを以て満足し、而して此等の諸法に關係し、勤加精進して、如來より得たる所多しと思へり。然れども如來は我等の信解の下劣なることを知りたまふ、是の故に世尊よ、此の如來の智藏は即ち汝等に屬すべしと注意し分別し告げたまふことなし。然れども世尊は善巧方便を以て我等を此の如來の智藏に於て嗣子なりと定めたまへり、而して我等は如來智を得たりと雖も、世尊よ、我等

河口將來の梵本は行苦を第三とせり

は志求なきなり。其故は、我等は如來より日俸として滅度を得るを我等の大得と知ればなり。世尊よ、我等は菩薩摩訶薩の爲めに、如來智見を首として、勝れたる法の説示を爲し、如來智を開示演說せり、而して世尊よ、我等は志願なきなり。其故は如來は善巧方便を以て我等の信解を知りたまふと雖も、我等は之を知覺せざればなり、即ち世尊今、我等は世尊の眞子なりと説きたまひ、又世尊は我等に如來智の嗣子たることを想起せしめたまへり。其故は、我等は實に如來の眞子なりと雖も、信解下劣なればなり。若し世尊我等の信解力を見たまふならば、世尊は我等に菩薩の名を與へたふべし、又世尊は諸菩薩の前に於て我等に二の所作を爲さしめたまへり、我等は下劣なる信解者と呼ばれ、而して勝れたる佛道に於て彼等諸菩薩を勸發せり。世尊は今我等の信解力を知りて之を言へり、是の故に世尊よ、我等はかく

信解品第四

爾時摩訶迦葉。欲
重宣此義。而說偈言
我等今日 聞佛音教
歡喜踊躍 得未曾有
佛說聲聞 當得作佛
無上寶聚 不求自得
譬如童子 幼穉無識
捨父逃逝 遠到佗土
周流諸國 五十餘年
其父憂念 四方推求
求之既疲 頓止一城
造立舍宅 五欲自娛
其家巨富 多諸金銀
碑磔碼碯 眞珠瓊瑤
象馬牛羊 輦輿車乘
田業僮僕 人民衆多

出入息利 乃徧他國
商估賈人 無處不有
千萬億衆 圍繞恭敬
常爲王者 之所愛念
羣臣豪族 皆共宗重
以諸緣故 往來者衆
豪富如是 有大力勢
而年朽邁 益憂念子
夙夜惟念 死時將至
癡子捨我 五十餘年
庫藏諸物 當如之何
爾時窮子 求索衣食
從邑至邑 從國至國
或有所得 或無所得
飢餓羸瘦 體生瘡癬
漸次經歷 到父住城
備貨展轉 遂至父舍
爾時長者 於其門內

信解品第四

言はむ。我等無心無欲無求無尋無待無望にして速かに一切智性の寶を得たることは如來の諸子の如し」と。

其時具壽なる大迦葉波は迦陀を説て曰く。

- (一) 奇異と未曾有とを得てぞ 御聲を聞きて歡喜せる、我等今日はからずも 導師の妙音を聞き得たり。
- (二) この妙寶の大聚をば 暫時に今日得たるなり、思惟せずまた尋求せず 聞きてぞ奇異を感ずなる。
- (三) 譬へば幼稚の人ありて 愚人の爲めに誘はれ、父の前より逃れ行き 遠き他方に行く如し。
- (四) その子の逃亡せるを知り 其時父は憂愁す、憂ひて彼は方維まで 五十餘年も周流す。
- (五) かく彼其子を尋ねつゝ 他の大城に到りてぞ、いつゝの欲を娛しみて 舍宅を造り住すなる。
- (六) 多き金塊、金銀と 穀、富、螺殼、石、珊瑚、

諸象と諸馬と僮僕と 牛と家畜と羊あり。

(七) 利息、收入、田地あり 奴婢と多くの僕衆あり、

千億人に敬はれ 常時に王者に愛せらる。

(八) 村に住する村人も 市人も合掌して禮す、

多くの事業を作す人も 商人も彼に近づけり。

(九) かく其人は富みたれど 老朽、老邁、老耄し、

子の憂愁を念ひつゝ 常時に日夜を過ぐるなり。

(一〇) かゝる愚癡なる我の子は 逃亡してより五十年、

この大金庫我にあり また我が死時は近づけり。

(一一) その時彼の愚なる子は 常時に貧困窮乏し、

村より村に周遊し 食と衣服を求めけり。

(一二) 求索しつゝもあるときは 得ることありまたはなし、

癡子は旅行に羸瘦し 身體、瘡癬に汗れたり。

(一三) 父の住せる城に著き 食と衣服を求めつゝ、

信解品第四

施大資帳 處師子座
 眷屬圍繞 諸人侍衛
 或有計算 金銀寶物
 出內財產 注記券疏
 窮子見父 豪貴尊嚴
 謂是國王 若是王等
 驚怖自怪 何故至此
 覆自念言 我若久住
 或見逼迫 強驅使作
 思惟是已 馳走而去
 借問貧里 欲往備作
 長者是時 在師子座
 遙見其子 默而識之
 即敕使者 追捉將來
 窮子驚嘆 迷悶躡地
 是人執我 必當見殺
 何用衣食 使我至此
 長者知子 愚癡狹劣

不信我言 不信是父
 即以方便 更遣餘人
 眇目煙陋 無威德者
 汝可語之 云當相雇
 除諸糞穢 倍與汝價
 窮子聞之 歡喜隨來
 爲除糞穢 淨諸房舍
 長者於牖 常見其子
 念子愚劣 樂爲鄙事
 於是長者 著弊垢衣
 執除糞器 往到子所
 方便附近 語令動作
 既益汝價 并塗足油
 飲食充足 薦席厚暖
 如是苦言 汝當動作
 又以頓語 若如我子
 長者有智 漸令入出
 經二十年 執作家事

信解品第四

自身の父の舍宅まで 次第に來り到りけり。
 (四) 隆盛大富の其人は 多百の人に圍遶され、
 空に張りたる蓋の下 門に師子座に安坐せり。
 (五) 委員は普く侍立し 富と金塊を計るあり、
 券疏を注記するもあり 出納息利するもあり。
 (六) 貧しき人はこの家主の 華美なる家を見ては云ふ、
 今何故此處に來りしや 此れは王者か王族か。
 (七) 今損害を得しめざれ 執はれて強制せられんぞ、
 其人はかく思惟して 貧里を尋ねて馳せ去れり。
 (八) 彼は其子を見し故に 師子座に坐して喜べり、
 この貧人を引き來よと 使者を彼處に送りけり。
 (九) その人直ちに執はれき 處刑者實に近づけり、
 衣食も今は無用ぞと 執はれしまゝ悶絶す。
 (一〇) 大富の賢者は見て思ふ 愚癡者の信解は卑うなり、

我がこの高大を疑ひて 是れ我が父とも信せずと。
 (二) かの作業者を求めよと 偏僻、眇目、下愚にして、
 惡衣、陋黒、卑劣なる 諸人に彼は命じけり。
 (三) 糞尿をもて充滿せる この惡臭の塵積を、
 淨める爲めに業を作せ 二倍の日俸を與ふべし。
 (四) その人はこの言を聞き 來りて其地を淨めつゝ、
 家の傍なる茅屋に 居住の處を作りけり。
 (五) つねに窓牖の間より 其人を見ておもへらく、
 我が子の信解は卑小なり 塵積の掃除をのみなせり。
 (六) 彼は下りて籃を執り 垢に汗れし服を著て、
 業を作さぬと非難して 其人の傍に近づけり。
 (七) 我は二倍の日俸と 二倍の足油を與ふべし、
 鹽ある食をも汝に與へ 野菜と服をも與ふべし。
 (八) その時はかく非難して 賢者は後に慰籍せり、

信解品第四

示其金銀 眞珠頗黎
 諸物出入 皆使令知
 猶處門外 止宿艸菴
 自念貧事 我無此物
 父知子心 漸已曠大
 欲與財物 即聚親族
 國王大臣 刹利居士
 於此大衆 說是我子
 捨我佗行 經五十歲
 自見子來 已二十年
 昔於某城 而失是子
 周行求索 邇來至此
 凡我所有 舍宅人民
 悉以付之 恣其所用
 子念昔貧 志意下劣
 今於父所 大獲珍寶
 井及舍宅 一切財物
 甚大歡喜 得未曾有

信解品第四

汝は善く業を作せるなり
 漸く家に入らしめて
 その人に業を作さしめて
 金塊、眞珠、水精を
 ことごとく之を計算し
 その家の外の茅屋に
 我にはかゝる物なしと
 彼はかく知りおもへらく
 朋友親族集め云ふ
 彼は王者と都人士と
 衆會の中にてかく言へり
 五十年は已に満ち
 彼は某城に失ひて
 我が一切の所有主ぞ

實に我が子なり疑念なし。
 二十年を満つるまで、
 遂に信用せしめたり。
 彼は家中に貯へて、
 一切所有を思惟せり。
 愚人は獨り住しつゝ、
 貧事を思ふばかりなり。
 我が子は尊貴の想あり、
 一切所有を與へんと。
 多き商人を呼び集め、
 曾て失ふ是れ我が子。
 相見ても亦二十年、
 尋ねて我は來りにき。
 悉く彼に附與すべし、

佛亦如是 知我樂小
 未曾說言 汝等作佛
 而說我等 得諸無漏
 成就小乘 聲聞弟子
 佛敎我等 說最上道
 修習此者 當得成佛
 我承佛敎 爲大菩薩
 以諸因緣 種種譬論
 若干言辭 說無上道
 諸佛子等 從我聞法
 日夜思惟 精勤修習
 是時諸佛 即授其記
 汝於來世 當得作佛
 一切諸佛 祕藏之法
 但爲菩薩 演其實事
 而不爲我 說斯眞要
 如彼窮子 得近其父
 雖知諸物 心不憚取

信解品第四

父の富にて業を作せ
 貧窮小解を記憶して
 父の功德と産を得て
 かくも導師は我々の
 佛と成るとは聞かじめず
 世主は我等に命すらく
 彼等に、迦葉、道を説け
 我等は善逝に命せられ
 俱胝那由他の因縁もて
 時那の子我等より聞きて
 此世に佛と成るべしと
 この法藏を護りつゝ、
 彼人の信任せらるること
 この佛藏を説きつゝも

一切家産を與ふべし。
 彼は奇異をぞ感じける、
 我今安しと思ふなり。
 信解の卑小を知りたまひ、
 汝等聲聞我が子なり。
 最上覺に、發趣せる、
 道に順して成佛せん、
 大力のある諸菩薩に、
 無上の道を宣説す。
 覺の勝道を修習せり、
 其時彼等は授記せらる。
 時那の諸子に宣説し、
 奮てかゝる業を作す。
 我等は貧心を思念せり、

我等雖說 佛法寶藏
自無志願 亦復如是
我等內滅 自謂爲足
唯了此事 更無餘事
我等若聞 淨佛國土
教化衆生 都無欣樂
所以者何 一切諸法
皆悉空寂 無生無滅
無大無小 無漏無爲
如是思惟 不生喜樂
我等長夜 於佛智慧
無貪無著 無復志願
而自於法 謂是究竟
我等長夜 修習空法
得脫三界 苦惱之患
住最後身 有餘涅槃
佛所教化 得道不虛
則爲已得 報佛之恩

我等雖爲 諸佛子等
說菩薩法 以求佛道
而於是法 永無願樂
導師見捨 觀我心故
初不勸進 說有實利
如富長者 知子志劣
以方便力 柔伏其心
然後乃付 一切財寶
佛亦如是 現希有事
知樂小者 以方便力
調伏其心 乃教大智
我等今日 得未曾有
非先所望 而今自得
如彼窟子 得無量寶
世尊我今 得道得果
於無漏法 得清淨眼
我等長夜 持佛淨戒
始於今日 得其果報

信解品第四

時那智を宣説しながらも 時那智を志願せざるなり。
 (四) 自内滅を足れりとし 此智の外に餘事はなし、
 佛土の莊嚴聞く時も 我等の樂みさらになし。
 (三) 諸法は寂靜無漏にして 生と滅とを分離して、
 いかなる法もあらぬぞと かく思惟して信はなし。
 (四) 佛の無上の智慧につき 我等は長夜に無欲なり、
 我等の願はさらになし 時那は究竟と説きたまふ。
 (五) 滅度を最後のこの身に於て 長夜に空法を修習せり、
 三界の苦惱を度脱して 時那の教を成就せり。
 (四) この勝覺に發趣せる 時那の諸子に宣説す、
 我等が説ける其法に 我等の願樂さらになし。
 (四) 世の軌範師、自生者は 時を待ち我等を捨てたまふ、
 我等の信解を試みて 實利の一致を説かざりき。
 (四) 大富の人は時を得て 善巧方便せしごとく、

常に小解を伏すべし 伏者に富を興ふなり。
 (四) 善巧方便示しつゝ、 世尊の所作はいかたし、
 小解を伏せる其子等に 伏して其智を興ふなり。
 (五) 貧者の富を得るごとく 今はからずも奇異を得る、
 初めて佛の教にて 無漏最勝の果を得たり。
 (五) 長夜に我等は淨戒を 世間解の教に持ちたり、
 曾て行せし淨戒の 果をば我等は今得たり。
 (五) 第一清淨の梵行を 導師の教に修習せり、
 寂靜尊貴また無漏の その大果をば今得たり。
 (五) 我等今眞の聲聞ぞ 勝覺を廣く聞かしめん、
 また覺音を宣説す 毗瑟摩の如き聲聞ぞ。
 (五) 我等今眞の應供なり 諸天魔梵の世間より、
 一切有情の中よりも 供養を受くべき身とぞなる。
 (五) 人間界に作し難き この甚難作を作したまふ、

信解品第四

法王法中 久修梵行
 今得無漏 無上大果
 我等今者 眞是聲聞
 以佛道聲 令一切聞
 我等今者 眞阿羅漢
 於諸世間 天人覺梵
 普於其中 應受供養
 世尊大恩 以希有事
 憐愍教化 利益我等
 無量億劫 誰能報者
 手足供給 頭頂禮敬
 一切供養 皆不能報
 若以頂戴 兩肩荷負
 於恒沙劫 盡心恭敬
 又以美膳 無量寶衣
 及諸臥具 種々湯藥
 牛頭栴檀 及諸珍寶
 以起塔廟 寶衣布地

如斯等事 以用供養
 於恒沙劫 亦不能報
 諸佛希有 無量無邊
 不可思議 大神通力
 無漏無爲 諸法之王
 能爲下劣 忍于斯事
 取相凡夫 隨立爲說
 諸佛於法 得最自在
 知諸衆生 種種欲樂
 及其志力 隨所堪任
 以無量論 而爲說法
 隨諸衆生 宿世善根
 又知成熟 未成熟者
 種種等量 分別知已
 於一乘道 隨宜說三

信解品第四

無量億劫 勵むとも 誰か世尊に報じ得む。
 (五) 滿恒沙劫のそのあひだ 手と足とまた頂きと、
 頭頂と肩と乳房もて 報ずることも作しがたし。
 (五) 飲食柔硬また衣服 無垢の上被の臥牀と座、
 旃檀精舎を造立し 白紗を重敷し供養せむ。
 (五) 多種の療病の薬をも つねに善逝の供養とす、
 恒沙劫波も與ふとも 報ずることはなをかたし。
 (五) 佛は無漏、時那、大王なり 大法性なり無等力、
 大通、忍力堅固なり 愚人はこれに堪へぬなり。
 (六) 一切世自在、法自在 大自在、世間導師主は、
 相を行する者のため つねに隨宜に說法す。
 (六) 有情の事情を了知して 多種の義務をば宣説す、
 彼等の種々の解を知りて 數千の因もて說法す。
 (六) 如來は有情衆人の 性行を尋求し了知して、

世尊の二
 字は秦譯
 に從ふ梵
 本には汝
 に作る
 柔硬は食
 物の二種
 なり

羅什は第
 四句を能
 爲下劣忍
 子斯事と
 譯せり然
 れども梵
 本の動詞
 は多數に
 して佛に
 關せざる
 なり

この勝覺を示しつゝ、若干の法を説きたまふ。

右聖法蓮華法門に於て信解品第四